

書叢本日

（東）は 刀字文

士學文  
編助武木青

京東

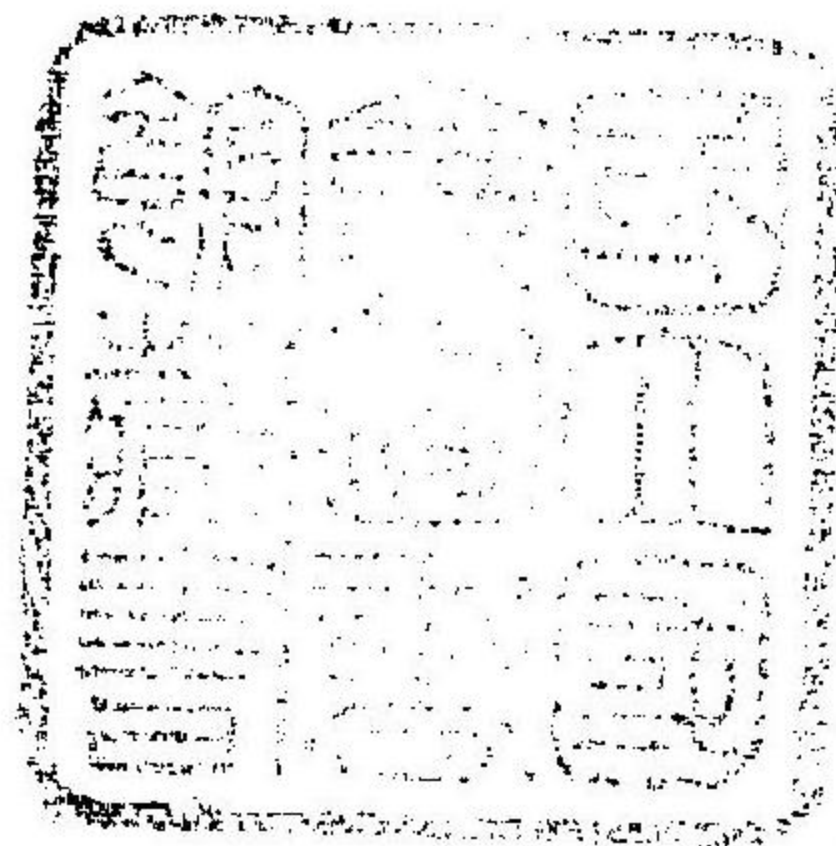
行發館十弘

又字の付束し

801.1A587m

日本書文字のはなし緒言

人類が互にその思想を交換するのは、言語によるのであるが、この言語といふものは、その時限りのもので、永遠に傳ふるとは出来ぬ、そこで、言語をあらはす爲めに、一種の記號が出来る、これが即ち文字である、そして、この文字が発生するまでには、色々の手順を経なければならぬ、これを研究して見るのも面白い事の一つである、また、世界には色々の文字がある、歐羅巴のアルファベット、亞細亞の支那文字の様に、現今の世界に、廣く公布して居るものもあれば、埃及の形象文字、バビロンの楔形文字の様に、既に不用に屬したのものもある、これ等の文字の發生の順序や、その性



222799

質の一通りを研究するのも、また面白いことの一つである。この書は、即ちこれを研究する爲めに、書いたものである。「文字のはなし」といふ標題は、いかにも漠然として居る様であるから、一言これを巻頭に辯じて置く。

明治三十六年十一月

編者 するす

## 目 録

第一章	緒 論	一頁
第二章	アルファベットの起原及びその發達	十
第三章	支那、日本及び朝鮮の文字	四十八
第四章	楔形文字	五十三
第五章	埃及の象形文字	六十九
第六章	埃及文字と他の文字との關係	八十四
第七章	クリート文字及びその同類文字	百四
第八章	希臘のバビリ及び各種の字形	百三十五

# 文字のはなし

## 第一章 緒論

吾等日本人が、常にその思想を書き表はすには、大概数千の支那文字と、四十幾個の假名文字を用ひて居るが、これと同じく、歐羅巴人の大多數は、その爲めに、アルファベット (Alphabet) と云ふ便利な記號を用ひて居る、この便利な記號は、その排べ方を色々に變ゆると、實に數千萬の多くの言語 (word) を生ずるのである、吾等はこゝに「文字のはなし」といふ標題で、この文字に關する色々の談話をし、且つ東洋諸國にて使用する文字についての談話をも試みようと思ふ。

マクスミラー (Max Mueller) 博士が言ふに、「二十三字 (Letter) 又は二十四字を色々に排べると、昔から今まで世界で用ひた色々な言語 (word) でも作ることが出来る、即ち二十三字を色々に排べると、二五八・五二〇・一六七・三八八・八四九・七六四・〇〇〇〇の音 (sound) を生じ、二十四字なれば、六二〇・四四八四〇・一七三三・三三九四三九三六〇〇〇〇の音を作ることが出来る」と、併し同博士も言つた通り、これ等の非常に多い音の中には、單に音聲として、口で發音することは出来ても、吾等の思想を表はすに足る言語では無いのが澤山ある。

今、世の中で用ひて居る言語を解剖すると、中々面白い歴史がある、一寸手近い例を英語で舉げる、book (書籍) はアングロサクソン (Anglo-Saxon) 語の boc (山毛櫨) から出て居るらし、この木の皮は文字を書く材料の一種で有つたのだ、それと同じく、Library (書籍館) 及び Libel (書籍) は、羅典語の Liber (木の肉皮) から出て居る、これは當時紙の代りに使用したものだ、Paper (紙) は埃及語の Papyrus から出て居る、これは誰も知つての通り、埃及では、この植物の心で紙を作つたのだ、Code (法典) は羅典語の Codex (樹幹) から出て居る、Letter (文字) は羅典語の Littera (塗る) が佛蘭西語の Lettre になつて、遂に英語の Letter になつた、これは羅馬では臘を塗つた板に、文字を彫りつけたからだ。

右に述べた通り、言語はその綴字も、その意味も、昔から漸次變遷した者であるが、この言語を記す文字も、また、追々と發達して來たものである、抑々太古の人間は、文字を書くことも、勿論、これを讀むことも知らずに、永い間過して來たに相違ない、當時の社會では、讀み書きを知らないでも、社交上必ずしも差支なく、文字を少しも知らぬとて、上手な畫工にもなれるし、立派な技手にもなれるし、農學家としても、商業家としても、生活して行くことが出來たので有るからして、文字の出來ぬ前長い間、人生の凡ての事柄は、皆口碑として残つて居つたらしい、日本の古代では、所謂「言ひ継ぎ語り継ぎ」の方法なのである、併し此口碑といふ者は、時が經つに従つて忘れ

られるとも有るし、誤り傳へられることも有つて、この方法では、非常に澤山の事柄を、後世に傳へて行くことは出來ない、であるからして、昔の人が、いくら記憶力が強からうとも、これを記す方法が立たない間は、知識は漸次増しても、これを後世に傳へることが出來ぬ、故に、前代の人の知識が書き物に残つて居ない以上は、現代の人の知識も至つて少ないものである、且つ、書き記す方法の出來ない間は、遠方の人と思想を通じ合つたり、又は何事をも他人と契約する等の事が出來ない、記憶に残つて居らない事柄は、皆後世には分らなくなつてしまふ、假令記憶はして居つても、時代の分らないものは、後の世の人の疑ひを増すのみである、太古の人の持つて居つた知識は、皆後世の人には分らず、古人の勞力して得たる、科學進歩の根元たるべき觀察實驗等も、亦後世に傳はらない、人間は單に飲食をして生活して行くに過ぎない、當時の人々が物に感じ興に乗じて歌つた歌謠もあらうが、少しも傳はらない、當時にあつてはいつまでも續くべき萬世不易の文學などは、決して成り立たない、かくて、書き記す方法が發明になつてから、野蠻の有様から文明の域に進歩する道が開け、人智が間斷なく進む様になつた、これはつまり、過去の時代のことだが、現在の事柄の様によく分る、いつまで經つても残つて居る書き物が、ある爲であるのだ、世界の知識の富を集めて、これを保存する上から考へても、筆といふものは、實に劍よりも有力なものだ。

吾等が吾等の思想を書き表はす記號を知らないとするれば、どんなものであるか、それを想像する爲

めに、文字を知らぬ野蠻人が、始めて世界に文字といふ便利な記號のあるのを知つた時の談話をして見よう、今から九十年許り前に、ウィリヤム・マリナー (William Mariner) といふ人は、南太平洋のトンガ (Tonga) 島の附近でその船が破れて大に困難して、墨汁がなにもものだから、何か外の汁で手紙を書いて、これを、「この島にいた船があれば、何船でもよいから」その船長の所へ持つて行くことを、一人の土人に頼んだ、すると島の王のフィンノー (Finow) はこれを聞いて、何も意味は分からなけれど、その手紙を持つて来て、マリナーの乗組員の一人を脅迫して、これを尋問した、乗組員がこれを説明すると、王は更にこれに命じて、ある事を書かせて、これを他の乗組員の處へ持つて行つて讀ませると、その書いた事柄が、ちやんと王の言つた事柄に、當つて居るものだから、大に驚いて、身も世にあらぬ心地して、大いに絶叫したと申すことで、それから、精しくその事を説明してやつて、昔見た事柄でも、昔起つた事柄でも、この文字で記して置けば、何時になつても分るといふことを話すと、王は自分の前代の王をマリナーに紹介して、共にその談を聞くことを願つた、「この文字を書いて、固く封じて、使に持たしてやると、使は其中の文言の意味を少しも知らんで、これを受信者の所へ持つて行くことが出来る」と話すと、王はこの珍話を聞いて大に喜んだが、さていふには、「これはこの島では何にもならない、この便利な記號が行はれると、謀反人がこれを利用して起り、王は一ヶ月と経たぬ中に、殺されてしまふ、併しこれは自分では知つて居り、島中

の婦人には皆知らせたい、さうすると、世の中にも知られぬ様に、その夫からも仇打されることも少くて、情婦を持つことが出来る」と、言つたさうだ、又、今から四十年計り前の噺に、印度人に、文字のことを少しも知らないのが居つて、或る宣教師から頼まれて、麵麩四塊と、その數を記した手紙を、他へ届けた、すると印度人はその一塊を途中で食つてしまつて、忽ち悪事露顯に及んだと、申すことで、その後また同じ使を頼まれた時には、今度は悪事露顯を防ぐ爲めに、途中で麵麩を食つて居る間丈け、手紙を石の下に隠して置いたさうだ、これはその手紙には、何か不思議の力があつて、悪い事をするのを見て居つて、これを届け先きへ知らせること、思つたのらしい。

野蠻人の思想は、何時でも、何處でも同じことで、上に擧げた例と同じく、文字を書いて魔術を行ふども、病を治すども、または呪になるとも、言はれて居る、これは、文字は神が始めたといふ昔噺 (Legend) から來て居るので、この昔噺こそ却つて實に無學の生産物、神秘の母なのである、アッシリヤの書物には、同國の楔形文字 (Cuneiform character) はネボ神 (Nebo) の説宣だとしてある、埃及人はソス神 (Hnuth) が文字を記した事を言ふ、支那では黃帝の時に、蒼頡といふ聖人が鳥の足跡を見て文字を作つたのださうだ、印度ではブラーマ神 (Brahma) が文字を人間に教へたので、昔噺によると、ブラーマ神の手跡は人の頭蓋骨の鋸齒狀の接ぎ目にゐるといひ、西洋でエホバの神 (Jehovah) が指で十誡 (Ten Words) を書きた様に、ブラーマ神は黄金の板に、ベタ (Veda) の經

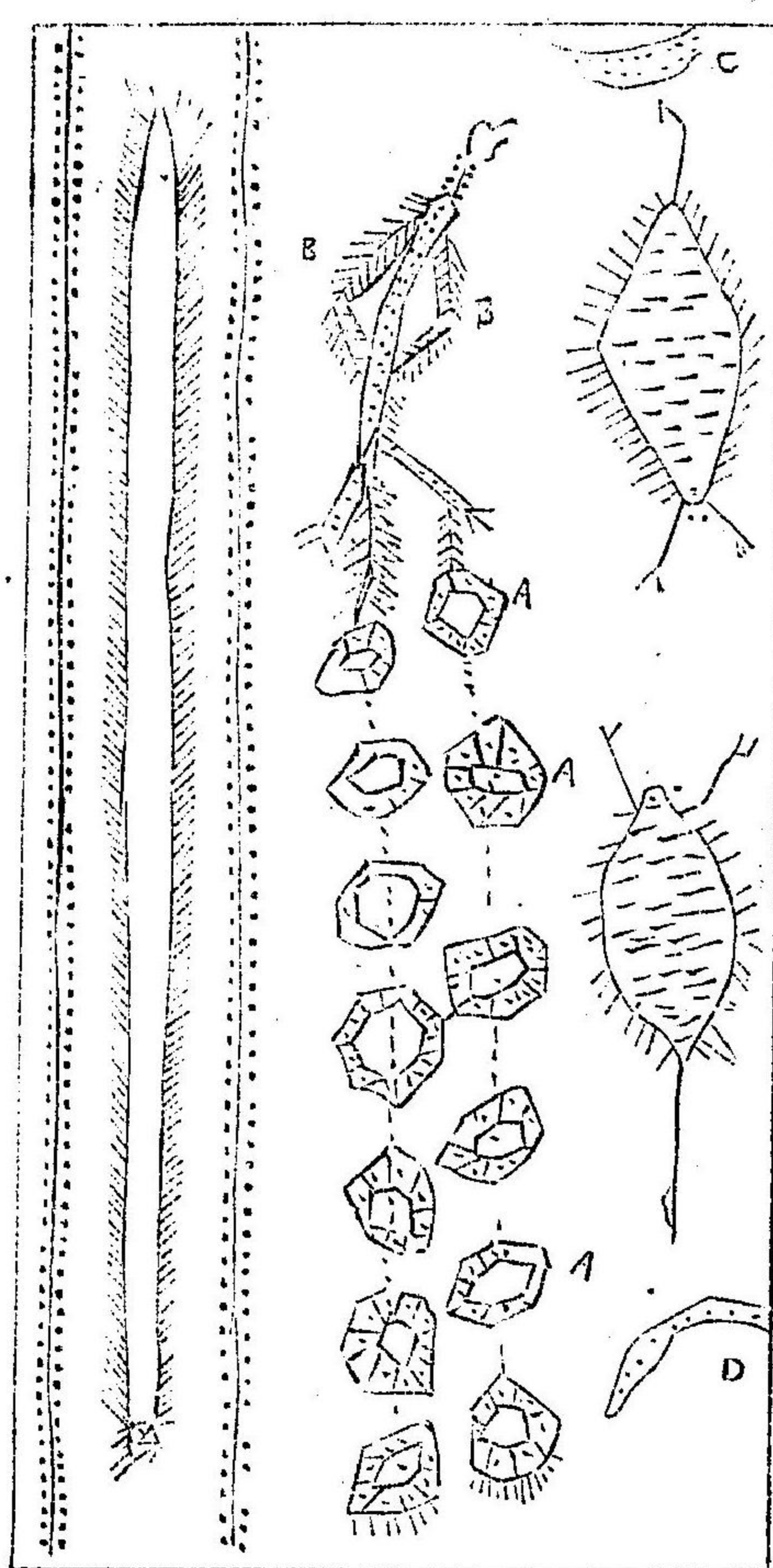
文を書いたとしてある、カドマイム(Cadmus)は、フィニシヤ(Phenicia)から希臘に文字を傳へたと  
して知られて居るが、愛蘭では、ゴール(Gaul)のヘルクレンヌ(Hercules)ともいふ、ヒギオグミオス  
(Oruios)が、文字の發明者だといふ昔噺が行はれて居る、スカンデナビヤ地方のザガ(Saga)と稱  
する昔噺では、古字ルーン(rune)の發明を、オデン神(Odin)の所爲として居る。

口より發する言語、假令は呪咀、祈禱の様なもの、信仰の上に勢力があると同じ様に、文字に書い  
た言語又は繪畫様の記號も亦信仰の勢力ある者である、猶太教のカバラの記號(Cabalistic formula)  
や、聖書經文の文句は、その主なものである、猶太人は、その額に經文を書いたものを附けて居つ  
て、これを徳義の根本とし、アビシニヤ人は護符を持つて居つて、これを惡魔除けとして居る、土  
耳其人及び亞刺比亞人は、聖典コーラン(Koran)の秋萃を袋に入れ、これを馬につけて、これでそ  
の悪い事をしない護符として居る、その他これと同じ様なことは、歐羅巴でも、まだ今日幾分か行  
はれて居る、蘇蘭土の山地では、病人をバイブル(Bible)で扇ぐことをする、我が日本などでも、隨  
分開けた今日でさへ、護符の効力を信する輩は、必ずしも下等社會とのみ限らぬ、支那人が色々の  
事を紙片に記して、門前に貼り出すのも、この一例である。

バウガン、スチーブン(Vaughan Stevens)氏は、東マラッカ(East Malacca)のセマン種(Semang  
tribe)の間に行はる、病難除け及び毒蟲除けの呪符の事を研究したが、これによると、その種族の

婦人は花の形のついた竹の櫛を挿して居る、これは疫病除けだと申すことで、籐の小枝でつけた傷や  
「むかで」に噛まれた傷除けは、また別にあるそうだが、この種族が竹に彫刻した呪符の中で、第一圖  
は「むかで」及び「さそり」除けで、第二圖は皮膚病除けの繪である。

第一圖 毒蟲除けの護符



第一圖の中央にあるのは

は雄子で、輪の様な形の  
續いて居るのは、その尾  
で、その輪はつまり尾に  
ついて居る點を示して居  
る、その左側に橙色の「む  
かで」が居る、その頭は  
雄子の尾の方を向いて居  
る、「むかで」の周圍にあ  
る點線は、「むかで」が人  
の皮膚の上を匍ひ廻つた

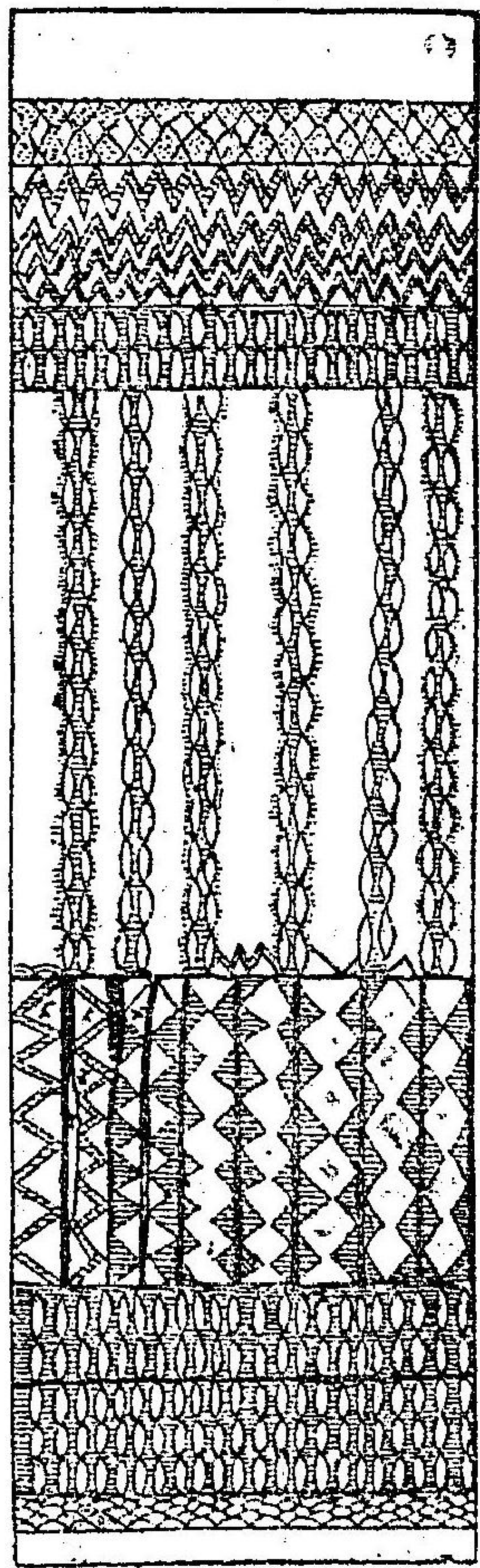
足跡だ、右の方にあるのは「さそり」で、これは二疋居る、この二疋の尾の所にある者は、この「さそり」に刺された人の肉の脹れ  
上つた所だ、「さそり」は雌よりも雄の方が毒が強くつて、鏡を二本持つて居る、上の方の「さそり」の刺した跡は二重の點線で示



してある、つまり、この繪の意味は、維子が「むかで」や「そり」を食つて、人間の骨を除くさいふこまなのだ。

第二圖のは、今少し込み入つて居つて、二種の皮膚病の呪符である、一は魚の鱗の形をして居つて、癩病の白い「ふきで」ものゝ示し、一は卵形で、皮膚の上下に固まつた處を示して居る、又幾列にも書いてあるのは、病体の部分によつて、違ふこまを顯すので、病氣が癒らなければ、必ず病毒が擴がるこまを示す爲めに、その形を漸次大きく書いてあるのだ、この呪符の意味は明確では無いけれど、似て居るものは同じ性質を持つて居るさいふ考で有るらしい、つまり、一つのものに及ぼす結果は、そのものに屬するもの、著しく

第二圖 皮膚病除けの護符



例せば、その者の肖像にも同じ結果を及ぼすさいふ考らしい、例へば、戒る人を無いものにしうと思ふ時は、その肖像を蠟で作つて、これを火で溶かし、土で作つてこれ

を水の中へ投げ込んで毀す等の事をするのこ、一つ考なのだ、こんな例は、世界の到る處、開化した國にも、野蠻人の仲間にもある事だ、日本でも、人を呪ふ爲めに、蠟人形にいのり釘をうつ風習が有つた、必竟、第二圖の様な繪を畫いて、いのれば、皮膚病除けになるさいふ考なのであらう。

凡そ世の中の物事は、それがどうして出来たか分らないものが多い、上に一二の例を示した様な

信仰習慣の事を考へても分る通り、もし文字を書くことが、ある人種とか、又は同じ人種でも、ある階級の特権であつた場合には、これは人間の心に、自由を興へる者ではなくなつて、却つて、これを束縛するものに違ひない、抑々知識は権力であるから、知識のあるものは、権力を有することになるのである、ある少數の人が勝手に作つた記號などは、始めから一般の人の用にはならない、またこれを覚えて、これを用ふるには、時間も労力も入ることになる、そこで、これを知つて居る人が、皆に用へられる様に、これを簡單に直して、遂に一般の知識傳播の基を開くのだ、であるから、これを知つて居る人、即ち知識ある人が権力者となるのだ、後世の談ではあるが、歐羅巴では、僧侶と俗人との間の権力の争ひは、永く續いて、その問題の一つなる僧侶の裁判上の特権の様なもの、その不公平を責めるものが、多いにも拘はらず、西紀一千八百二十七年まで、廢せられずに續いたではないか、この制度は、僧侶が裁判所で、刑事上の犯罪の吟味を免かる、權であつて、英王エドワード一世(Edward I)の時には、これを僧侶に限らず文字を讀めるものには、俗人にでも許すことゝなつた、死刑に相當する犯罪人でも、僧正が此特権を請求して、犯人に羅典文の書物を二三行讀ませ、これが讀めると判事が認めれば、死刑の罪人も遂に放免となるのだ、これから考へても、太古の事柄が想像するに足りる。

## 第二章 アルファベットの起原及びその發達

十

緒論はこれで止めて、我等は今、歐羅巴人が現に使用して居るアルファベットは、その始めは、どういふものから、起つたか、これを研究して見ようと思ふ。

昔から、人類と他動物との差異に關する色々の説がある、その中には「人類は玩弄物を作るものだ」とも、「火を作るものだ」とも、或は「言語を有するものだ」とも、その他色々言つて居る、併し、能く考へて見れば、これ等の説は、必竟、「人類は發明する術を有つて居る」といふことに、歸してしまふ、そして、この發明する術といふのは、人類のみに限らず、他動物にも一般に有する天性であつて、玩弄物を作り、火を作り、言語を使用する等のことは、人類に近い猿猴類中のあるものは、現にこれを行つて居る、只、その發達の度が、低いといふに止るのだ、人間のは、これ等の術がよく圓滿に發達したといふに過ぎない、要するに、これ等は程度問題といふことに落ちて、これ等の定義を以て、人類と地動物との差異を言ひ顯はすことは出來ない、餘事はさて置き、今は只、記號製造者の一としての人類を考へて見ようと思ふ。

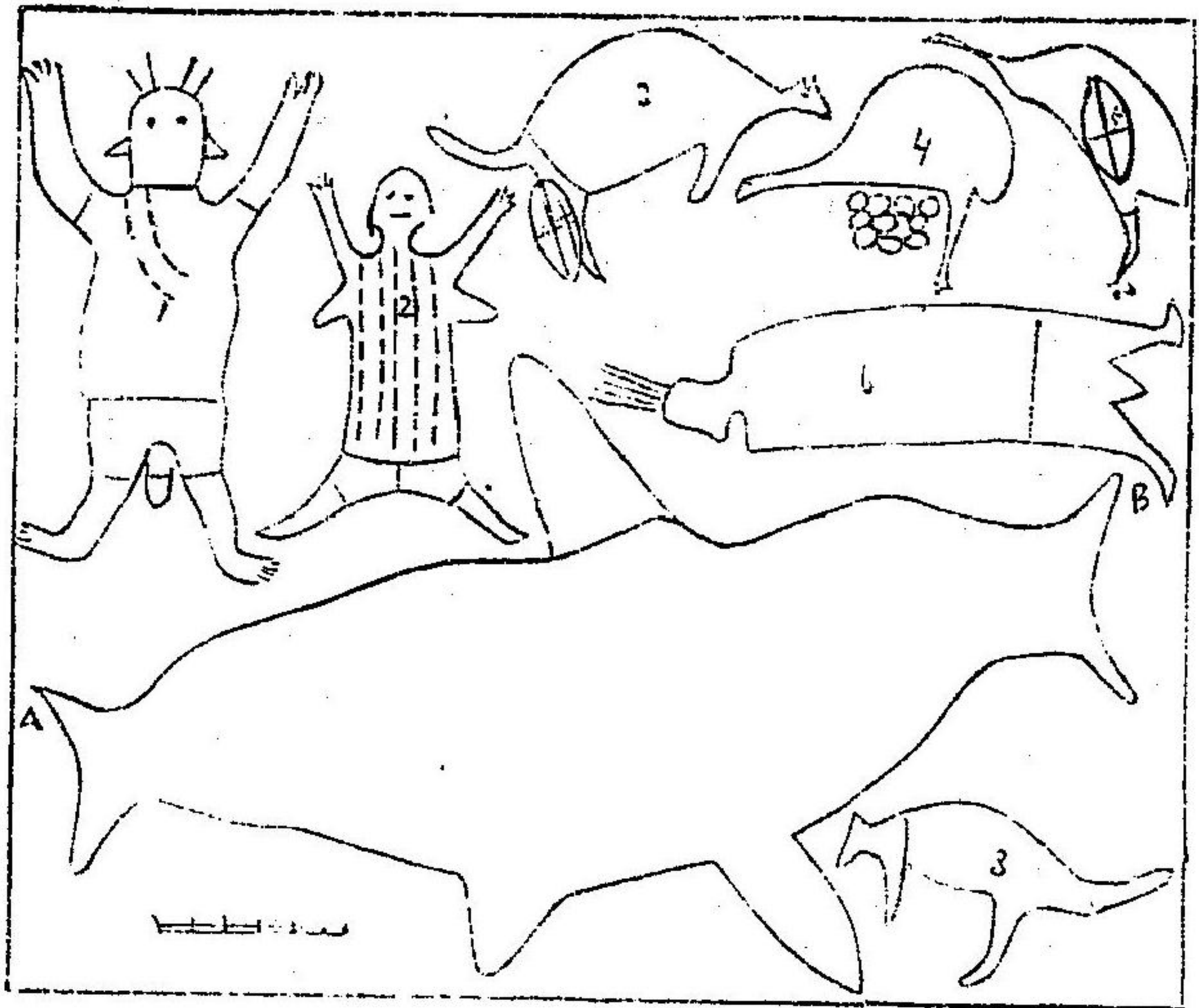
太古の人類が、技藝上の才能をもつて居つたことは、有史以前の遺物を見れば分る、これ等の遺物によると、當時人類生活の状態を推し測ることが出来る、石器類を用ひ、狩獵を業とした馴鹿時

代の野蠻人は自分や自分の捕る動物の形狀を、骨、角、石などで作つた、佛蘭西、白耳義、その他西歐羅巴の諸國には、古石器時代の洞穴があるが、それには、野生の馬に跨つて、槍を振つて居る、逞しい裸体の人物やら、ユーラス(Ursus)と名づくる野生の牛類、または羊の様な毛の生いた象に、武器を投げつけやうとして、地上に匍つて居る人物の、彫刻物が發掘された、これ等の動物の毛の多い耳、長い毛や、上の方に曲つた牙や、その足が繁つた草の中に隠れた具合などを、書き表はした所は、太古の繪畫の著しい例ではあるまいか。

上に擧げた例に於いて、別に外に、其地に人類の生活したといふ確證はないけれど、歐羅巴の西部及びその他の部分にある洞穴は、人類の住んだ跡と推定してよい、これ等の遺跡に於いて、古石器時代と近世の石器時代との間の連續して居ることは明かではないといふけれど、若しこの兩時代の中間にて、有史以前に、其の地に人類の跡を絶つた時代があつたものと見れば、何の差支もない、他人種が侵入して來た場合に限つて、一の人類が其の地に居らなくなるものとも限らないではないか、近來は考古學の研究が進歩して、北歐羅巴及び南歐羅巴に發見する太古の製作物の關係も、明かになり、また東部地中海の分も、これと關係あることが分つた、太古の物で、今日まで完全な形狀で残つて居るのは、岩石の様な堅固なものに描いたものや、陶器類ばかりであるから、標本の少ないのも、無理ならぬことだ、併し、それが中々多く残つて居るのを見ると、その分布の廣かつ

たことが分る、上に挙げた例の外に、デンマルクの岩石彫刻、

第三圖 濠洲太古の岩石彫刻



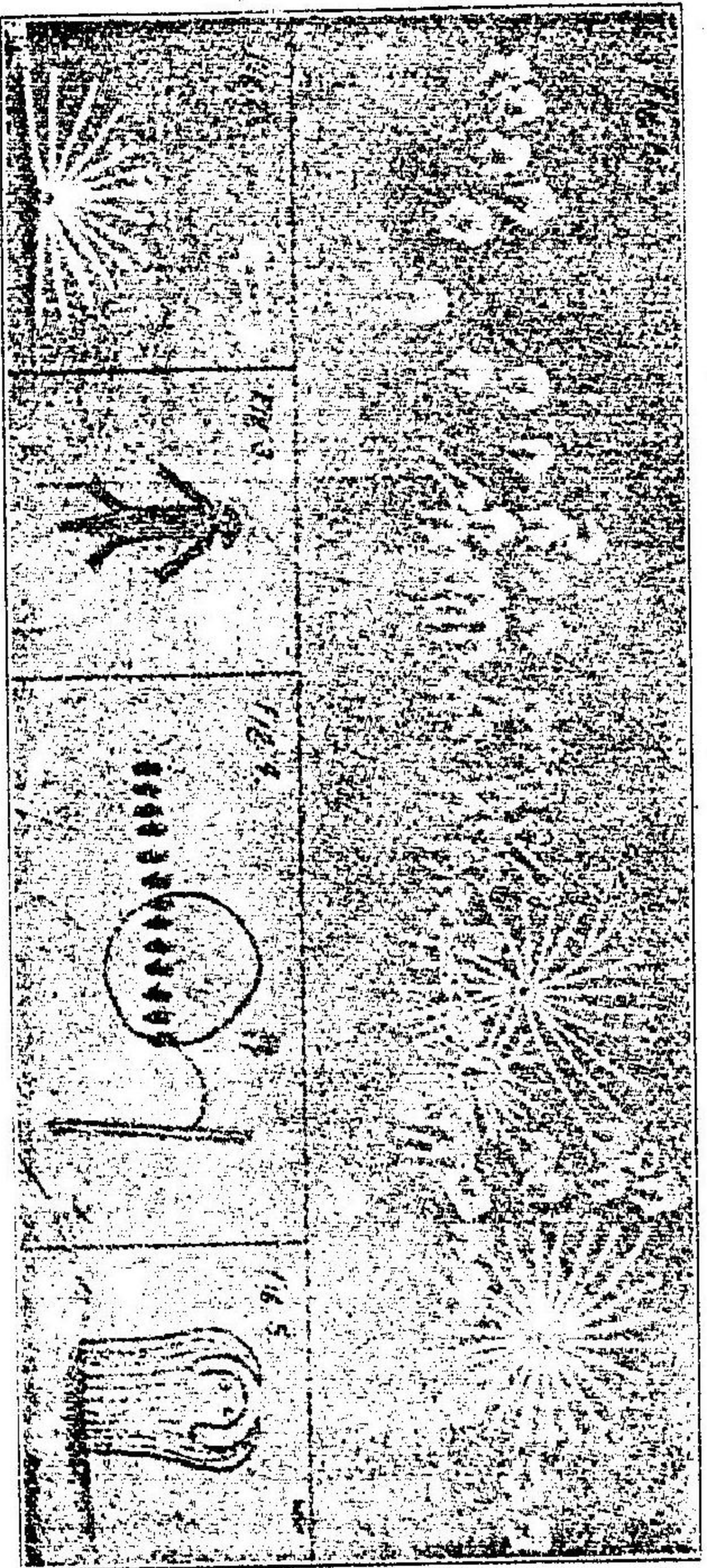
これらの繪畫から胚胎したものである、即ち、これ等の繪畫はアルファベットの母なのである、故

メルツゲデル(Muzgudel)の洞穴には、妙な記號が書いてある、又ボック、デ、カタロ(Bocle di Caltano)灣の洞穴の中に、懸かつて居る岩には、太古のスラブ種族がかいたらしい、動物や太陽の形状の繪がある、これ等はその例である。

さて、人類の智識の程度、生活の有様等は、東西古今、何れの人種でも、大概その開化の程度に應じて、それ相應になつて居るから、今の歐羅巴人の太古の遺物は、今に現存して居るものは少ないけれど、その代り、現代の野蠻人の有する繪畫を見ると、略々歐羅巴人の昔を想像することが出来る、これ等の野蠻人の繪畫は、大概意味の分らぬものではあるが、現今のアルファベットは實に

にこれ等の巖石その他に刻まれた繪畫の摸寫は、多くの例證を蒐めて、順序よくこれを研究すると、随分價值のあるものだ、それなら、かくも有益な材料を有つて居る現代の野蠻人は何なりやといふに、タスマニヤ種族(Tasmanian)が絶滅した後は、濠洲人を以て、世人は世界最下級の人種と見な

第四圖の太古の濠洲 圖四第

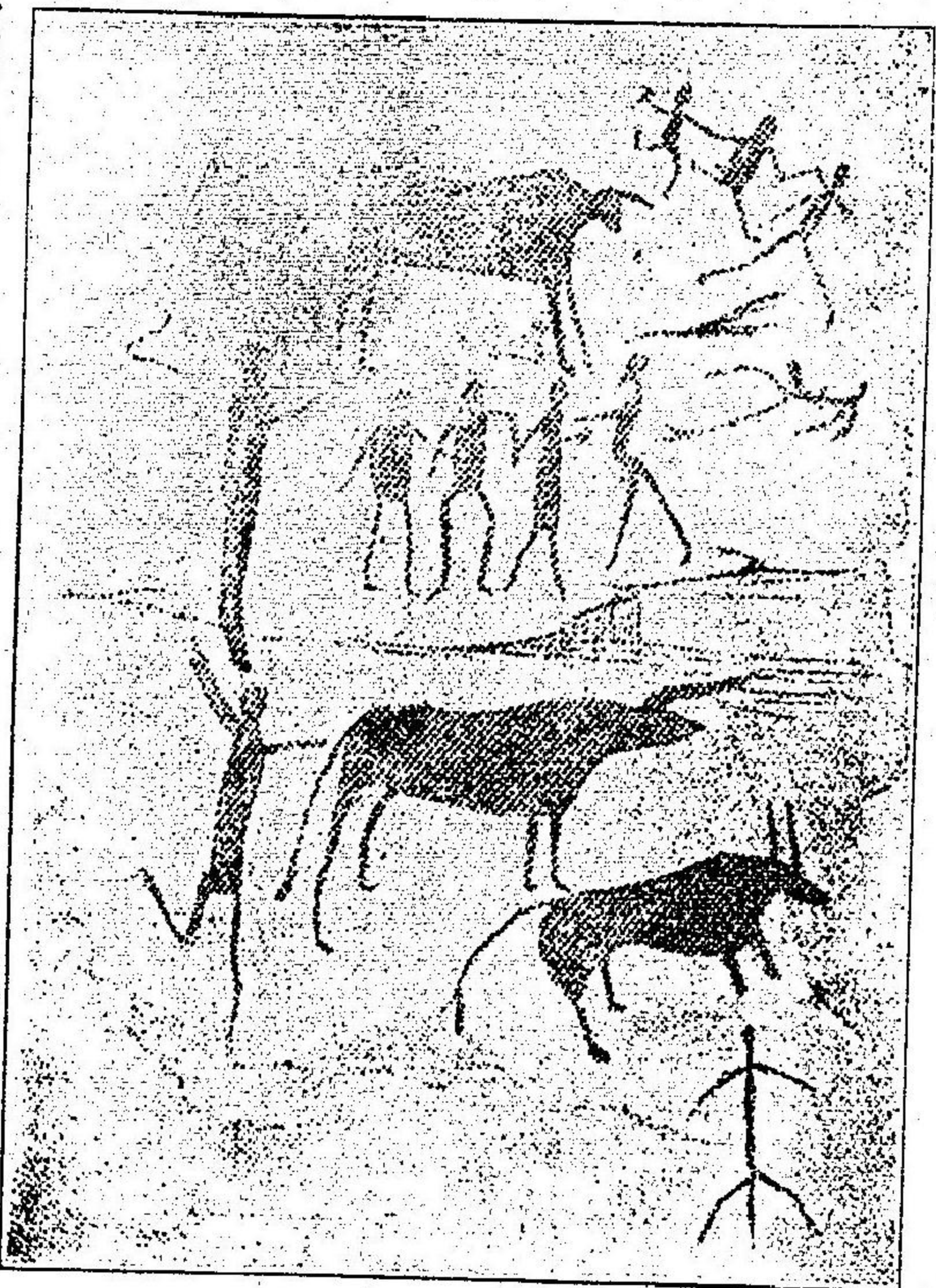


して居る、第三圖及第四圖に示した濠洲人の生産物を見ると、却つて有史以前の洞穴に住める人種の技術よりも劣等だ。

さて、これ等の濠洲の各地に存在

せる繪畫は、いつか吾等が悉く説明し得る様になるに相違無い、思ふに、これ等の繪畫の中には、その種族が、何か或る時代に起つた出來事を、畫いたのもあるし、または或る昔事を表はして居るものもあらう、またかれ等の遊戯とか快樂とかを表はして居るものもあるに相違ない。

南亞非利加の洞穴の中には、第五圖及び第六圖第七圖に示す様なブッシュマン種 (Bushman) のかいた繪畫が澤山ある、これは、濠洲人のよりは巧みなもので、その種族が狩獵をして居る所や何かを普通黒い色か、又は茶褐色にかいてある、但し、その畫の中には、



第五圖 ブッシュマン種の繪畫

戲畫に近いものもあるが、中には全く寫實的なのがあつて、頭部の裝飾、羽、珠、總などは、中々注意して書いてある。

ブッシュマン種は、今は衰微してゐる種族で、食物が欠乏すると、蜥蜴や蝗蚱や、木の根を食ふ様な種族ではあるけれど、昔噺を澤山に知つて居る、第九圖はこの種族の雨乞の呪で、ヒボボタムス(海馬)の様な雨旋獸を、雨乞の爲めに、地上に曳く圖である、その類例として、マレー半島 (Malay) のセマンツ (Semang) 種は第十圖の様な、竹へかいた雨乞の呪符を

用ふる、その繪には、雨の圖が斜の線で表はしてある、雨乞ひは開化した國にも、野蠻の種族にもよく行はれることで、羅馬の古代には、穀物が雨に浸されることを願ふ意味で、穀物の神の像を、

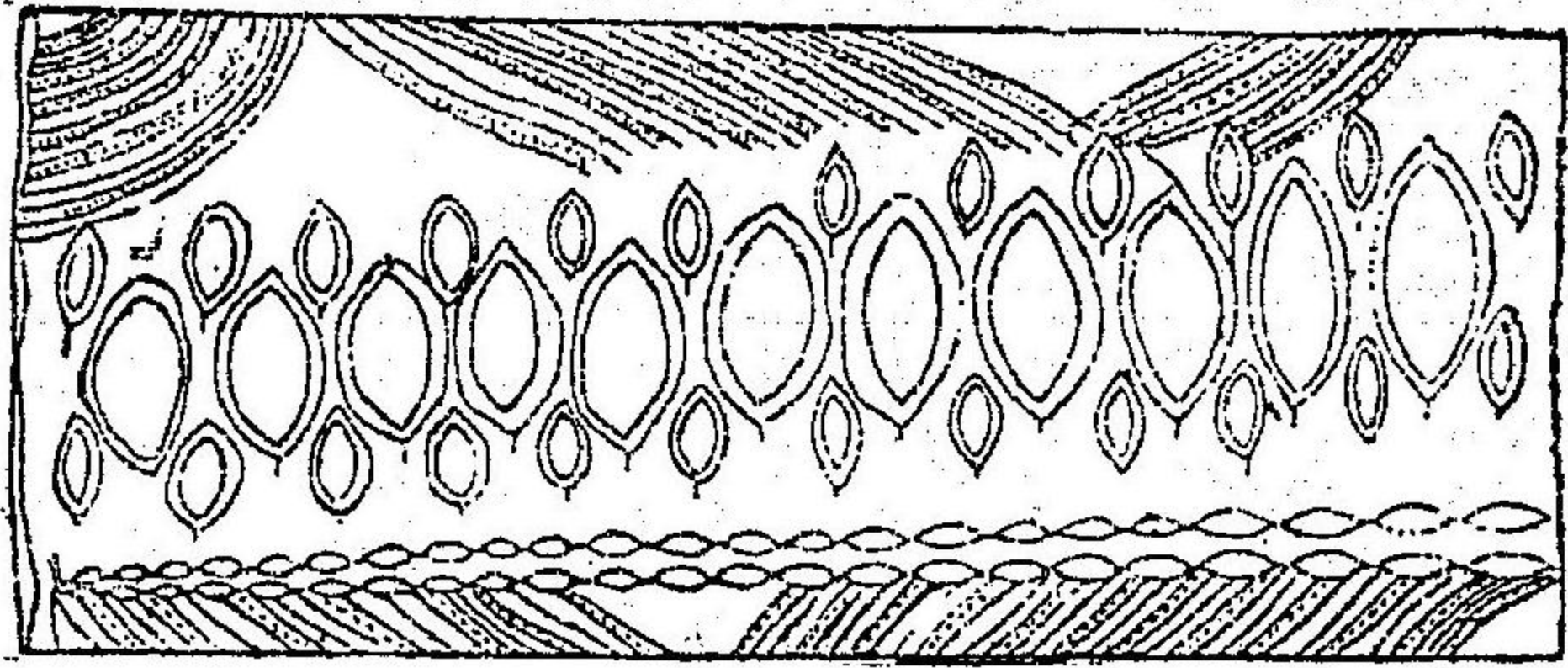


第六圖 ブッシュマン種の繪畫

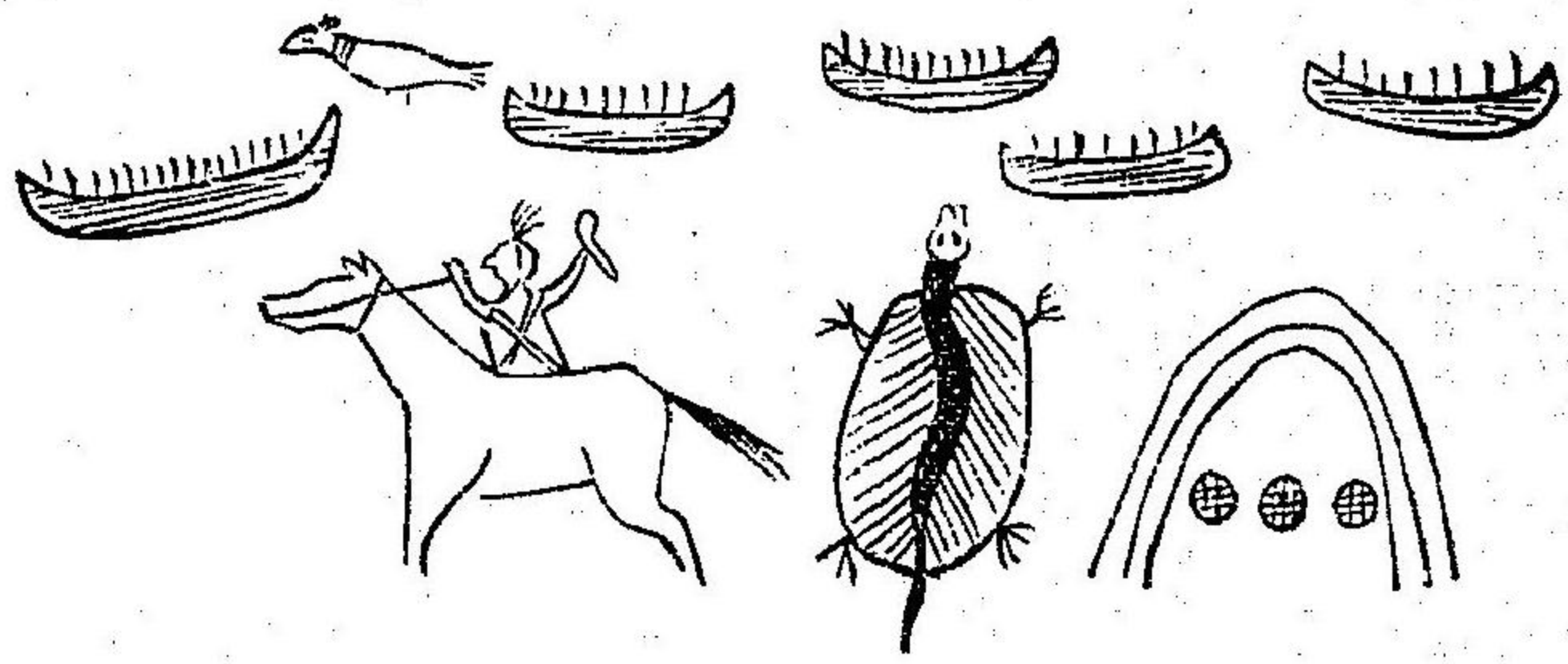
タイパー河 (Tiber) に投げこんだ、近年の噺に、露西亞の或る村では、ある農民の墳墓を發いて、その死骸に水をそそぎかけたそうなる、これも一の種雨乞の方法だといふ、雨乞の風習は、日本には今でも各地方に行はれる、歌や俳句で雨を降らせた噺もある、亞米利加でも、古い石碑には、往々繪畫様の記號が彫りつけてあるが、この石碑よりも古いのは、ギアナ (Guiana) から、ノバスコチヤ (Nova Scotia) 邊やロッキー山 (Rocky) の西方の斷崖にある繪畫だ、その中には、一吋位深さに刻みつけたのもあるし、赭赤色かまたは他の色の太い線で、書いたのもあつて、共に古色蒼然として居る、第十一圖はシーペリオル湖 (Superior) 岸の

龜の形は、北亞米利加の方で、往々陸の意味に使用するもので、思ふに、これは到着の意味であら

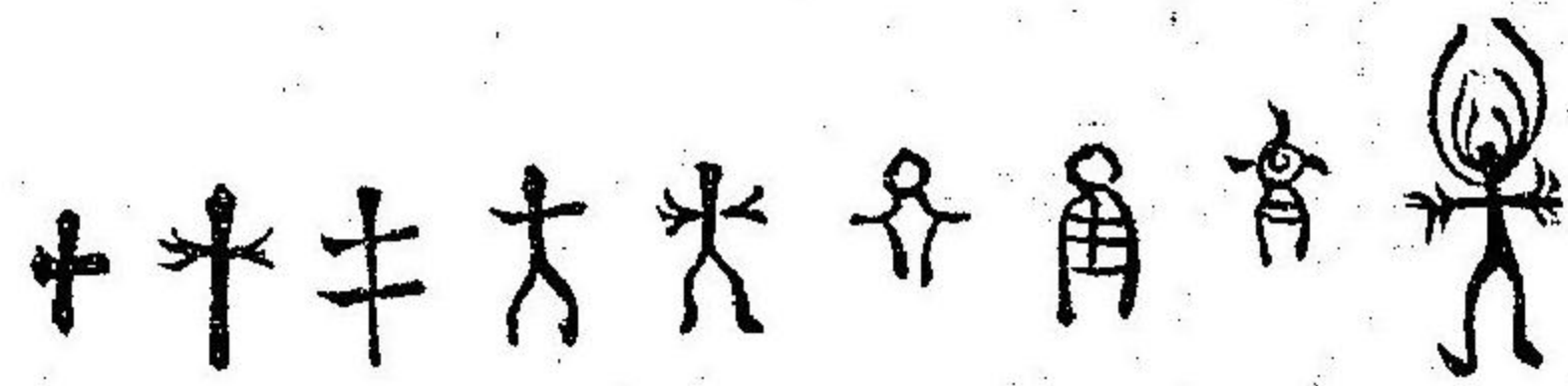
符呪之雨の種アンマセ 圖十第



録記の征遠 圖一十第



形人の種各 圖二十第

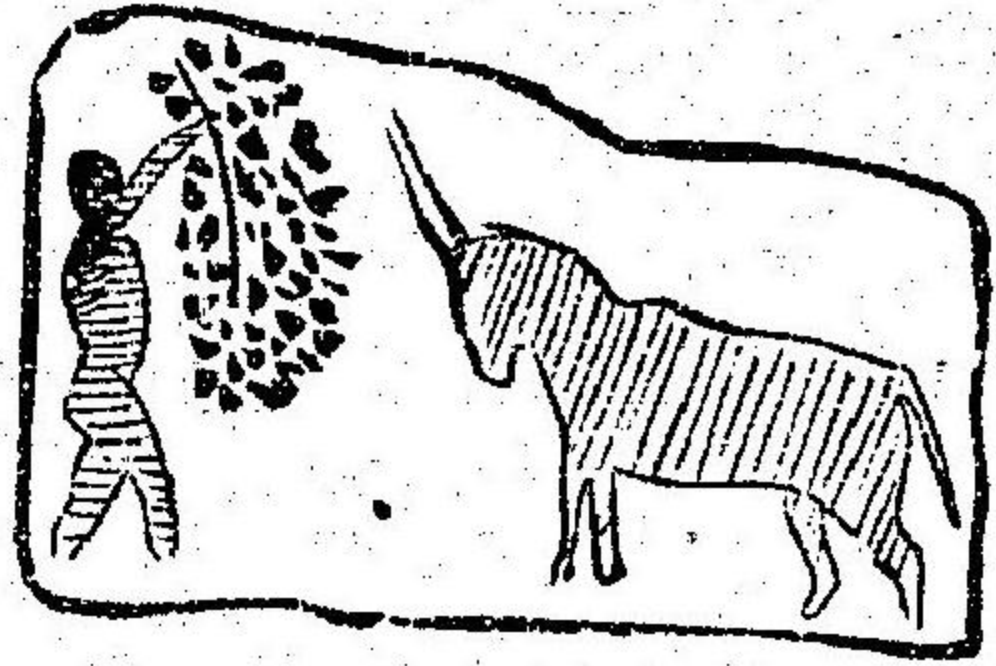


部にならんで居る、  
獨木船に、縦に棒が  
たつて居るのは、乗  
組員の數を示したも  
ので、一番左の船に、  
鳥の繪がついて居る  
のは、翡翠で、そこ  
に會長の居ることを  
示して居る、三本の  
弓形の線の下に、丸  
いものゝあるのは、  
太陽で、遠征に三日  
間を費やした意味だ

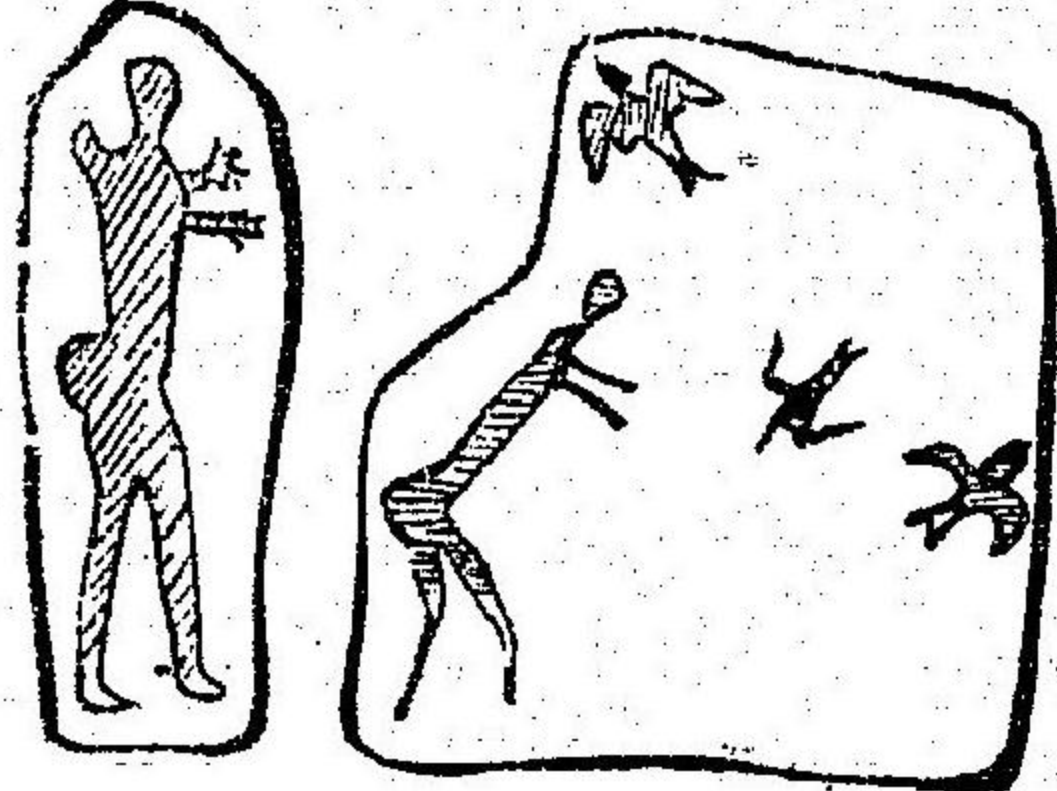
岩に書いてあるので、これは印度人の會長の率ゆる一隊が、この湖水を通過して遠征する畫だ、上



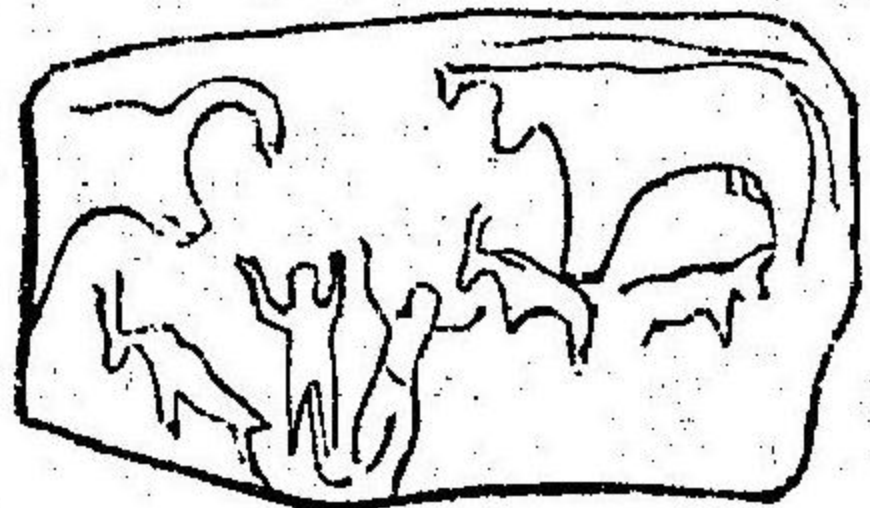
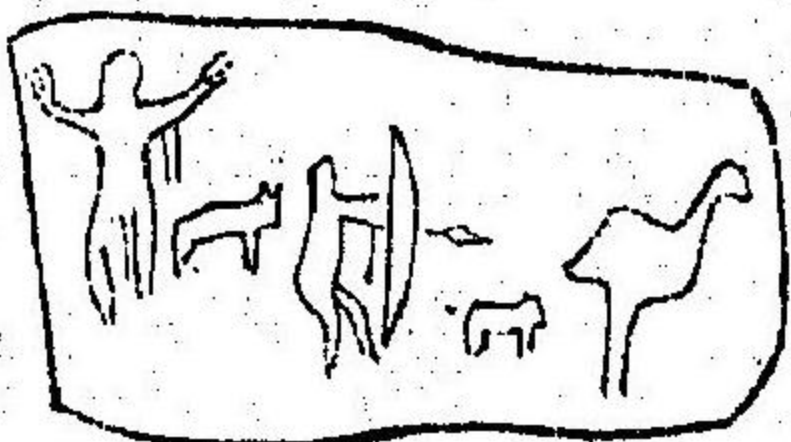
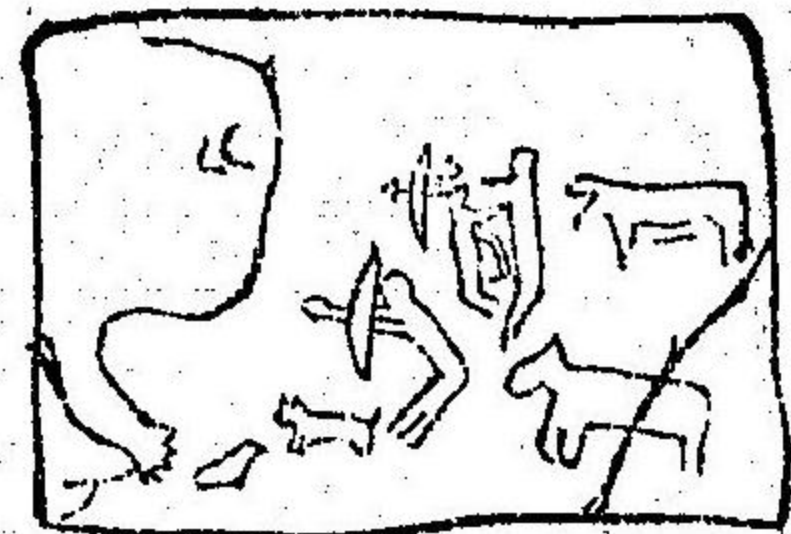
符呪之雨の種アンマセ 圖九第



第七圖 アンマセ種の岩石彫刻



第八圖 アルケリヤにある岩石彫刻



う、馬に乗つた人物が居るのは、つまり、カナダ (Canada) まで、馬で行つて、後にこの遠征が  
 あつたといふ意味らしい、この他に、或は種族の移住を示し、或は、境界とか方向とかを示すもの  
 もある、または人物の色々の形状かたちを畫いたものもある、第十二圖はその例である、この種類の繪の  
 中には、その意味の分らないものも、澤山あるが、思ふに、今のアルファベットは、これ等の繪畫  
 から起つて、追々發達して、今の様になつたのであらう。

さて現今英國で用ふるアルファベットの字形は、殆ど二千五百年許りに出來て、羅馬字 (Roman  
 type) といふ名の通り、伊太利から來たものだ、これは西紀十四世紀頃の印刷者が、それより四百  
 年許前の小字 (Minuscule Manuscript) を、少し變形したものだ、この小字といふのはアウガスタン  
 (Augustan) 時代の羅馬字から出た大字 (Uncial) の草字かじなのだ、又この羅馬字の冠字 (Capital) は、西  
 紀前三世紀頃に羅馬で用へたのと、現今用ふるのと同じなのだ、その事は羅馬法王宮殿 (Vatican) の  
 所藏のスキピオ (Scipios) の墓碑に徴して分かる。また西紀前五世紀頃の羅典文の書物と較べて  
 も同じ様なのだ。即ち現今の英國などのアルファベットは羅典系統に屬するのである。

アルファベットの發生の時代が分かれば、進んで其祖先たる羅馬字が、如何なる時期を經過して、  
 今の形になつたかを考究しよう、今これを四つの時期に分つのは、只便宜に従ふので、別に深い意  
 味はないのだ。

第一期はヒーモニック (Mnemonic) とすつて、假令は結繩の様なもので、そのものがその意味の  
 全体を表はさないけれども、そのものを見れば、記憶の助けとなるものを用ひた時期。

第二期はピクトリカル (Pictorial) とすつて、そのもの、繪をかいて、これを一目見ればその事  
 柄の意味の分る時期。

第三期はアイデオグラフィック (Ideographic) とすつて、繪が符號に變じた時期。

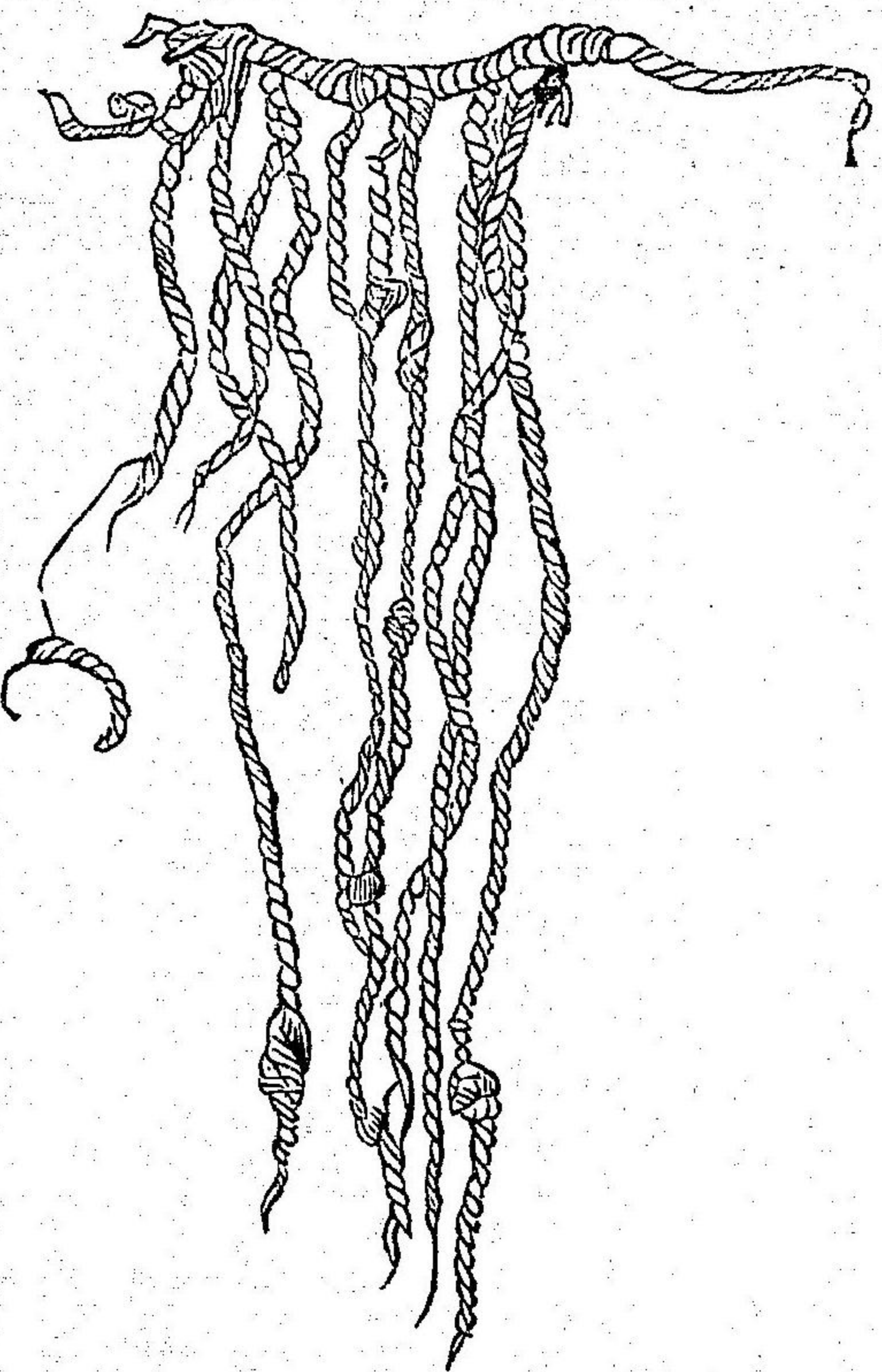
第四期はフォネティック (Phonetic) とすつて、この繪が音を表はす符號となつた時期で、これがま  
 た三つに分れる、第一期はバーバル (Verbal) とすつて、一つの言語 (word) が全体の音を表はす符  
 號、第二はシラビック (Syllabic) とすつて、一つの綴り (syllable) が全体の音を表はす符號、第三はアルフ  
 アベチック (alphabetic) とすつて、現今の様に一つの字 (letter) の音を表はす符號である。

この四つの時期の中、第二の時期では、符號は物事を表はし、第三では、物事の名を表はし、第  
 四に至つて、音を表はすに至るのだ、今各時期に付つて精しく説いて見よう。

第一の時期 結繩 (Quipus) と貝帶 (Wampum) はこの時期のよゝ例である、結繩とは第十三圖の  
 様に、繩に結び目をつけて、記憶の助けとするのだ、これは古からある事で、今も西洋では手巾の  
 端はしを結んで、覺えにしたり、日本では指に糸を結びつけて覺えにしたり、佛教及び羅馬教等で數取  
 りに念珠を用ひ、航海者が測程器を用ひて、船の行程を量るなども、この類である、昔ダライアス

三十  
(Darius)が、アイオニアン(Ionian)人に命じて、イステル(Ister)に至る浮橋浮橋を守らせられた時に、繩に六十ヶの結び目をつけて、アイオニアン人に渡し、さていふに、ダライアスがスキミアン(Sythians)人の方に進むのを、見た日から、この結び目を毎日一つずつ解いて、一つもなくなつたら、國へ歸入れと言つたとき、

第十三圖 結 繩



ロドタス(Herodotus)の歴史にかいてある、この結繩の用ひられた區域は廣くあるが、殊に古代のペルビアン(Peruvians)は最も有名である、これを今キツパス(Quipus)といふのも、ペルビアン人の言語で、「結び目」といふ意味の言語を借りて使ふのだ、其方法は第十三圖で見る様に、一本の太い繩に、色々に染めた細い繩を所々に結び付ける、この細い繩の色や、結び目の形状及び距離等は、皆

何か或る意味があるのである、假令ば、赤いのが兵卒の意味、黄は金、白は銀、緑は穀物とし、また一結び結べば十、これが二ヶ所あれば二十、一ヶ處に二つ結べば百、同じく二ヶ所は二百とする様にする、またこの結繩は、物を數へる外に、國家の年代記にもなるし、地方への命令にも、軍事上の事にも用へる、また埃及で、象形文字(Hieroglyph)で死人の傳記を記して、墓に埋めた様に、ペルビアン人は結繩で死人の記録を作つて、墓に埋める、各市にはまた結繩を司る役人があつて、事柄があると、これを結んで置いて、必用な時にはこれを説明するのだ、この役人は、結繩を讀むには慣れて居るけれど、自分の司る外の結繩の意味を知るには、やはり説明を受けなければならぬ、故に他の地方から來て、結繩を讀むには、その事柄は人口の事か、租税の事か、兵事上の事かは、問はなければならぬ、併しそれを見なれて居ると、それでもつて、國家の大事件や、法律命令等の意義を明かにする事が出来る、この結繩の記録は、南ペルビヤに残つて居つて、その地の土人には之を讀む者もあるが、外國人には殊に秘密にして教へない、ペルビヤ高地の牧畜者の間には今も之を用へて居る、その方法は、假令ば繩の第一の部分は牡牛、第二は牝牛、第三は乳の出る牝牛、その次は犢牛、次は羊といふ様に、極めて置く、また繩の色や、結び様で、色々の意味をあらはす仕掛けになつて居る、またこれと同じ様なことは、カリフォルニア(California)の土人に行はれて居る、この土人はその自製の毛布を、毎年何回か極めて、サンガブリエル(San Gabriel)島の殖民地

に賣りに行くので、賣りに行く人は、多くの人から頼まれた毛布の敷を、髪や毛が羊毛かで作った繩で示し、賣つた方の敷を他の繩で示す、賣つて歸つて來ると、この敷に割りあて、その代價を各人に割り渡すのだ、西部亞非利加のアルドラ(Ardul)の土人も、また繩を結んで、これに色々の意味を附けて置く、ジェブス(Jebus)人の中ではこの繩に色々の物を結びつけて、種々の意義を表はす、假令へば向き合はせにつけた貝は、友情の符牒、弓の矢は戦争の符牒といふ様にきめてある、その外メキシコのズニ(Zuni)の印度人はこれより大に發達した結繩法を用ひ、北亞米利加の印度人の中には、これと反對で、極めて單簡なものを用ひて居る、ハワイ(Hawaii)の徵稅官は、百年許り前には、四五百尋の繩で、島中の課稅すべき財産を示した、結び様や、色々の形に繩を輪にする事や、その大きさ、繩の染色等で、地方の名を示し、各人の税金の高は、混雜しない様に、色々の方法で示した、支那でも、文字の發明前には、やはり結繩を用ひた、これはやはり結び目の敷や、その間の距離が記憶の補助になるのである、繩を結んだり輪を作つたりする法は、埃及の象形文字の中にも記してあるし、亞非利加では今日のジェブス人もこれを用ひる、結繩はメラネシア(Melanesia)や臺灣でも用へられる、今でも徵稅署では、これに類似の方法を用ひて、計算を便宜にして居る、これは榛樹又は柳の木で四角な棒を作つて、その一面に刻みをつけて、その刻みの大さで、磅、志、片等を表はし、また一面にはこれと同じ金額を、羅馬數字で記し、他の一面には借人の名と、その

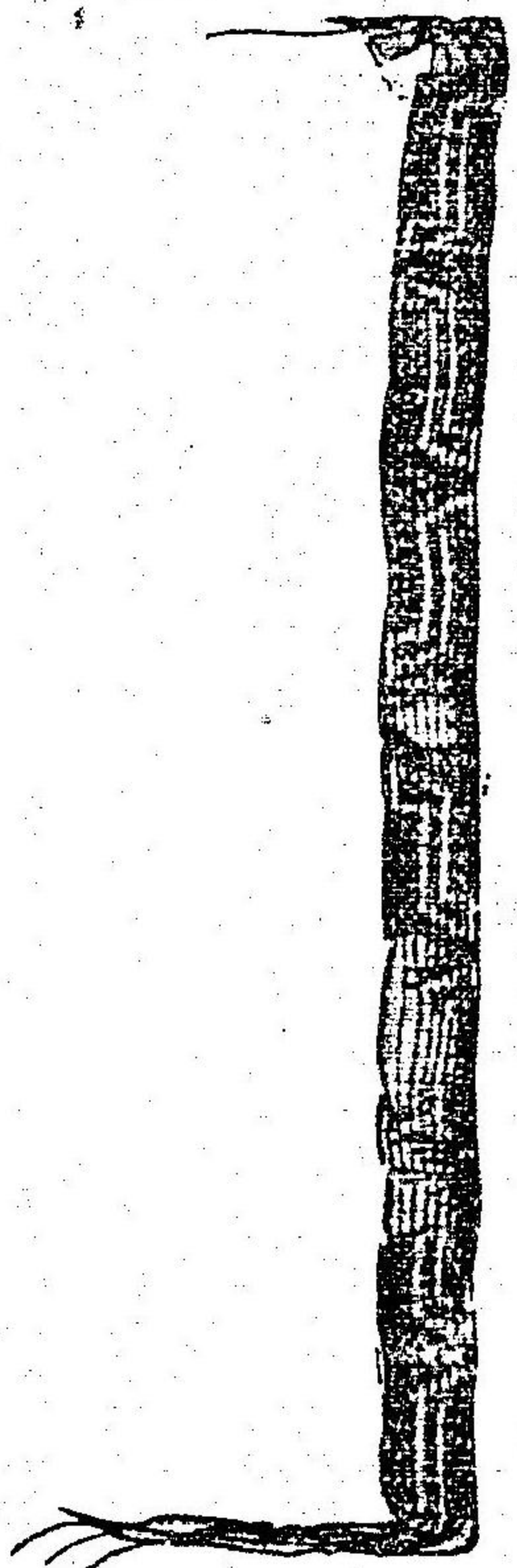
日附を記す、そして棒を二つに割つて、一つを役所に止め、一つを借人に渡して置く、そして金を拂ひ渡す時には、借人はその一片を出して、向ふに出して置いた分と合はして、これが合へばすぐに拂ひ渡されるのだ、西紀一千八百三十八年に、國會議事堂の焼けたのは、爐暖の火力が強かつた爲めに、この割符の木に、火が燃付いたのが原因なのだ、蘇蘭では五十年計り前に、麵麩屋の小僧が、麵麩を配達する時に、やはり棒にその敷を刻みつけた、これは今でもある事だ、ペンシルバニヤ(Pennsylvania)の牛乳屋は棒へ刻みをつけて、その配達した牛乳の分量を記すといふことだ、これ等は、今の世の商人の日計簿に相當するものだ、また昔諸國で用ひたクログアルマナック(Clog Almanack)は今のホイイテーカーの(Whitaker)アルマナックに相當するもので、これは木片または金屬で作つて、日曜及び祭日を符號か象形文字かで書いてあるのだ、例へば聖ポール祭(St. Paul)には斧の形、聖ヴァレンタイン祭(St. Valentine)には戀結び(true Lover's knot)、聖ダビッド祭(St. David)には堅琴等である、これと比較すべきものは、昔バーヂニヤ(Virginia)の印度種を用ひた記録法で、「神の記録」となづくる者である、これは六十の輻のついた輪で、その一輻ごとに、人の一年間の重なる出来事を、形象文字で記すのである。

貝帯は、結繩程その分布が廣くない、これは穴をあけた珠、または貝を、色々の形狀に、木の皮の糸、麻糸、鹿の筋の糸等で結び付けて、帯の上にならべる、その帯の端は、やはり筋か又は麻糸



でへりをつてあるのだ、その珠や貝でつくる模様は、種族の歴史とか、兩種族間の條約等の意味ある繪畫様の符號だ、またこの帯は土地の境界、財産等を記す時もある、古代ニウエングランド(Near England)では、貨幣として國中一般に行はれた、今この貝帯の用法を説明するに適當の例を挙げると、西紀第十八世紀の終りの頃に、北米のヒーロンアイロクオイス族(Huron Iroquois)のヤン

華氏トシメラカマンダ 圖四十七



ワント(Wyandots)種の大酋

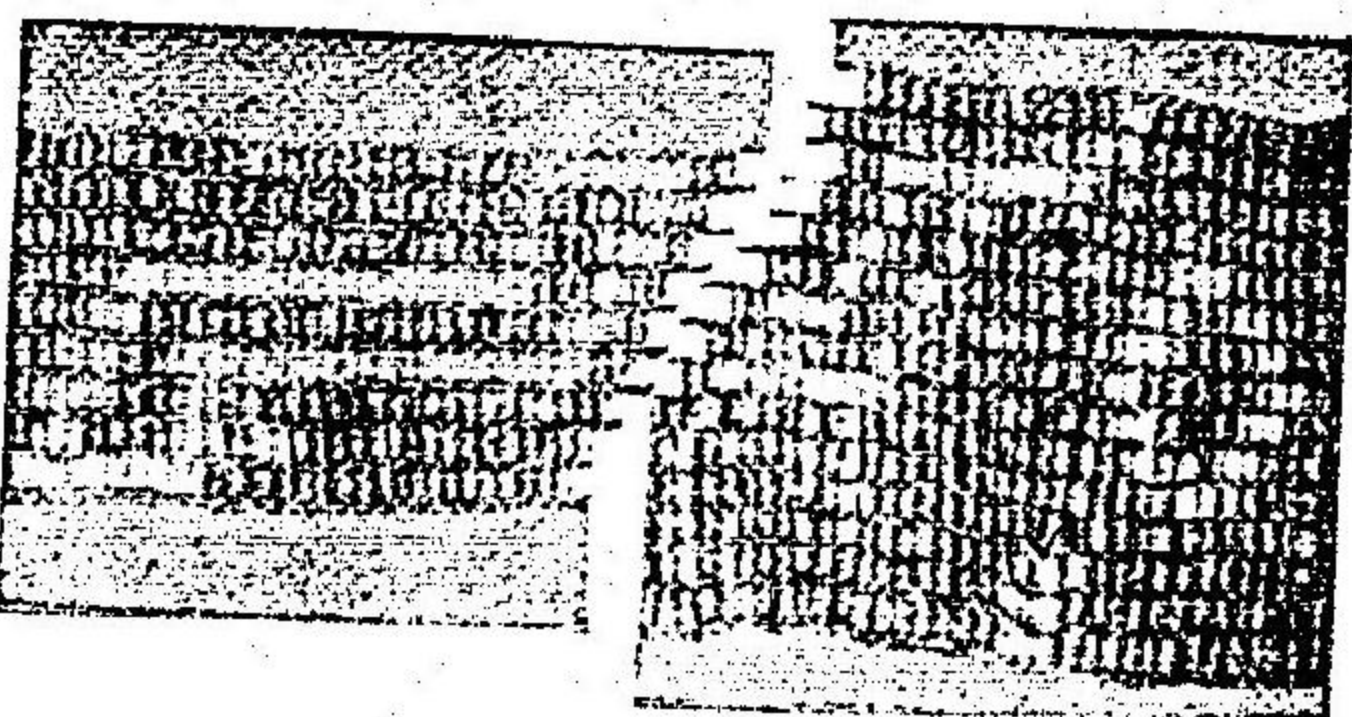
長は、部下の諸酋長を招集して會議を開いた、即ち諸種の記録なる貝帯を出して、これにその記録してある事柄の大意を記した紙片かみきれをつけて、こ

れをこれに關係する酋長に示して、その酋長のこれに關して記憶して居る所を述べさせた、大酋長は記録の大体に通曉して居るからして、これを聞いて居つて、若し誤りがあると、これを訂正して居つた、かくの如く大切な記録であるから、この種族の一部分が、一地方から他地方へ移轉する時には、大酋長に願つて、その地方の他種族との關係條約等を記録した貝帯を持つて行くのだ、これ等の貝帯は條約の證據又は地券として効力があるものだ、北亞米利加の印度種(殊にアイロクオイ

ス族)の國では、白人が入りこんでから、この記録の効力がなくなつた、貝帯の例として、西紀千八百九十七年にチロール(Rhodes)博士がオクスフォードのピットリバーズ(Pitt-Rivers)博物館に寄附したものが四つある、その第一は第十四第十五兩圖に示すもので、ダブルカラメットトリーチー

第十五圖 前圖の一部分

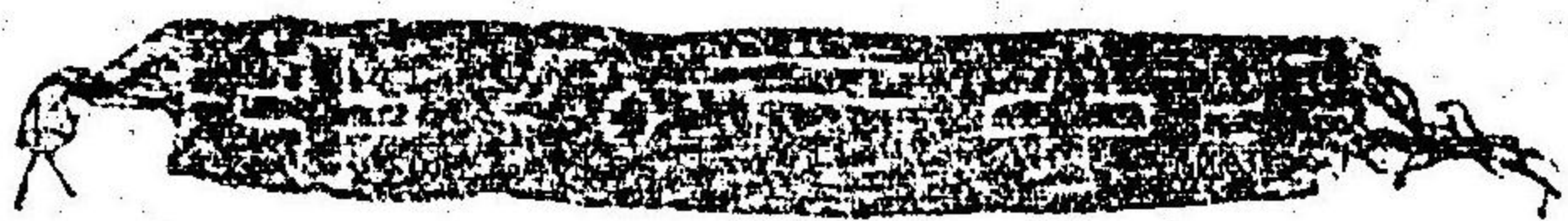
ヘルト(Double Calumet treaty belt) と名づくるもので、西紀第十七世紀



の半ば頃以前のもので、不完全ながら長さ四呎ある、紫色の地の真中と思はれる所に會議の符號があり、片脇には四つ、片脇には三つ、兩頭の烟管パイプ様の者がついで居る、尤も此烟管は使用する爲めではないのだ、之は勿論古代の平和條約を意味するものであるのだ、第二例はピースパスヘルト(Peace-Path belt) とついで、やはり平和條約に關するものだ、第三はジスイト傳道の貝帯(Jesuit missionary Wampum) と稱するもので、第十六圖に示す如く、その大部分はなくなつて居る、これは基督教が傳來したことを示すものらしい、黒地に白い珠が十五列ならんで居る、中央の卵形か斜

方形は會議を表はすらしい、その兩方に羊と鳩がいてあり、その外に十字架が書いてある、これは西紀十七世紀の前半の者だ、第四は四國民同盟の帯(Four nations' alliance Wampum) と稱し、十八世紀の初めの者で、何か四つ四角なものがあるのは、ヤンドット種と他の三種族との條約の意

帶具の遺傳トイスヒ 圖六十第



帶具の盟同民國四 圖七十第



帶具の氏ンへ 圖八十第



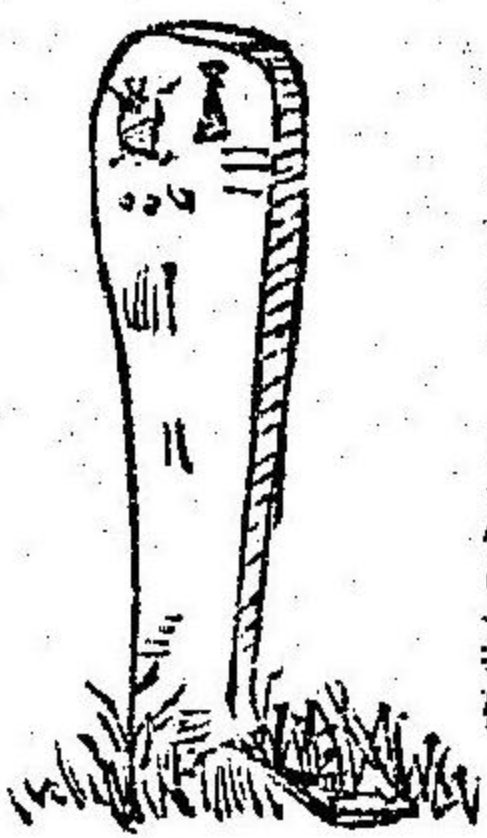
以上は全く第一期即ちニーモニツクの時期に属するものだけれど、第十八圖に示すものは、この時期をはなれて、第二期即ちビクトリカルの時期に至らんとして居るものだ、これはペンベルト (Penn belt) と稱して、ウイリヤムベン氏が、アイロクオイス族から西紀千七百一年に受領したもので、ペンシルバニアの歴史協會の所藏なのだ、白地に十八本の線が引いてあつて、中央に黒色の珠で、二人の人形がいてある、一人は黒人で、一人は帽を冠つた歐羅巴人だ、兩人手を握つて居る。

第二の時期 さて、かくの如き第一の時期の符合では、種族の間各人の間の關係上、不都合が多いからして、一種の繪畫様の文字が出来る、これは言は  
い今の商標の様なものだ、印度種の書いた繪畫は、目印として手に、入れ墨する爲に用いたものだ

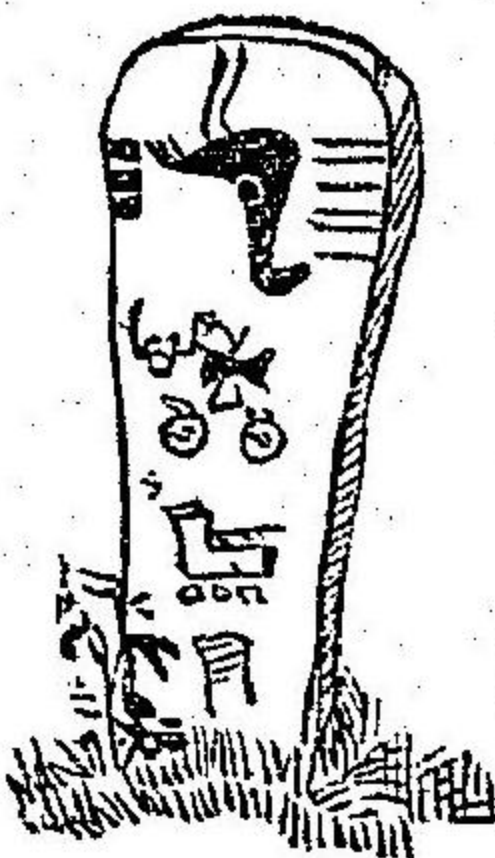
と云ふ事だ、アーサーエバンス(Arthur Evans)が、クリート島(Crete)で發見した、古ミセニヤン種(Mycenaean)の遺物中に、符號の彫つてある石印があつた、これは想像畫又は裝飾ではなくて、その持主の符號であるらしい、其中で帆柱に新月が一つついて居る小舟の圖があつた、此印は思ふに當時長い航海をした水夫の所有と見ゆるので、世に誇らうとして、これを彫り付けたのであらう、ホーマー(Homer)の詩イリアッド(Iliad)を讀むと、一ヶ月の航海は、當時随分永い方であつたらしい、門と家の附いて居る印は、立派な豚飼ひのであらう、魚の形のついたのは、漁夫ので、堅琴のついたのは音樂師のに違ひない、文身の習慣も只裝飾とも限るまい、何かの符號であるか、又は宗教に關係あるらしい、その種族のトツテム(Totem 種族または個人の符號に使ふ畫)、または自分のトツテムを記したのもあらう、印度種の中には、男女共に文身するものが有るが、これは必用上なので、戦争の時に捕虜を見別けて、償ひ金を出して取りかへす爲めである、トツテム様の教訓的の動物の畫を、身体各部に彫るのもある、カリフォルニアのカブヤ(Kavya)印度種は所有權を示す爲めに、その所有地の境界に木を植え、柱をたて、所有主の符號をかくか、又は切りつける、ニージーランド(New Zealand)では、墓側の樹上に死者の顔貌を作り、ヤクツ種(Yakuts)及びブッシマン種は、顔の印又はトツテムを所有權の印とする、殊にブッシマン種は、これを生長中の南瓜や甜瓜にまでつける、多くの印度種は實名よりもトツテムの方を餘計に使ふ、濠洲の黒人や北亞米

利加の印度種の墓碑には、トツテムが倒まに書いてある、中世の年代記には、英吉利王の死亡を記した記事の對向の頁に楯を書き、その中に豹が倒まに書いてある、猶これを比較すべきものは、今も墓碑に、倒まにした蠟燭の形を彫ることである、ヌクールクラフト (School craft) は、その著述

第十九圖 印度の墓碑



第二十圖 印度の墓碑

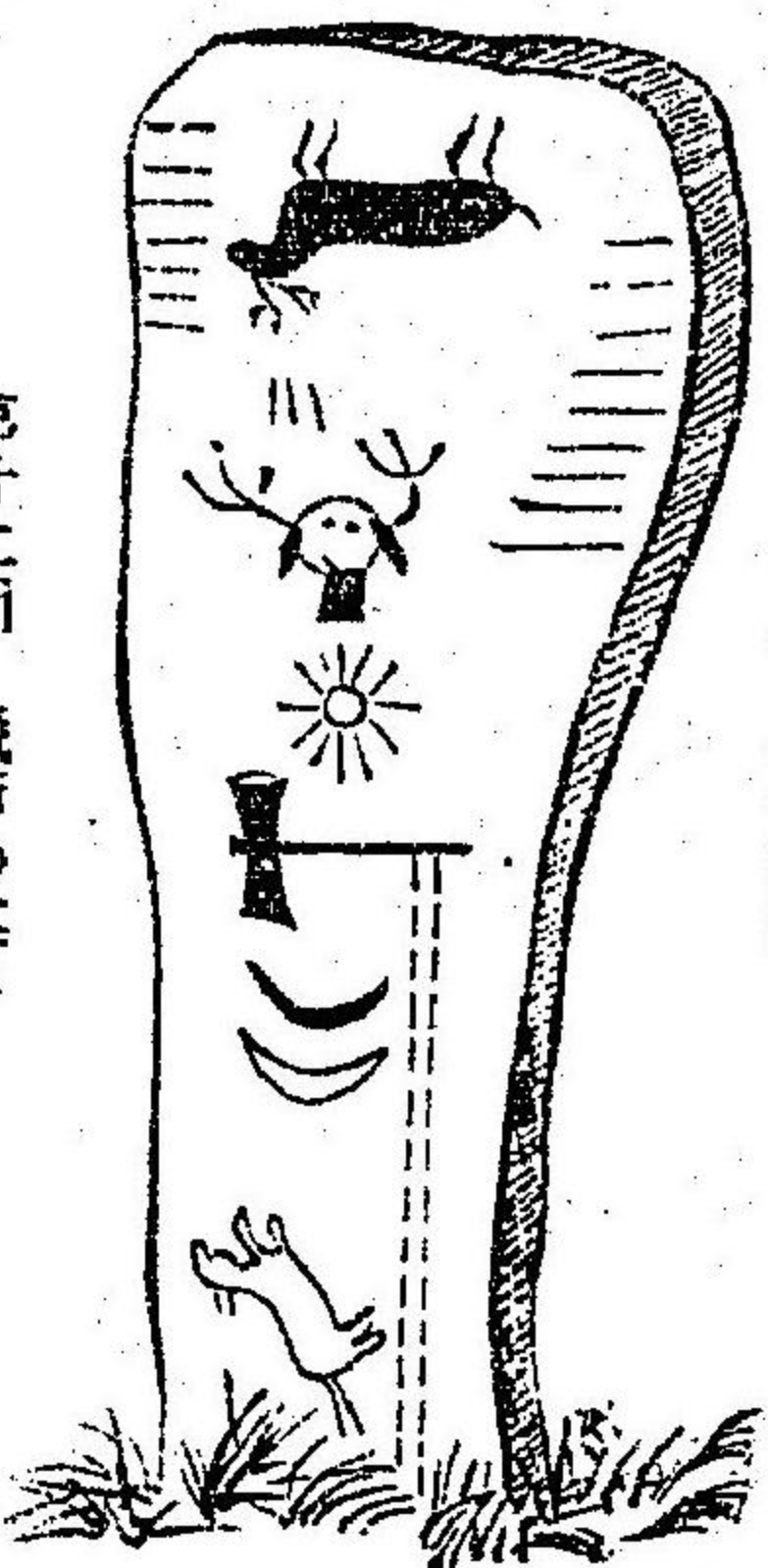


の中に印度種の墓碑の書を示した、今その中から三つの例を挙げる。第十九圖は武人の碑で、龜はその人のトツテム、首のない人形は、印度種が普通に用ふる死の符號、その下の三つの點は、名譽の章である、次の圖はセントメリーの有名なる會長シンガバワッシン (Singa-bawassin) の功勞を示すもので、そのトツテムの鶴は、倒まにかしてある、その左の三つの點は、その關係した平和條約が三回あつたことを示し、右の方の六本の線は、その關係した戦争が六回あつたことを示すのだ、烟管は平和の章、斧は戦争の章である、若しこれが婦人ならば、その用ふる道具たへば裁縫道具や、機械道具を書くのだ、第廿一圖は西紀千七百九十三年頃シーバルオル湖 (Lake Superior) 上で死んだ名題の會長ワボゼーグ (Wabojeg) の墓碑で、そのトツテムの馴鹿は例によつて倒まに書いてある、本名は白漁者といふ意味であるが、これは書いてない、七本の筋はその部下の戦友等を示し、三本の縦筋は負傷の多きことを示し、角のある頭は大鹿

と大に戦つた事を示すのだ。

第廿二圖はインニート (Inuit) 種の獵人の墓石の圖だ、その職業は小舟の圖で表はしてある、その仲間と一處に舟を漕いで居る、その下の圖は魚や獸の皮などを乾す架の圖だ、その次に狐と水獺の圖、最下の網形は夏の住居の圖だ、これは皮を捕る獵人の方の住居で、魚をとる漁夫の方のは半

第廿一圖 印度酋長の墓碑



第廿二圖 獵師の墓碑

球形なのだ、また英領コロムビア (British Columbia) ボリチンヤ (Polynesia) 及ビマオリ種 (Maori tribe) 等には、右に述べた墓石にある様な繪を、門の柱に書いて置く、また所有權を示す爲めに、小舟や其他の所有品に、そのトツテムを書くこともある、若しこの研究をつけて行くと、限りなくなるから、今はこれで止めて置く、さて上述の諸例は、これ等の記録の意味を明かにしたので、その目的は達して居る、これ等の例は、現今吾等の用ふる略語に類して居るのである、即ち物事の全体を言はずして、その一分部で意味が分るのだ、たとへば封皮に近歩三の二と書けば、郵便局では、近衛歩兵第三聯隊第二中隊へ書簡を配達し、高等學校で、一、二、三、何某と記せば、一部三年二の組の意味だ、ことに商業家の符牒の如きもその例で、他の人には

何か分らぬ、印度人の戦争の記録が、文明國の紳士に、分らぬのも無理ならぬ次第だ、この事はまた記憶を助ける爲めに作った符號と合ふ、例へば歌を謠ふ人は、これを以てその句の記憶とし、醫

者は醫術の助けとし

獵師はこれでその獵

場の道しるべとする

第廿三圖にあげた行

商人の地圖は、その

例で、種々の符號で、

商賣上の事、道順、

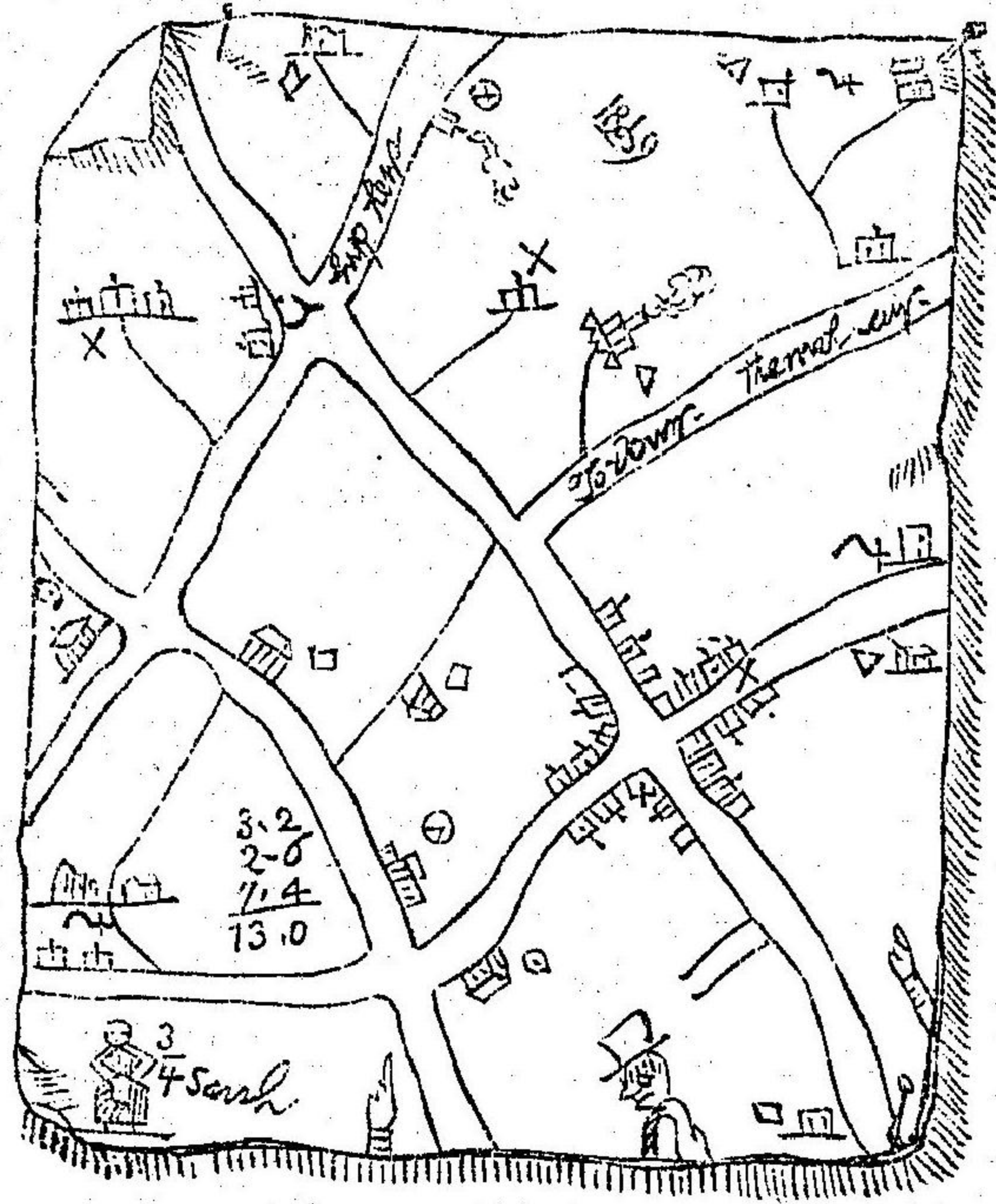
商品の向き向き等を

記してある、そして、

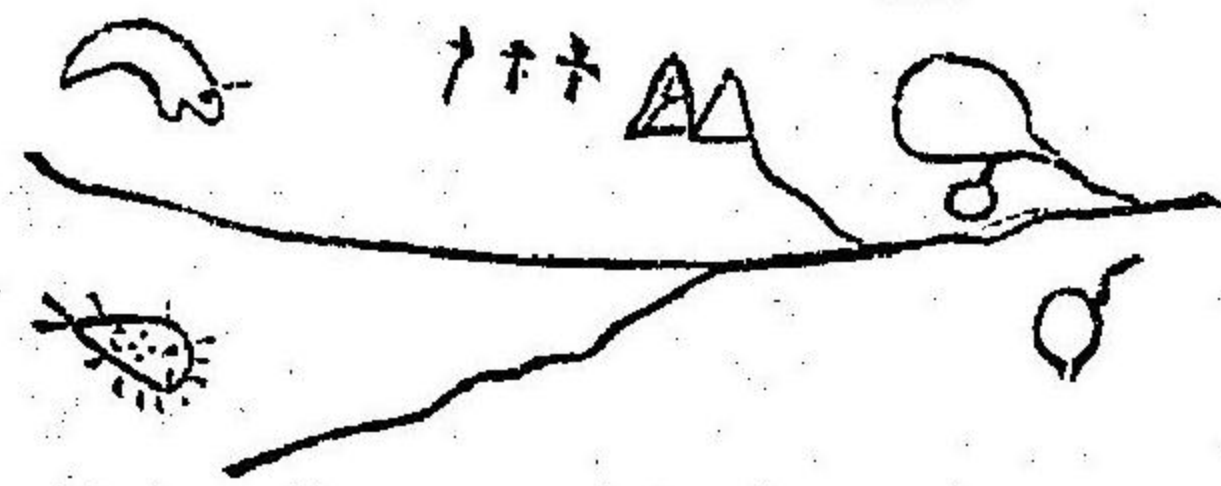
これは、左に舉げる

戀愛、魔術、狩獵、

圖三廿第 商人の用地圖



圖四廿第 鳥の符號



戦争、政治等に関する符號と、考へ合すべきものだ。

一、戀愛 第廿四圖は、オジツバの少女が、ミチンタ (Minoosta) に居る情人の許に送つた艶書

で、樺の皮に記してある、娘のトツテムは熊、男のはマッドパッピー (Mad Puppy) で、これがつ

まり差出人及び受取人の名前なのだ、兩人の居所から、二本の線が引いてあつて、その線が湖水の

間の一點にて合する、それから二つの天幕の方へ横道がある、天幕の

中には、羅馬教の三人の娘が居ることを、三つの十字架で示してある、

左の方の天幕の中に、手招ぎする様な手の形が書いてある、これは即

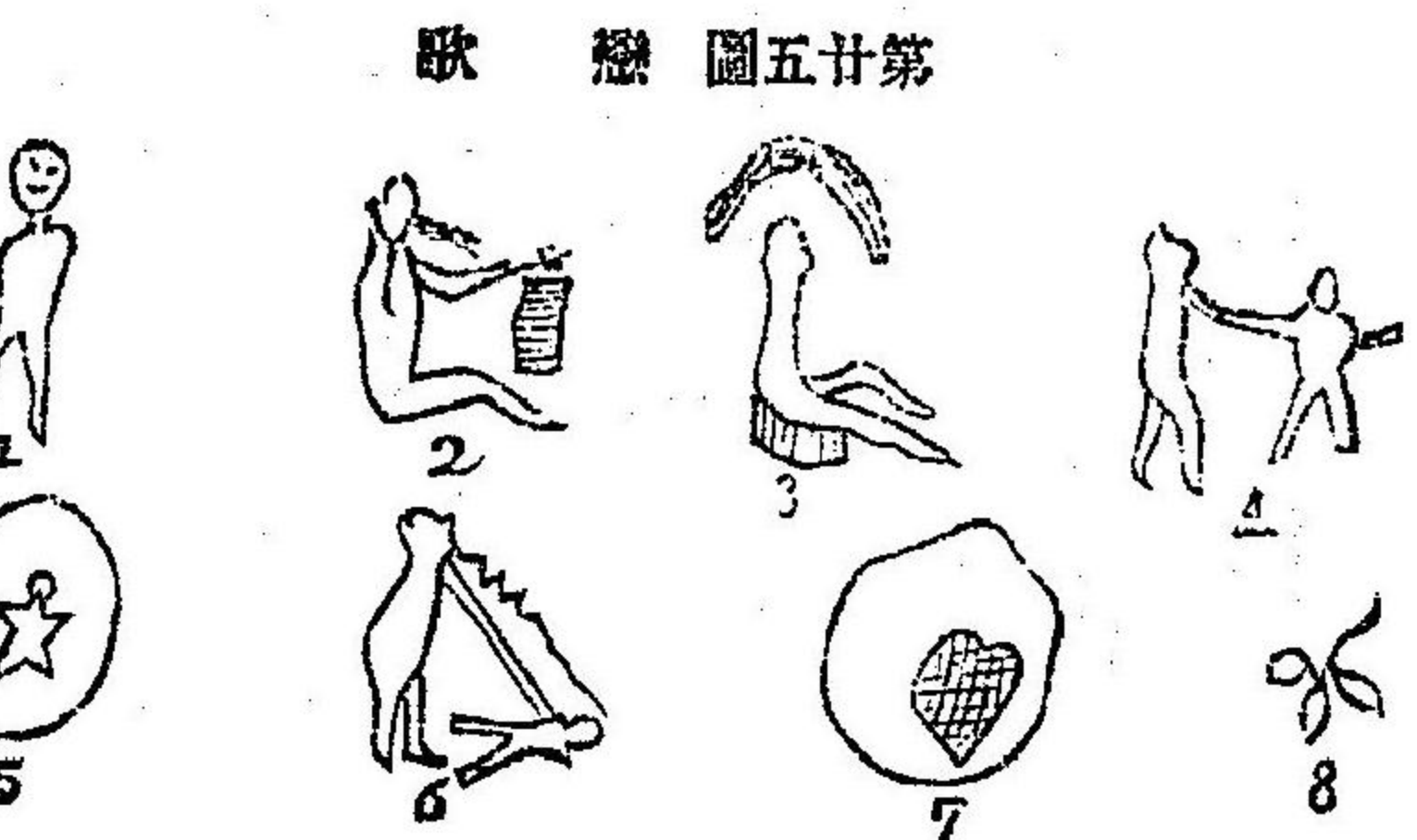
ち少女が情人を手招ぎする形なのだ。

第廿五圖は戀歌で、1は戀人、2は戀人が歌を歌ひ太鼓を打つ、3

は密會所の中に入つた所、4は男女が一体となれる所、5は女が島に

行ける所、6は女が眠つて居る時、男が歌ふと、これが女の耳に達す

る所、7は心を現はす、これは左の意味となる。



第廿五圖 戀歌

一、これは神の作つたわが符號である、二、われらの歌ふを聞け、これはわが聲である、

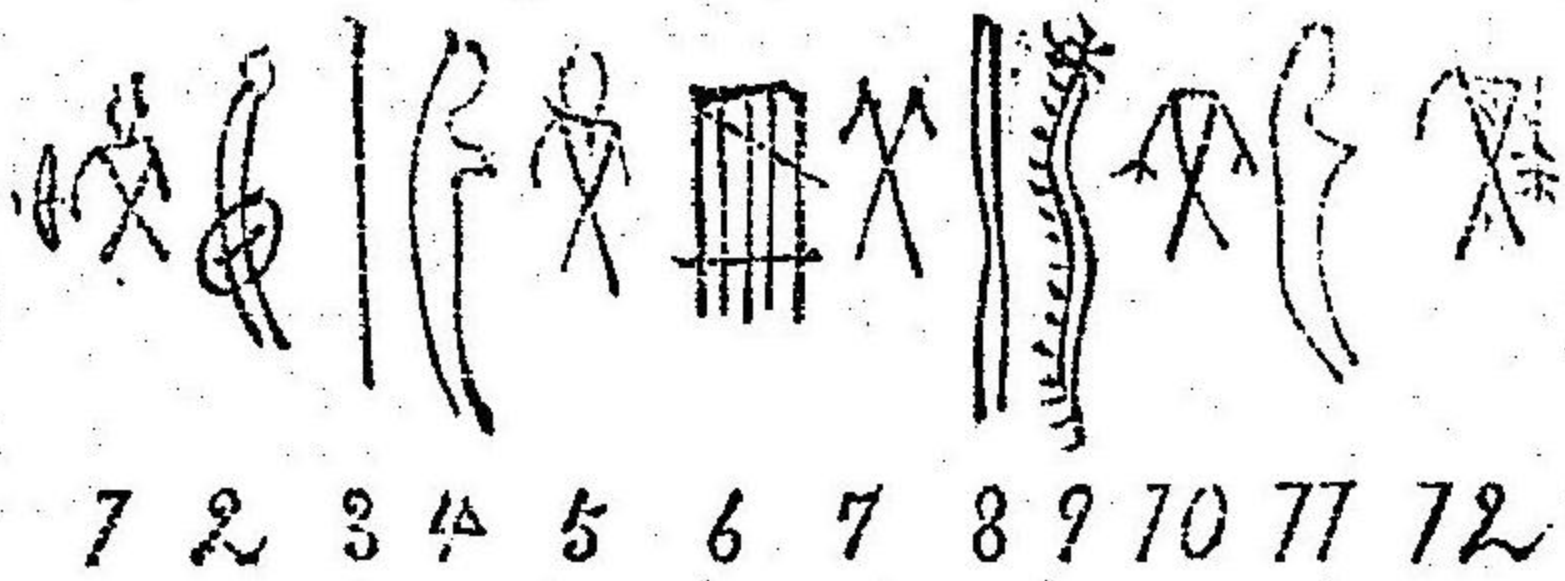
三、われは女と共にかくれる、四、女の胸の中を聞いたら、女は赤面した、五、六、女が

中を語る。

二、魔術 第廿六圖はオジツバの醫者の歌で、これも樺の皮に書いてある、この醫者即ち魔法使

ひは、西比利亞の僧侶シャマン(Shamans)と同じで、その魔力は神より授かつたものとしてある、この魔法使をマナボゾ(Manabozho)と云ふのである、第廿六圖の1 マナボゾは弓矢を持つ、2 魔法

歌の者醫のバツヂオ 圖六廿第



使の太鼓及び「ばち」、3 魔法を行ふ間に用ふる門、4 魔法の神聖なる符號たる、白い貝のはいつた皮の袋、5 魔法使がその魔力で角がはいる、6 魔法使の用ふる圓筒形の物、7 女、8 は3に同じ、9 蛇の皮の袋、10 女、11 皮の袋、12 は病魔を逐ふに用ふる木の枝を持つた女を表はすのだ、印度人は病氣は天然に生ずるものでないとしてある、即ち何か魔神があつて、其魔力で種々の病氣を作る、そこでこれを治すにはまた一種の魔力を用ふる、印度人はこの人為の魔力の爲めに死ぬ、實にこれ等の野蠻人は、天壽を全うして死ぬ者は少ない、病人を魔法で殺したり、有害な藥品食物等で殺してしまふ方が、却つて多いのだ。

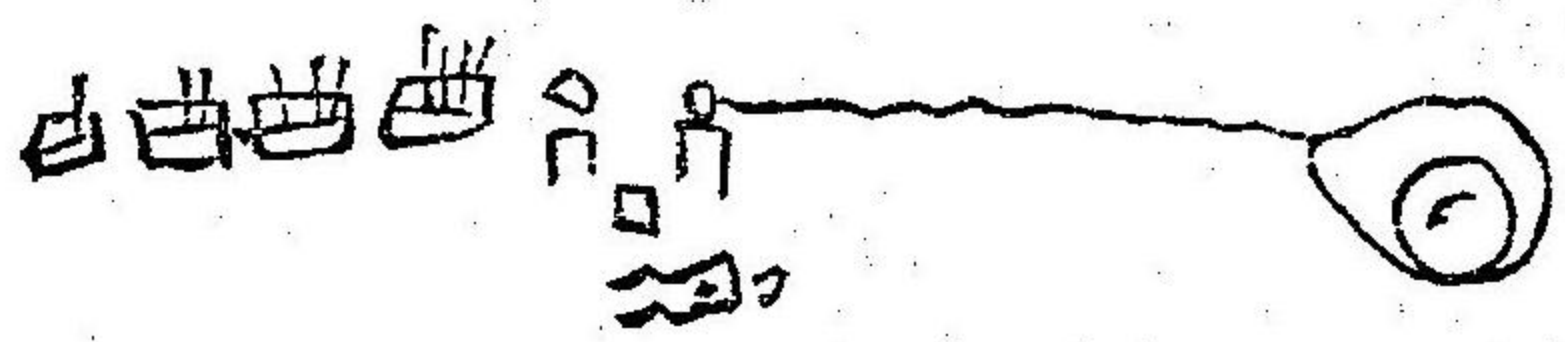
第廿七圖はオジツバのワベノ(Wabeno 悪しき醫者)が人を呪ふ記録で、四つの箱の様なもの、ワベノが入會して居る魔法の會、その次に居るのは、ワベノの助手で、口から卵形のもの、方へ、一本の波状の線が引いてある、卵形のもは島で、中に湖水があつて、その中に呪はれる人が居る、ワベノの下の所に居る人は、胸に點がある、これが

その呪はれる人なのだ、兩人の間の四角なものは太鼓だ、この畫の意味は、ワベノが黒魔術(Black magic)を使つて居る所だ、ワベノは樺の皮で、呪はうと思ふ人の像を作り、太鼓を打つて、像の胸をさき、こゝに赤いものを塗る、かくすると、遠い島

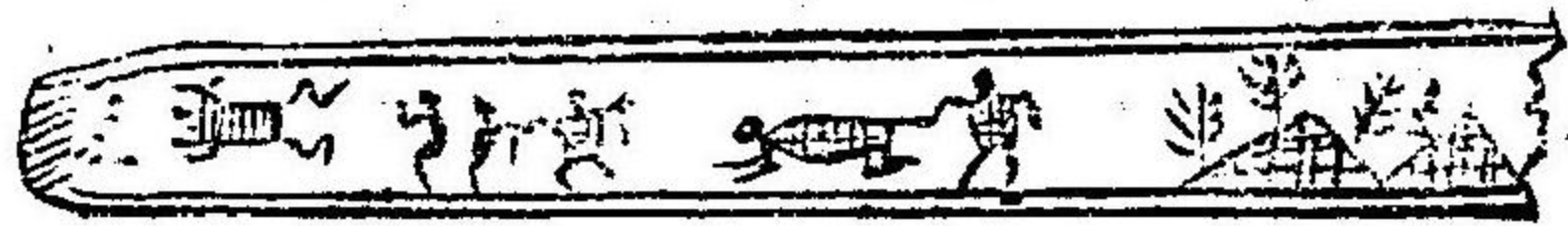
に居る人でも、ワベノの魔力で死ぬのだとしてある。

白魔術(White magic)は、次の第廿八圖に示されてある、これは象牙製の弓に、物が刻んであるのだ、右の端にあるのは小屋で、その傍に醫者が立つて居る、これは病人の夫婦から、病魔を逐ひ拂ふ爲めに、呼ばれたのだ、醫者は獸を捕へて居る、この獸の助けで、病魔を追ひ拂ふのだ、次に醫者は病人の手を取つて、呪文を唱へて居る、左端の人は、魔法の効力を見て、驚いて居る、その先きには病魔が、醫者の魔力に負け

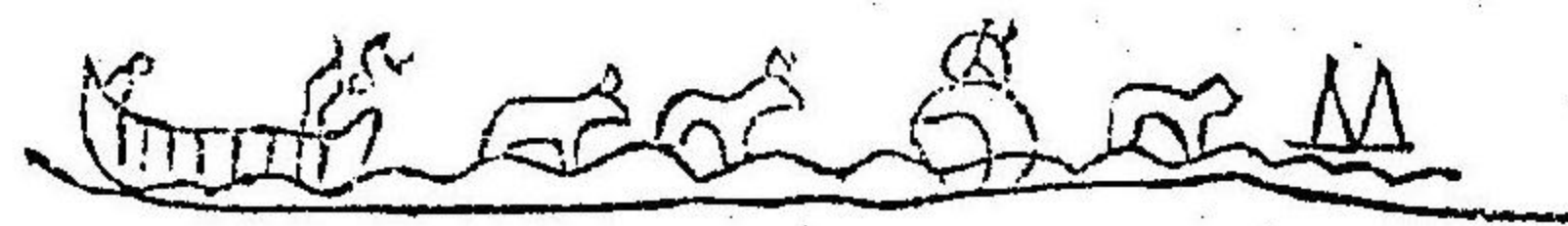
圖のふ呪を人ノベヲ 圖七廿第



刻彫の弓の種トニシイ 圖八廿第



録記の獵の種バツヂオ 圖九廿第

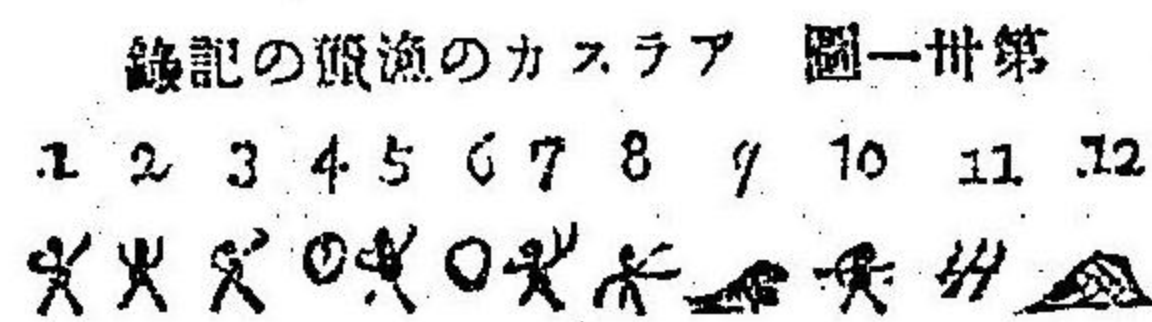


三、狩獵 第廿九圖は獵の圖、二本ある線は、河に波がたつて居る所、その波の上に小舟がある、舟のへさきには、航路を照らす爲めに火を燃やして居る、獸が水を飲みに来ると、船から見ゆる仕

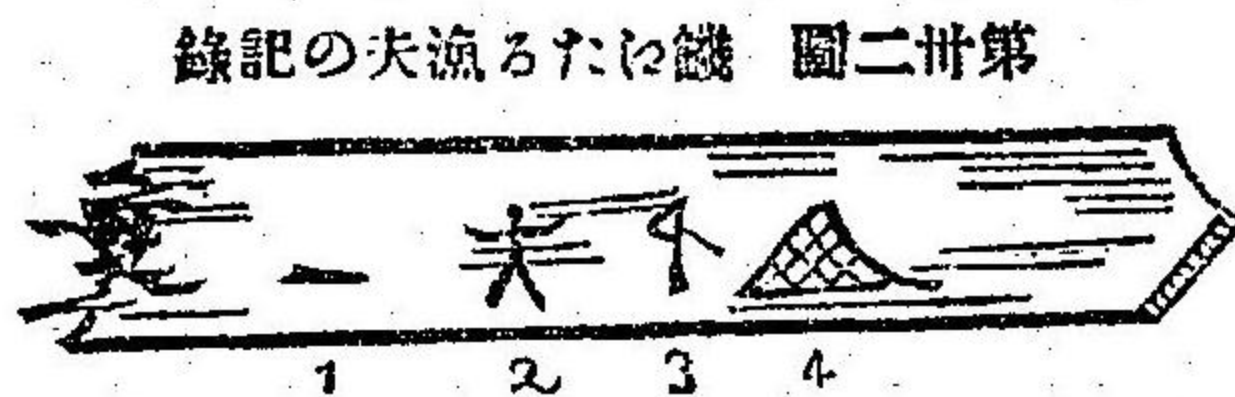
掛けになつて居る、その前方に鹿が二疋現はれて居る、その次に輪があるのは、湖水で、鹿の頭と角が見える、湖水の右には牝鹿が一頭居る、その右には獵人の小舎が見える、この四匹の鹿は、遂に捕はれて獲物となる意味なのだ、



第三十圖 ヒダツツア種の水牛彫刻



録記の鯨漁のカスラア 圖一卅第



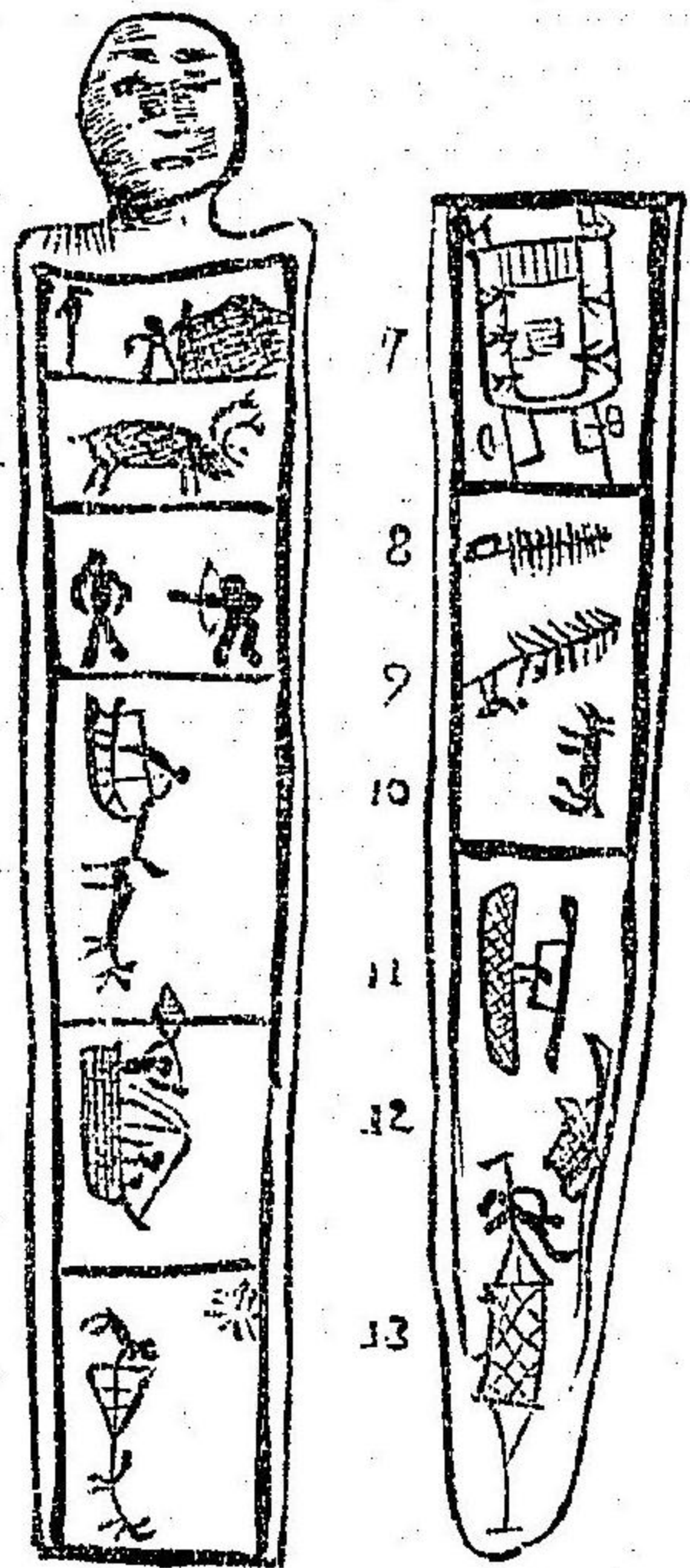
録記の天流るたに機 圖二卅第

第三十圖は、ヒダツツア (Hidatsa) 印度種が、水牛の肩の骨に書いたもので、その仲間が、水牛を捕りに行つた跡を逐ふ圖だ、水牛の足跡は、點線でかいてある、三つ頭がある、最下のはその仲間を捜がして居る人を示す、答のあるまで叫んで居る所だ。

第三十一圖は象牙製の弓で、アラスカの海豹捕りの畫だ、1は左手を舉げて獵りに行く地を指して居る、2は櫂を舉げて航海の門出を示す、3は右手を頭にのべて、眠る意味、但し左手の一本指は一夜の意味、4は島の中に小舎のある所、5は1に同じ、6は別な島、7は3に同じ、8は魚叉を以て、左の手で海豹の居つた合圖を示す、海豹の泳いで居る意味を表はす爲に、手を上下する、9、10は弓矢で海豹をうつ、11二人が櫂をと

つて漕ぎ戻る、12は漁夫の住居する小舎、この畫を譯すると、私はある島に行く、其島に一夜眠つた、次にまたその島に行く、そこに二夜眠つた、私は一匹の海豹を捕つた、そして採つて來た、といふ事になる、獵師が、もし獲物がなく、空腹になると、第卅二圖の様なものを、木片に畫くか、彫りつけるかして、これを地上に立て、木片を自分の家の方に傾けて置く、第卅二圖の1は舟、

第卅三圖 アラスカ人の漁獵生活



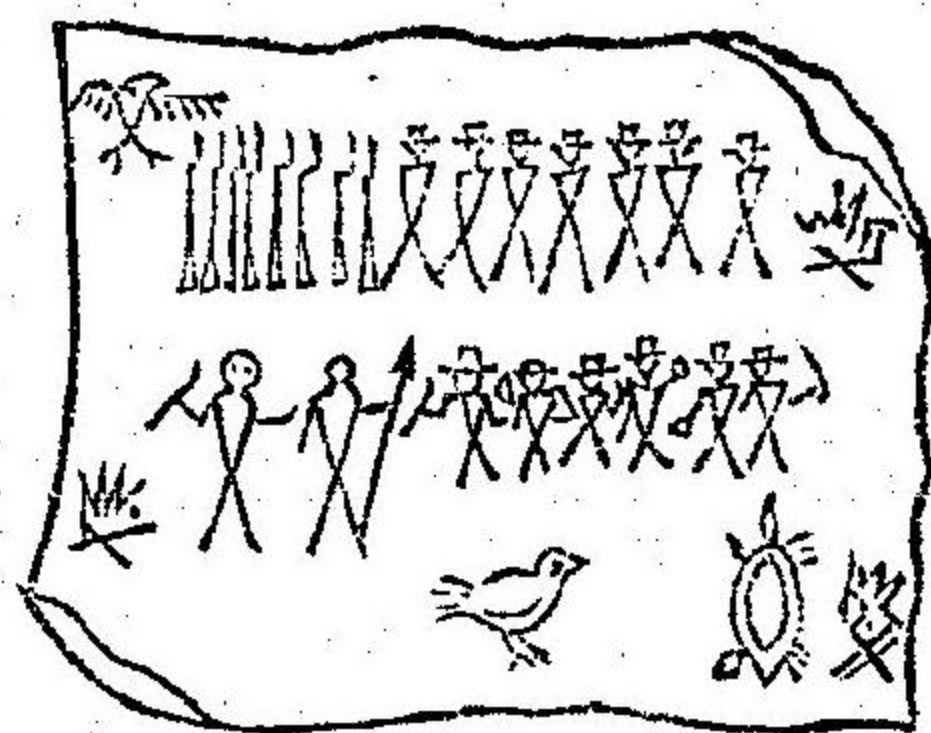
2は両手をひろげて、何も採れなかつたといふ意味、3は口に手を當て、4の方をさす、4は自分の家だ。

第卅三圖はアラスカ人の漁獵生活を海馬の牙にかいたものだ、1土人が家の前に居る、鳥の止つて居る棒は問ふ迄もなくそのトツテム、2馴鹿、3一

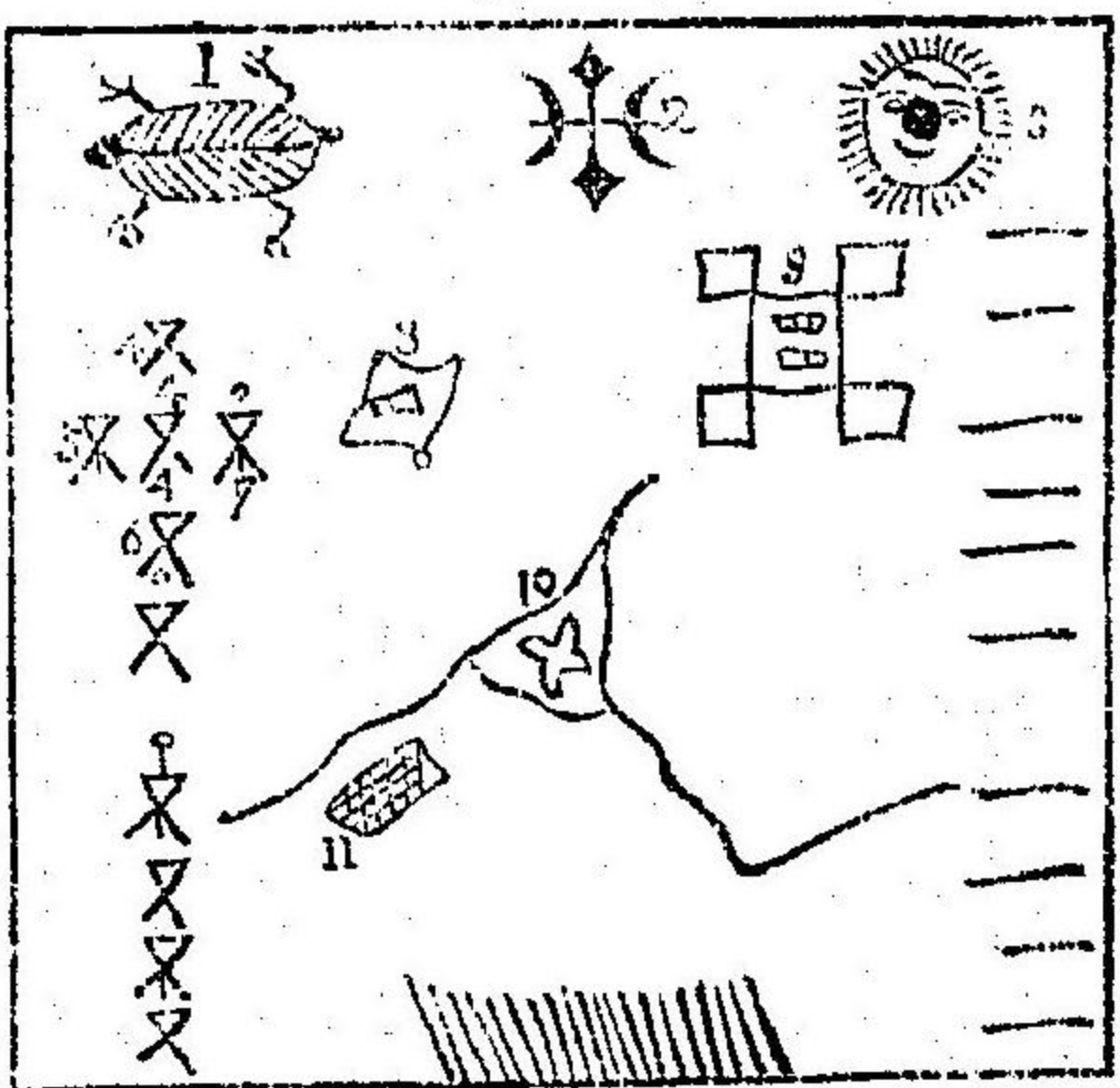
人が矢で他人を射る、4櫂を狗にひかせて行く、5帆と櫂のある小舟、6櫂、日が出て居る、7は神聖な小舎で、四方にある人形は、聖區に異教者の入るのを防ぐ爲めに、弓矢を構へて居る、その中には會の仲間が火を焚いて踊つて居る、8松樹に豪猪が上る、9啄木鳥が松樹の虫をついて居る、10熊、11、12魚を逐ふ人、13網の上に鯨が載せてある、鯨には魚叉がさつて居る。

四、戦争、第卅四圖は木の皮に書いたもので、他の人に示す爲めに、棒の尖に結びつけたのだ、中央の列の左のは役人で、手に剣をもつて居る、次は秘書官で、次は地理學者、次の二人は隨行員、次の二人はチペワ(Ciipewa)の案内人、上の列の方は小銃を持った兵士七人、下の鳥と龜は食用動物を示す。

第卅四圖 印度遠征隊



第卅五圖 印度酋長の傳記



は攻撃した諸地方の位置、下の斜の線は部下の數。

第卅六圖は戦争の歌、1羽ある人は足の早い意味、2朝の星の下に居る、3天の下に、槌と鳴りものを以て、4鷺が空中を飛ぶ、5武士が殺されて戦場に横はる、6武士の魂が空に現はる、今こ

第卅五圖はデラウェア(Delaware)の酋長ウインゲマンド(Wingemund)の傳で、1龜は種族のトツテム、2は酋長のトツテム、3は太陽で、その下にある十本の筋は、この酋長の關係した十回の遠征の意、左の方にある4、5、6、7、は男女の捕虜で、首の無いのは、首を斬つた處、8、9、10、11

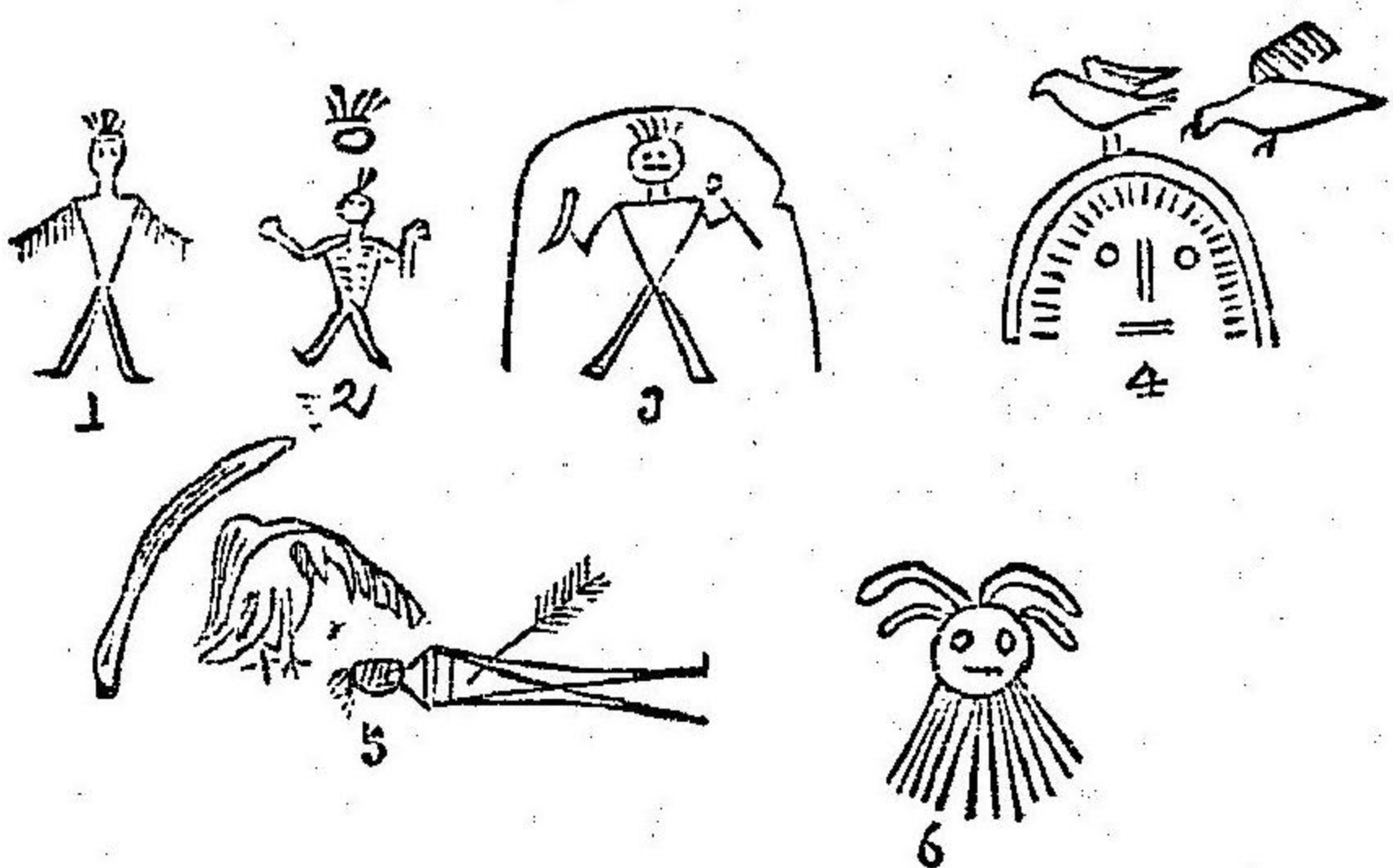
れを譯すれば、1私は鳥の様な身体を持ちたい、2毎日私は汝を見、半日づゝ歌をうたふ、3私は自分の身体を投げすてる、4鳥が空を飛ぶ、5私は死人の數に入つて幸だ、6靈魂が天に止つて、私の名を繰り返して居る。

五、政治及び社會、第卅七圖は印度種族が合衆國立法會議へ出したもので、シーベリオル湖邊の諸湖の漁獵權の請願書だ、右端の鶴で、代表者オンカバウイス(Oshicabawis)のトツテム、次はワイミットリツグチツグ(Waimilighzig)、3はオゲマギー(Ogenagee)、4は黃鼬のトツテム、5大鹿、6マンフィツシ(Man-fish)、7キャットフィツシ(Cat-fish)である、この諸動物の目及び胸が皆鶴の目及び胸に糸でつないであるのは、皆同じ心だといふことを示し、又鶴の目から魚を捕らうと思ふ湖水、及び立法會議の方へ、糸で結び付けてある。

第三十八圖は西紀千八百二十年セントアントニー陥落

(Anthony's Falls)の時に、出た手紙で、白S樺の皮によくからせてある、1は聯邦の旗、2はその頭に出来た兵營、4はリーブンウォルス大佐(Colonel Leavenworth)の記號で、この人は軍の大將で、平

歌の争戦 圖六卅第



和の使節を送つた人、11はシーキス(Sioux)の酋長のチャコーブ(Chakope)の記號、この人は全軍の指揮官、8は副大將ワヘダツンカ(Wahedatunka)、10は十四個の小舎を有するブラックドッグ

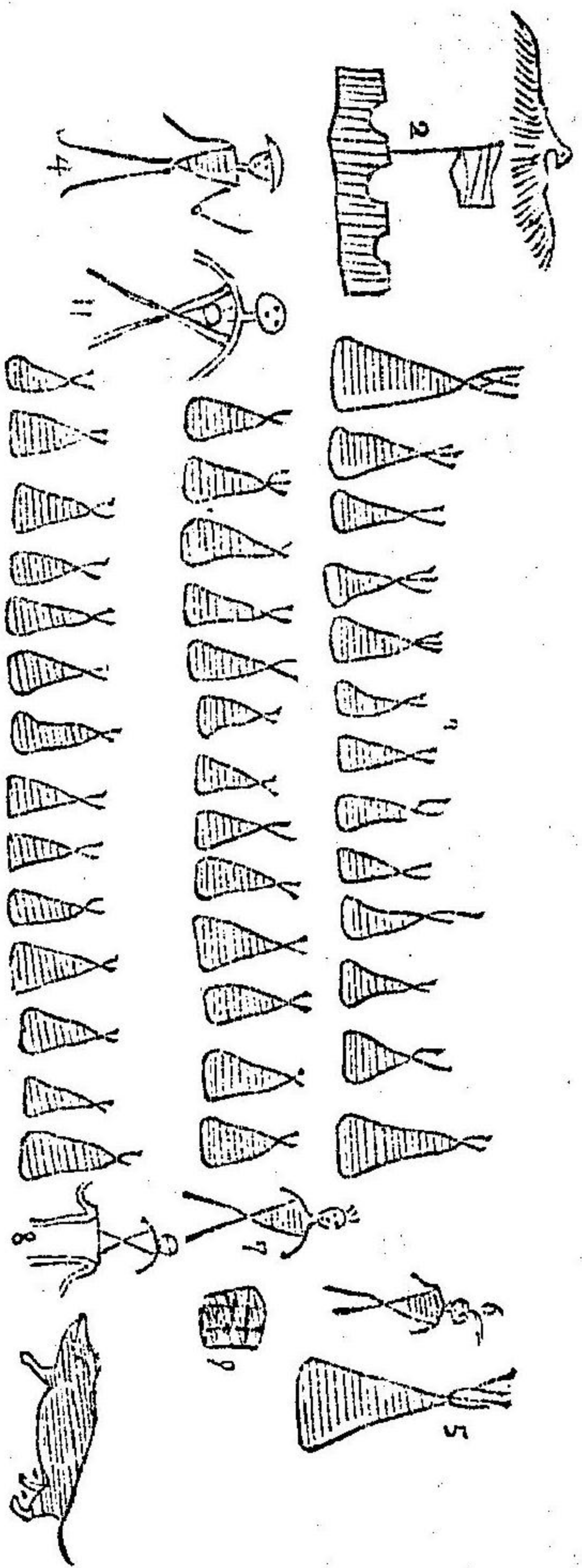
書頭持權旗の族種皮印 圖七廿第



(The Black Dog)、7は十三個の小舎を有しチャコーブに屬する酋長、9は平和の要件として政府が定めたる品物、6は十三個の附屬せる小舎を有し、その住居は6である、この手紙はチャコーブ

一行が、チペワ人と平和を結ばんが爲めに、來たことを示す爲めに、かいたもので、チペワの酋長ハムサカンドビー(Bahsacoundabee)は、この手紙を見ると直ぐに、この意味を理解したといふことだ。

狀書と請を和平 圖八廿第



第三十九圖は、西紀一千八百四十九年のミソタ地方のミルラック(Mille Lac)に住む或印度種の人口表であつて、同年の年貢と共に、チワツへの酋長ナゴナベ(Nagonabe)が、合衆國に差し出したものだ、各戸毎に、その戸主の名を、符號であらはして居る、5はカットフィッシ、その六本



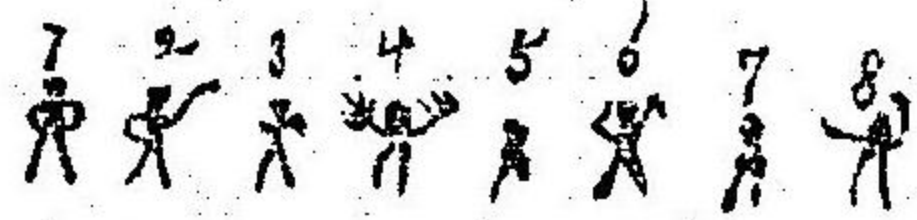
の線は家族の人数六人の意義、8は海狸の皮、9は太陽、13は鷲、14は蛇、22は水牛、34は斧、35は醫者等だ。

四十

表口人の種度印 圖九卅第

1	+	●	.....	☿	☽	☼
2				☼	☼	☼
3	☼	☼	☼	☼	☼	☼
4	☼	☼	☼	☼	☼	☼
5	☼	☼	☼	☼	☼	☼
6	☼	☼	☼	☼	☼	☼
7	☼	☼	☼	☼	☼	☼
8	☼	☼	☼	☼	☼	☼
9	☼	☼	☼	☼	☼	☼
10	☼	☼	☼	☼	☼	☼
11	☼	☼	☼	☼	☼	☼
12	☼	☼	☼	☼	☼	☼
13	☼	☼	☼	☼	☼	☼
14	☼	☼	☼	☼	☼	☼
15	☼	☼	☼	☼	☼	☼
16	☼	☼	☼	☼	☼	☼
17	☼	☼	☼	☼	☼	☼
18	☼	☼	☼	☼	☼	☼
19	☼	☼	☼	☼	☼	☼
20	☼	☼	☼	☼	☼	☼
21	☼	☼	☼	☼	☼	☼
22	☼	☼	☼	☼	☼	☼
23	☼	☼	☼	☼	☼	☼
24	☼	☼	☼	☼	☼	☼
25	☼	☼	☼	☼	☼	☼
26	☼	☼	☼	☼	☼	☼
27	☼	☼	☼	☼	☼	☼
28	☼	☼	☼	☼	☼	☼
29	☼	☼	☼	☼	☼	☼
30	☼	☼	☼	☼	☼	☼
31	☼	☼	☼	☼	☼	☼
32	☼	☼	☼	☼	☼	☼
33	☼	☼	☼	☼	☼	☼
34	☼	☼	☼	☼	☼	☼
35	☼	☼	☼	☼	☼	☼

録記の程發 圖十四第



第四十圖はインニート印度種が、その旅行を友人に知らせる爲めに、家の戸口に書いたものだ、知らせをうける方の人々は、1、3

5、7にて表はしてある、2はこれを書いた人で、左手を舉げて、その旅行地の方向を示す、4は多いといふ事を示す身振りで、両手が開いてある、6は睡つて居る形で、左手を舉げて居るのは、遠方にある意義、8は左手を曲げて、歸るといふ意味をあらはし、右手で家の方を指して居る。

第三の時期 この時期になると、第二の時期の、繪様のものが、全くの符號になつて、局外者には分らなくなる、つまり符號の形が必ずしも、その名指す物でなくて、只その符號を見ると、或る物をさすといふ事が分るのだ、歴史をしらぬ人は、十字形や新月形を見て、何か分らないと同じ様に、猶太教の事を知らない人には舟、鳩、橄欖の枝、虹等の符號は、何の意味か分らない様なものだ、故に印度人の繪畫を見て、その來歴を知ることが、例令出來るにしても、困難だ、印度は年を數へるに、冬で數へる、之を幾年といはないで、例へば、「野馬を捕へる冬」といふ様に名をつけて置く、これが曆の様なもので、種族の歴史の材料となるのだ、多く記憶を助ける爲めのもので、これを説明するのに困難だ。

第二時期と第三時期の過渡時代の符號は、メキシコ、ユカタン等の古人種の遺物なる碑石、または書き物の中なる、象形文字または音聲文字の中にある。

キングスボロー卿 (Lord Kingsborough) は、古のメキシコ人はイスラエル (Israel) 種だといひ、アウガスタス博士 (Dr. Augustus Le Plongeon) はユカタンはアダムの舊住地だとし、アベル (Abel) の墓を發見しその中から心臟を發見、カインがアベルを殺した時の刀をも發見して、これを證したが、この頃から、中央亞米利加と舊世界との開化の關係を論ずるものが多くなつた、併し近來の研究によると、亞米利加の開化は舊世界と別に發生し、發達したことゝなつた、人類の祖先は一對の

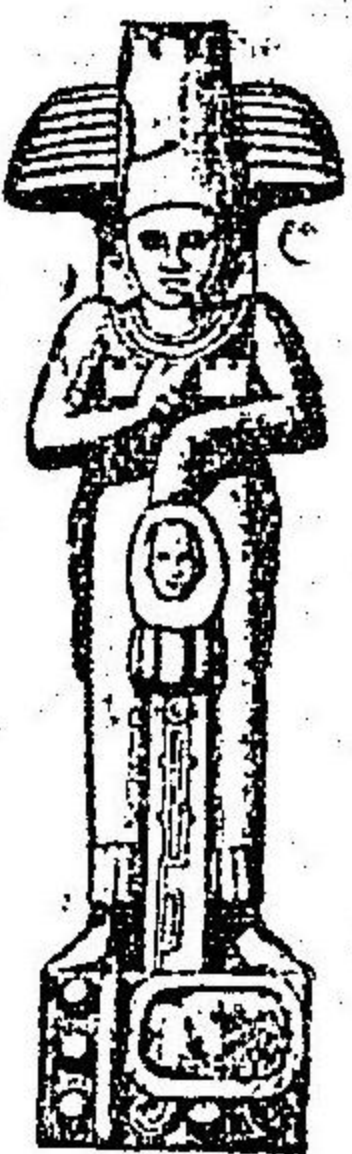
夫婦より出でしや否やは疑問としても、必ず一地方より起つた者で、恐くは人間に近い猿猴類の住むインドマレーシア地方 (Indo-Malaysian) らしい、ジャバ (Java) 島で發掘した骨は、高等動物の根原となるべきもので、大にこの定理の確實を證明することゝなつた、地球の氣候が現今よりも溫和であつた頃に、エシオピヤ (Etiopic) モンゴリ (Mongolie) 亞米利加 (American) コーカサス (Caucasie) の四種族が、地球上に分布した、當時亞細亞歐羅巴から亞米利加へ陸續きであつて、今の亞米利加人は陸を通つて亞米利加へ移住した、その發達の模様で見るとアークチック地方 (Arctic region) から、ケープホーン (Cape Horn) の方へ進んで行つた様だ、殊にメキシコ高原からは、種々の石器を發見して、その石器時代の證明が立つし、埃及やアッシリヤの宮殿、墓碑、寺院と、優劣を争ふ程の廣さや、裝飾の驚く可き建築物で、その當時、比較的に進歩して居つた事が分る、これを作つた人種は通常古メキシコ種と概稱せられ、これを分つてマヤ (Mayas) 及びアツテック (Aztecs) と稱する、マヤ種の國の興亡は分らないけれど、西班牙が米國を征服した頃から二百年許前に、アツテック種に破られた様だ、かくてアツテック種は今の合衆國領メキシコの太平洋岸から、大西洋岸まで支配した、この兩種族の子孫は、互に雜婚して、今は分らなくなつてしまつて、その傳説も入り交つて、その何れのか分らなくなつた、但しマヤ種の方が優等なもの様だ、アツテック種は今、南メキシコの人口の過半を占めて居るが、風俗宗教等は、皆マヤ種から來て居る、殊にその神の

本体に就てはマヤ種を本として居る、言語を書き表はすことを、知つて居る種族が、これを知らぬ種族よりも進歩したものと假定すれば、マヤ種は唯にメキシコ人の上にあるのみでなく、またペルピヤ種よりも上なのだ、ペルピヤ種は結繩法を知つて居つたが、文字を書くまでは進歩しなかつた、メキシコ人は紙を發明し、繪で子供らしい音聲文字を作つて、その思想を表はした、マヤ種は、埃及人の様に、象形文字を以て、言語または綴字を書き表はした、マヤ種が象形文字で書いた紀念碑の幾つかは、古のユカタン (Yucatan) の首府、パレンケー (Palenque) の宮殿に残つて居つて、多くは

第四十一圖 パレンケーにある肖像

像の上の石の板にかいてある、そしてその像は、不思議にも埃及のに似て居つて、埃及のと同じ様なものを、冠ひつて居る、但し第四十一圖のは、その文字を書く板は、像の基の所にある、文字の書いてある一番終りの板は、いはゞ、メキシコの死人の書 (Book of the Dead) である、(死人の書の事は埃及の條に述べる)、人が死んでから、その靈魂が裁判をうける所が、畫にかいてあつて、ミクトラン (Mictlan) へ行く道の困難な事が、記載してある。

これ等の書き物は、長い間放棄してあつた爲に、惜しい事には、分らない所が多く出來て、説明し得る所は所々あるが、一体によむことが出來ぬ、この字は、製した革、紙、綿で作つた紙、蘆管



の織緯で作った紙へ、羽毛の筆で色々な色に奇麗にかいたものだ。さして重大でないものは、蘆薈科の植物の葉で製した紙へかいたが、重大なことは鹿、熊などの革の両面へかいた、その革は大概長方形だが、時には長いものもあつて、その端には板を付けた、これをアナルチース (Analtees) と名づけた、これはアンナル (annals) 即ち年代記の意味なのだ、古くはこの象形文字は、僧侶の専用で、門外漢には分らなかつたのだ。

言ひ傳へによると、アツテック種はマヤ種の記録を破壊したといふ事だが、西班牙人もまたこれを破壊した、メキシコの僧正ズマラツガ (Zumaraga) ニカタンの僧正ランダ (Landa) も亦、彫刻物、肖像、木に書いた書きもの、紙や鹿の皮へ書いた書や、象形文字等を焼き棄てた、但しランダ僧正は、マヤ種の僧侶から、何か習つた事があると見えて、宗教上の書き物を翻譯する積りで、マヤ種の文字を解する事を企てた、是に於て、僧正は、文字を何個が指示したけれど、これを解釋する事は出来なかつた、つまりこれ等の文字は分らず、その種族の歴史も何もよく分らない、併し各種の文字の比較研究の方からは、マヤアツテックの書き物は、役に立つのだ、メキシコの博物館には、この繪の書き物が残つて居る、種族の移住、年代記、神の犠牲を始として、小兒教育(小兒の課業、小兒の罰、小兒の食物)に關するものがある。

象形文字に就ては、文字が漸次に發達する有様も、亦印度種の書きもので分る、例へば敵を指す爲めに矢を書き、その矢の先の方向で、敵の方向を示し、玉蜀黍製の菓子(玉蜀黍)が、口から出て居る形が、食する意味、唇の間に水の符號をかいて、飲むことの意味、矢の頭の様な字をかいた水平線が、耕地といふ様な風に、なつて居る、またこの畫は、その指す者と同じ色に、彩つてあることもある、進んで抽象的の例には、手を擴げた形は、航海の意味になつて居る、これは確かに、第四の時期の方に進歩しつゝ有るのだ、人名地名は符號で示す、例せばチャプルテペック (Chapultepec) は蠡斯の小山といふ意味なので、その代りに、小山と蠡斯が畫してある、ツァンパンコ (Tzompango) は頭蓋骨の場所の意味なので、敵の頭蓋骨が置いてあることにして、二本の柱に栓を通して、その上に頭蓋骨を載せた畫が畫してある、マキルソチトル (Maunkochitl) は、五つの花の意味で、花に點が五つ付いて居る、これ等と同じ例として、謎地口の類がある、畫が發音の代りになるのだ、日本にも例が多い、英語でいふと金雀花(ウイスタリア) whisk bloom と鍵(key)をかいて、ウイスキー酒(whiskey)の意味とし、目(アイeye)鋸(saw)小兒(エー、ボーイ & boy) 燕(スワロー swallow) 鶯(グース goose) 覆盆子(ハリーベリー) をかいて、アイ、ソー、エー、ボーイ、スワロー、エー、グース、ハリー (I saw a boy swallow a gooseberry) 即ち「私は小兒がグースベリー酒をのむのを見た」といふ意味になる、ウエストミンスター寺院 (Westminster Abbey) の住持アイスリップ (Isip) の堂には、アイスリップといふ名を、眼(アイeye)と人が樹を滑り落つる畫で表はしてあ

る、滑ることは、スリッポン (ship) の S からだ、エキビター會堂 (Ester Cathedral) の オールナム僧正 (Oldham) の堂には、鼻 (マツル Ovi) が書してある、セントサビオネン寺 (St. Saviour's Church) に は住持のバーナム (Burton) の名が藪の形としてある桶を顯はしてある、これはバー (bur 藪) タン (turn 桶) の意味だ。

第四の時期 古メキシコ種の書き物は、第三時期から第四の時期へ過渡の時代を示すものだ、例せば、其王の名に、イツッコアトル (Itzcoatl) と S がある、之は小刀、蛇と S の意味だ、するに、

第四十二圖 イツッコアトル



第四十三圖 イツッコアトル

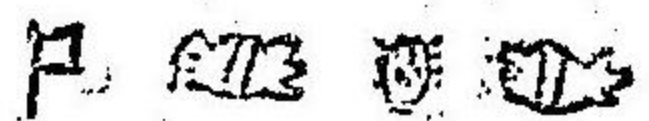


ル、テリエン、コーデックス (LeFolier Codex) の S 書きものには、蛇 (コアトル coatl) 及び小刀 (イツツリ itzei) で現はしてある、(第四十二圖) これは全く繪で表はしてあるのだが、第四

十三圖に擧げたヘルガラコーデックス (The Vergara Codex) には、全く謎の形になつて居る、イツツ (itz) は武器 (イツツリ itz) (iz) で表はし、コアトル (coatl) は蛇の繪でなくて、こゝでは土製の壺 (コ (ミトル) co (mits) と、水 (アトル) (e) (e) の符號で表はしてある、これは全く、發音を表はすのであつて、意味でもつて、小刀、壺、水と讀むのではない、アツテック語でイツッコアトルと讀むのだ、

西班牙がこの國を征服してから後、西班牙の僧侶は耶蘇教に改宗したる土人に、アビーマリヤス (Ave Marias) バタノースタース (Paternosters) (我等の父) などいふ言葉を教へるのに、この言葉の發音に相當する繪で示した、即ち旗 (パントリ pantli) 及び梨子 (ノクトリ nochi) を書いて示した、水 (アトル) (e) (e) の符號と、蘆會 (メトル) me (e) の符號を結びつけて、アメトル (ame) (e) と S 文字を作つて、アーメン (Amen) とした、バタノースタースは第四十四圖の様に、旗 (パントリ) pan (e) (e) (石) (トル) te (e) 梨 (ノクトリ) noch (e) (e) と、また今一度石を畫してある、バタノクテ (Pa-te-noch-te) 又はパテトルノクテトル (Pa-tel-noch-tel) と讀むのだ、西班牙人はメキシコ人に其開化その宗教を弘めようとして、色々工夫して、遂には便宜上公文をもメキシコ固有の繪文字で示すこととした、併し、これは永くは續かなかつたが、その時代の繪で書いた公文が、今も澤山残つて居る、メキシコ博物館にあるものには、新着の白人と、その船、その馬、砲口から煙や火の出で居る大砲等を畫いた者がある、文字發達史の上からいふと、これ等のメキシコ文字は、實に音聲文字に近づきつゝある時期を示すもので、今少しで全く音聲文字に進歩するのを、マヤ人がアツテック人に征服せられ、アツテック人はこの文字を發達せしむるとを知らず、その間にアツテック人も亦、西班牙人に征服せられて、その爲めに、この文字は、發達することが出来なかつたものだ。

第四十四圖 書誌の - タスノ - タパ



### 第三章 支那、日本、及び朝鮮の文字

支那は世界の古い國であるけれど、何事も古の儘で進歩の度の遅い國だからして、文字も、やはり二千年以來同じ程度で居る、その昔結繩法が行はれて居つたのが、その後これに繪様の文字となり、遂に象形と音聲との文字となつた、その言語は一綴字 (monosyllabic) の時期以上に進まなかつた、そして文法上數、格、時、法等に言語の變化がない、又同じ言語が、名詞働詞その他の品詞となつても、同形なのだ、だからして、文章は、文字の排列の順一つで出来る、實に支那文法は、只文字の置き場所に歸するのだ、一寸例をあげると、大の字は一字で大きさ、大きい、大きく、大きくなる、大きくする、等の意味となるのだ、併しこれを口にする場合には、文字の位置の外に、調子と身振りで分かるのだ。

支那文字は發生の有様によりて、六通りに分る。

- 一、そのもの、形をかいた繪畫。
- 一、文字創造者の意にて作つた者。
- 三、二字合せて一字となつたもの。
- 四、倒置したもの。

五、その物に關係した字を借りたもの。

六、その一部分は意味、一部分は音を表はすもの。

右の第一種に屬する例を挙げると(第四十五圖)日は輪を書いて示し、月は新月形で示し、山は峯の



形を三つ書き、雨は弓形の下に水の滴を書いたのだ、之は、ものを表はすに充分でないからして、この種類の字は少ない、只この第一種のみでは、文學も何も起らないのだ、第三種はその字の意味が分るから、これより面白い、又時にはつまらない滑稽に過ぎぬのもある、妻の字は女と帚とから起つて居る、これは妻は家政に關係するからだ、男は田と力だ、男は田を耕すからだ、利の字が禾と刀とから出来て居るのは、支那は農業を專一とした國柄だからだ、山と人と合せて仙、目に水は泪、門に耳は聞く、日月を并べて明、人と二で仁、女三つで姦、林と女



で婪、等である、これ等の字のみでは不完全な所から、一つの音の字が出来る、同じ音で意義の違ふ字に用ふる事となつた、これは形を變ずるか、又はその儘で、



用ふるのだ、初めはこの符號は四百五十に過ぎなかつたが、今では發音の變化からして千二百以上



になつた、その實、今の支那の字書には、四萬字許りある、これは右の六種の文字發生の規則で出来たもので、其多くは二つの文字を結合して作つたものだ、例へば人の字のつく字が六百字、木の

第四十五圖 支那文字發生の圖

つく字が九百字許りもある、これは皆人又は木に關係ある物の名なのだ、木扁に白は柏かしは、人扁ならは伯はく、鬼がつけば魄たまし、となるの類だ、舟の字はふねの意味で、且つふねの畫から來て居る、併してそれが色々の字と結合すると、色々の意味になる、水につけば漕さやな、言扁になると諺ことわざ(多言の意味)、火につくと炳ほひ(炎の立つ意味)車につくと輪なぐさ、等となる、であるから、支那文字は悉く知り、悉く使用することが出來ぬ、英國の十歳になる小兒は、二十六文字を知つて、讀み書きする、日本でも四十八字を自由に使へば、その思想を發表するに、何の不自由もないのだ、これに反して、支那人は一通りの學者でも、支那字を悉く讀み、悉く書くことは出來ないのだ、支那人は平常たゞ四五千字を用ひて居る、支那政府ではアルファベットに近い方法を考へて、筆談に用ふる様にしようとしたが、失敗に終つた。

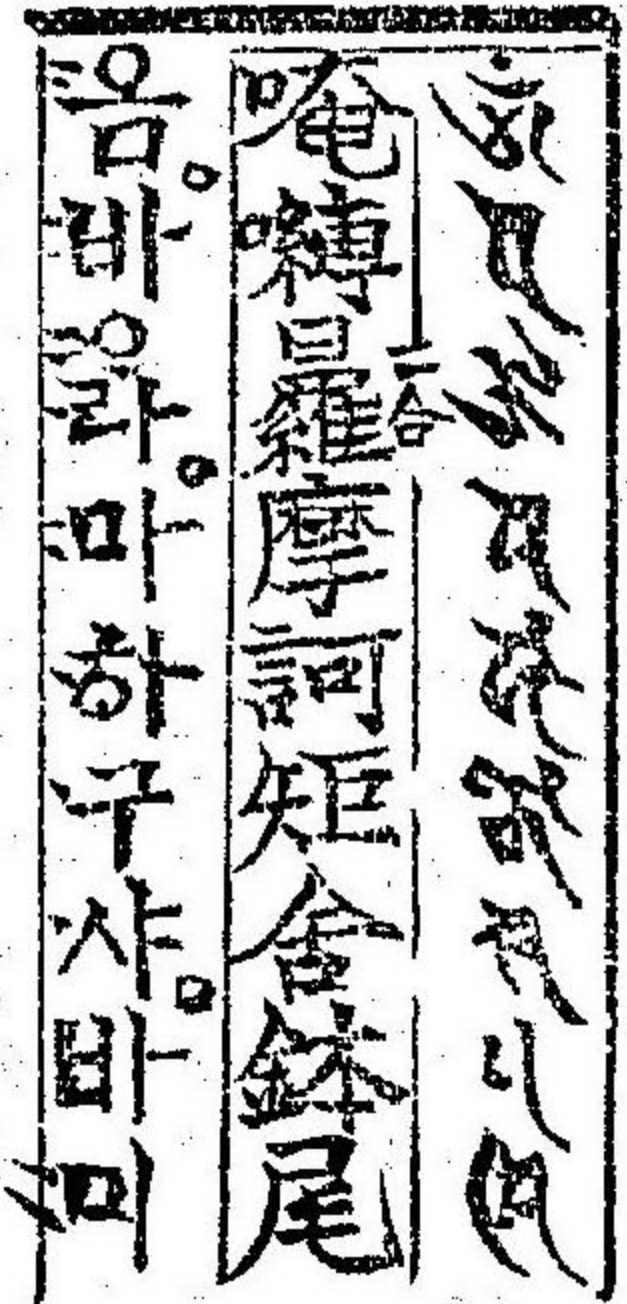
日本では、支那文字の中から、ある文字を擇んで文字を作つた、これを「いろは」といふのは、後に便宜上、これを一首の歌として排列した順序に従つて、その始めの三字を以て呼ぶのだ、丁度羅馬字を排列の順で、アルファベータ(alpha, beta)といひ、遂に英語でアルファベット(alphabet)といふに至つたと同じ譯だ、この文字は、排列するには、至つて造作ないけれど、事柄を記すには、猥りに長くなる不便が多い、その文字には二体ある、一は平假名といつて支那文字の草書から出で、一を片假名といつてその楷書から出て居る、そして各四十七字づゝある、片假名の方は五十字ある

けれど、三字は使用しないのだ、平假名の方には、變體の文字があるけれど、その發音に於ては、何の差もない、世に平假名は僧空海、片假名は吉備真備の作としてある、思ふに、神代文字の有無論は姑らく置いて、支那文學渡來の頃までに、適當な文字が一般に行はれて、居らなかつたらしい、そこで支那文字が傳來してからは、この文字を習ひ、支那文學を研究すると同時に、一方では、日本の言語を、支那文字を借りて音譯することゝなつた、併し支那字をその儘に用ひては、字畫が多くて、不便の處から、遂に字畫を省略して、兩種の假名を作つたらしい、これも一時に作つたのでなくて、追々と出來たのだ、これを空海がいろは歌に詠じ、眞備が五十字を撰定したに違ひない、但しこの兩人が、これを作つたといふ確實な證はないが、とにかく、その頃に誰か、集めたものに相違ない、併し現今日本人の用ふる普通文は、この假名に支那文字を混用するものであつて、文字にてかく文章と、口にてはなす言語との間に、文法上にも差がある、そこで一方には文章改良として、言文一致体を主張するものもある、普通教育に於いては、漢字節減説が行はれて居る、又文字の方では西洋風の盛な時代には、羅馬字會の設立された事もあれば、その反動としては、「かなのくわい」の起つたこともある、近頃でも、音符を發明して、文字改良を説く者があるのだ、日本の學者は、今後幾年かの間は、これ等の問題の解決に、心を苦しめねばなるまい。

朝鮮では、公用文は支那字を用ふるけれど、下民は一般に一種の音聲文字を用ふ、これは佛教僧

侶の作ったもので、印度の梵字の草体から出たものだ、宗教の勢力は著るしい者で、今も昔も、文字文學等に影響を及ぼして居る、僧侶はその宗教に、人を引きこむ爲めに、その經典を他國の文に

第四十六圖 支那及西藏文字の對照



翻譯することを務めて居るのだ、傳説によると五百年許り前、複雑極まる支那文を避けて、新たに文字を工夫さしたといふことだ、即ち西藏文字を基礎として、子音を作り、支那文字を省略して、六ヶの母音を作つたといふことだ、この文字は第四十六圖に示す様なもので、支那文を翻譯した時に、行をならべてかける様に、また支那文字の様に見ゆる様に、出来て居る、朝鮮文字の創造に關して、支那には、「これは戸の格子の形狀から、考へ出した者だ」といふ、面白い傳説がある。

### 第四章 楔形文字

前章まで述べた支那マヤ等の文字は、各別に發達したもので、歐羅巴のアルファベットと關係は無い、今からは、歐羅巴のアルファベットの出でた根元らしく、且つ、歐洲文化の淵源となつた文字の談をしよう。

メソポタミヤ (Mesopotamia) の文字は粘土製の板又は圓筒、アッシリヤ (Assyria) バビロン (Babylon)その他、古の東洋諸國から出る大きい碑などに書かれてある者で、世に楔形文字 (cuneiform letter: cuneus は羅典語で楔の義)といふのがこれである、これ等の物は千六百年許りの間、泥土に埋まつて、世人から忘れられて居つた、瓦片や何かにかいた、角のついた奇怪千萬な文字の意味が、今日の文明人に了解する様になるとは、發見の當時は誰も信じ得なかつたであらう、然るに西班牙の旅行家ピートロ、セラ、バンイー (Pietro della Valle)は、西紀千六百二十一年に、ヘルセポリス (Hersepolis) の廢墟を過ぎつて、何か分らぬけれど、矢の頭の様な文字を見つけて、一寸、疑問を挿んだ、彼れは字らしいもの、尾は左の方にあつて、右の方には一つもないのを見て、これは左から右へ書いたものと判断した。

今この發見當時の有様を想像すると、廣い土地を一目に見下ろす様に、人工で作つた大きな高臺が

あつて、その後部には、圓い高い山がある、そこに立派な楷子段が一つか、または二つあつて、上の方で一所になる様になつて居る、之を登つて行くと、色々の宮殿があり、羽翼のある牛や、神、王子等を表はした彫り物などが、立派に残つて居る、すると、後の山の上の自然石に、宮殿の主人の墓が設けてある、その岩や壁には、一面に楔形か又は矢の頭の様な文字が彫りつけてある、この字は楔や角許りで出来て居つて、それを色々に配合してある、この國語に關する記録やら、その意味やらは何も分らない、その近所に住んで居る無學な人民等は、山の上に見ゆる羽翼の生いた怪物を見て、驚いて居る、この岩や壁の楔形の文字は、何か魔力の意味がある様に思つて居ると、言ふよりは、この文字は、獅子や牛が彫り物の番をして居る、今の人には分らない寶物を、あける鍵でもある様に思つて居るのらしい。

さてこの文字様のものが、何であるかに付いては、色々の説が出た、西紀十七世紀の學者等は、この文字の由來に就ては、この石造の怪物の下に、怪しい天幕を張つて、生活して居る土人よりも、智識がなかつた、かのデラバレーが、この地に來て後、幾年か経つて、東洋學者のハイド (Hyde) は、ペルシャ古代の宗教を記した著書の中に、眞面目に説明して曰く、「この符號は、昔の空想に富んだ技術家が、同種類の線の配合で、どんなものが出来るかを、試験したのだ」と、併し彼れが眞面目で、「これは當時に有名であつたノルマン人 (Norman) の斧細工と同種類だ」と言はなかつた丈

けがましなのだ、又ある古物學者は、「これは呪の符號だ」といつた、別な古物學者は、「これは古代の僧侶の神秘的な公式である」といひ、または、「古のカルデア (Chaldean) の星を禮拜した人民の、天文の符號だ」といひ、又は、「これはその昔、造物主がアダムに教へた神秘的な言語で、人類の最初の言語は、これから出て居るのだ」といつて居る、或はこれを支那、サマルチヤ (Samaritan) ルーニック (Runic) 又はオガム (Ogam) 等の文字として居る、殊にこれを以て「昆蟲が食つた跡だ」といふ理論家が出づるに至つては、その愚を笑はざるを得ずだ。

然るに西紀十八世紀の半ば頃に、熱心な研究者の一派の人々は、遂にこれが研究の緒を開いた、最初にこれを研究したのは、大旅行家カーستنニール (Carsten Niebuhr) で、ニールはデラバレーと同じく、これを左から右へ書いたものとし、またこの文字は、三種の形の文字の配合だと結論した、その後西紀千七百六十四年にニールはこの文字の模寫を出版して、「三種の一種は、他の二種よりは單簡である」といふことをいつた、併しこれ以上の研究は出来なくて、その意味は未だ秘密であつた、其後三十年たつて、デンマルクの言語學者ミンター (Münter) は、斜めになつて居る線は、所々にあるもので、言語を分離する符號だと考へた、また「この文字にはヘブリー語、セミチック語にはない様な、母音の符號がある」といふ事を發見した、之から段々分かる様になつたのだ、ヘロドタスの歴史には、「西紀前第五六世紀頃亞細亞を領したペルシャのアク



「メニッド王家(Achemenid dynasty)の言ふのが有つた」と記してゐる。ヘルセボリスの廢墟は、この王家のであるといふことになつた。有名なダライマヌ(Darius)は、この王家の王の一人である。ハロドタスの言ふに、「この王はボスホラム(Bosphorus)海峡に二本の石柱を建てた。一本にはアッシリヤ語、一本にはヘレン語(Hellenic)の文字を記した」。自分の領する國民にしらせる爲めに、二國語以上の言語で、記すことは、ヘルシヤ當時の習慣なのだ。

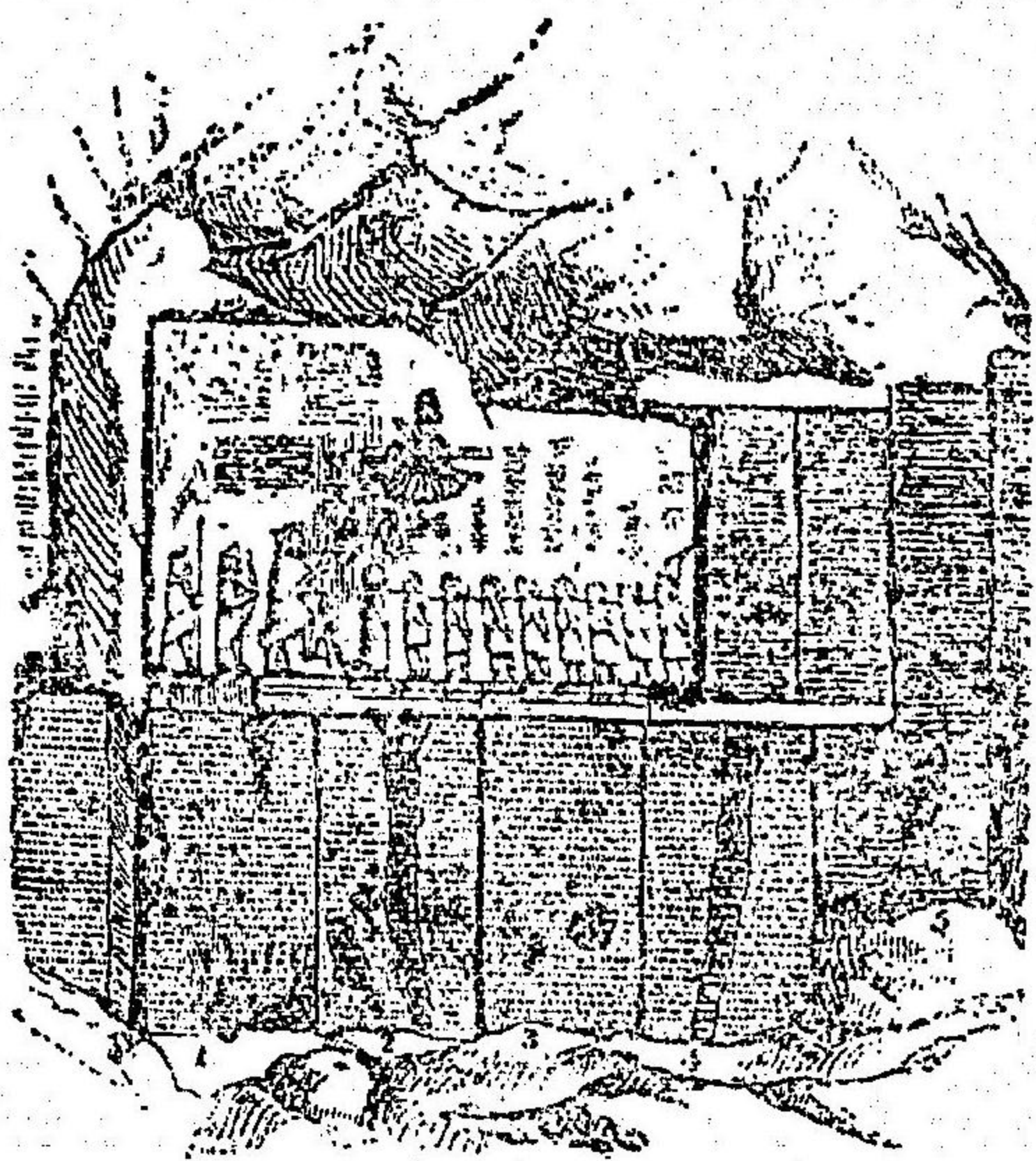
さて佛蘭西の學者にエム、ド、サツシー(M. de Saey)といふ人があつた。此人は西紀千七百五十八年に生れた人で、西紀二百二十六年から六百五十一年まで、ヘルシヤを領したサツサン王家(Sassanid dynasty)の書物や物を模寫した。これはヘルシヤ語とアラマイク語(Aramaic)の混合して出来たるペーレビ(Pehlevi)語といふものであつたものだ。ドサツシーは、その読み様は、下の形式によるものと考へた。「諸王中の王MまたはW、即ち諸王中の王Xの王子が何々をなせし云々」といふ形式なのだ。この時ジョージ、フリードリック、グローテフェンド博士(Dr. Georg Friedrich Grotefend)は種々の例證を蒐集して、「ヘルセボリスの文字は、三國の國語で書いたもので、カルステンニーブールの言ふ如く、一國語の三つの文字から成り立つて居るものでない」と言つた。彼はまた研究の結果、この文字の形成上、固有名詞は別として、何か公式があることを言つた。もしこの文字がド、サツシーの言の通り「諸王中の王Xは、諸王中の王Dの王子」といふ公式に合ふな

らば、DはXの父であるに相違なく、Dは種族の建設者で、その父は王で無かつたのらしい。さて歴史で考へるとダライアスの父ヒスタスベス(Histaspes)は王でなくて、カムビゼス(Cambyses)の部下の縣知事(Satrap)であつた。グローテフェンドはこの歴史上の知識を、言語學上の知識と結合して、歴代の王の名を讀む方法を發見した。併しこの人はその後三十年も生きて居つたが、この後、偶然にネブチャドネツツアル(Nebuchadnezzar)といふ名をアッシリヤ文字の中から讀み得た外は、何も貢獻することは無かつた。その後研究者も多く出て、遂にサー、ヘンリー、ローリンソン(Sir Henry Rawlinson)に至つて、始めてヘルシヤ、バビロン、アッシリヤ等の古い國語を讀むべき方法を發見した。こゝに於いて、殆んど全く世に知られざりし世界史中の一章が、吾等に明かに分る様になつた。こゝに於いて彼は「楔形文字の讀み様を發見したのは、ロゼッタストーン(Rosetta Stone)によつて、埃及の象形文字の讀み様を研究したと、同様の價值があるものだ」と言つて、自らその著書を大業しく吹聴した。

初めローリンソンは、今から凡そ六十年許り前に、中尉で、ヘルシヤ王の軍を訓練する爲め、その國へ渡つたが、もとより東洋史や考古學を研究して居つた人だから、未研究の古物の多い、この國へ行くのを、大に喜んで居つた。ヘルシヤで研究材料の多い中に尤も古碑類に富んで居る地方なるキルマンシヤ(Kirmanshah)から、二十哩許りあるベヒスタン(Behistan)の、嶮はしい巖に刻

みつけた西紀前六百年頃の三國の言語で書いた文字があつた、ローリソンは生命懸けで、岩に攀ち登つて、出来る丈けづつ、これを寫して、これを度々つづけて、數年の間に有る丈けのものを皆

第四十七圖 ハロメタンの岩石彫刻



寫してしまつた、三國の語とはバビロン、メーデ即ちスキヤ(Mede or Scythian)及び、ペルシャ語で、併行になつて、一千行以上も書いてあつた、それはダライアス、ヒスタスベスの傳記、事業、勝利、その領下の人民等の事を書いたもので、浮彫になつて居る繪があつて、その繪に、王が手に弓を持つて侵略者ガウマテス(Maumates)の伏して居る上に、足をかけて居る、九人の叛王等は鎖で繋がれて、王の前に立つて居る、その王等の肖像の上には、その名が書いてある、ペルシャの兵卒二名はその後に従

つて居る、ガウマテスの像の上には、「これはメーギア教徒(Magian)ガウマテスである、彼れは横はる、彼れはいふ、われはサイラス(Cyrus)の子、スメルデス(Smerdis)だ」と、九人の捕虜の上

も、これと同じ様に「これは某である、彼は横はる、彼はいふ、我れは某國の王であると」と記してある、その文の初めは、ペルシャの光の神オルマツツ(Ohrmazd)へ上げる神聖な願ひの意味で、「アケメニッドの王位に、ダライアスを上げせ、ペルシャの王冠を戴かせる」願ひを精しく書いてある、その中には、スメルデスの敗軍、ペルシャとバビロンの間のスシアナ(Susiana)州の反亂が記してあつて、「余はかして軍を出だした、反亂したるアトリナ(Atrina)は、余が前に鎖につながれて居る、余は彼を殺した」と書いてある、同じ様なことが、他の反亂人のことに付いてもかいてある、その中にはその鼻耳舌をさらされて、その仲間と一處に磔にされたものもある、猶記載するに。



ダライアス王曰ふ、この國々は余に對して反を企てた、彼れ等は併りて余を分離した、彼れ等は余が民を欺いた、余が軍は余が命令によりて、彼れ等を捕へた、ダライアス王曰ふ、汝はこの後、王となるであらう、汝は、人を欺いた罪はないから、惡をなした人は相當に裁判せよ、もし汝が支配すれば汝の王國は大きくなるだらう、ダライアス王曰ふ、余はオルマツツ神の思召で事を行ふ、この石碑で我が所爲を讀む人は欺かれたものと思ふな、こゝに書いてあることを信するに躊躇するな、ダライアス王曰ふ、余が偽言ないはぬ事は、オルマツツ神がその証人である。

この記録は、その中の固有名詞がヘロドタスの歴史にあるものとよく符合するのは、文字の説明の方法を誤らぬ確實な證據だ、又ヘロドタス及びゼノフォン(Xenophon)のペルシャ人の性質に關する記事によく合ふ、兩氏の書に、眞實を愛して虚言を惡む、美風の事があるが、この記録でも、

その事實が見ゆる、蓋しこの美風は、確かに他國民に勝る美風で、東洋人は一般に、この風に欠乏して居るのだ、希臘人もまた實にこの美風を欠いて居る。


ローリンソンのペヒスタンの文字の研究は、メソポタミヤ文化の秘密を世に示したのみで無かつた、ベルシヤの文字は、現今のベルシヤ語の祖先で、この文字の意味が分つてから、メヂヤ即ちスキシニヤ語や、バビロン語の説明が出来た、そこで文字の發達史上、第二の時期から第三の時期に進み、第四の時期に近づく有様が明かになつた。


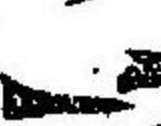
さて楔形文字は、初めはリクシ(Likhis)といふ植物性の物質に書いたが、遂に粘土を用ふに様になつた、これはこの國は粘土に富んで居つた事と、この方が耐久の効力があるからだ、この粘土の板又は圓筒に、蘆で字を書いて、これを日に乾すか、又は焼いたのだ、但し石や金に字を彫るには、「のみ」を用ひた、アッシリヤ文字は、時として甚だ細いのである、小さい面に澤山の事柄がかいてある、その細字をはるには、「むしめがね」を用ひたらし、ニネベ(Nineveh)で旋盤のあるレングズを發見したことがあるが、恐らくこれに使つたのだらう、楔形文字に角のついて居るのは文字をかく道具によつたのだ、技術の表現は、その材料によつて制限されるもので、フィヂヤス(Phidias)は、シエン(Syene)の堅固な花崗石では、パルラスアラーチ(Pallas Athene)を作り得なかつた、ナイル河畔の人間獅身像(Sphinx)が餘り粗暴でなすのは、ペンテリクス(Pentelicus)の大理石にて作


つたからだ、楔形文字の出て來た根元は分らぬけれど、繪畫から起つたといふ事は確かだ、謂はゆる線狀バビロン文字は、太陽を金剛石の形  であらはして居つたが、これが  になり、遂に、楔

鳥 羊 牛 立つ 手 人 鱈 魚 蘆 同 穀物 天神 星



形  になつた、初めは輪狀であつた文字が、石や粘土にはるに困難な所から、遂に角のあるものになつたのだ、キーン博士の「過去及現在の人類」(Man, past and present) と稱する著書の附表には、楔形文字發達の模範的の例が載つて居る、

その表には、ニネベを  で現はして居る、この字の古S形は  である、

で、家といふ意味の繪に、魚  を加へたのだ、これはニネベは、始め漁夫の家の集合であつた事を表はして居るのだ、楔形文字には新体と古体を交へて書いたのもあり、同じ字で幾通りもの意味があつて、解釋に苦しむことが多い、又他の國語でもある様に、分類符が使つて有る、例へば

人名には豎の楔形が一本、國名には横の楔形が三本使つてゐる、此表を見ると、符號が追々便利なる形になる様に見える、牛の字は初めは角と頭の形なのが、ヒスタンの餘程單純になつて居る、第三欄の煩はしい楔形文字は五百許りある、第二欄のメデック文字は九十六個の綴字符號を含んで居る、ペルシャ人の説には、三十六ヶのアルファベット様の符號があつて、その中四つは原始のアイデオグラムが残つて居るといふ、これらのアイデオグラムの残り物は、色々説明する事が出来る、身体各部の名稱、手、足、胸、前臂等は尺度の單位となつた、英國のフート(Foot)は足の意味、尋はFathomで、胸(bosom)と同義だ、日本でも指をひろげて咫、兩手を開いて尋、一握が束、指一本が伏等の例がある、I II III IIII等の數字は、指から來て居る、英語で數字をdigitsといふのは、羅典語のdigitusから出て、指の意味だ、グローテフェンドの説に、Vは掌を擴げて四本指をどちた形で、五の義となり、Xは兩手で十となる、IVは一本指だけ引いた形VIは増した形で、四及び六となるのだ、野蠻人の間には一種の分數を記す法がある、昔多くあつて今は少なくなつたけれど、商家の目印は、やはりこの一種の繪畫的記號で出來て居つて、商家が客を引くに便利なものであつた、今もそここの理髮店にある、布を巻き附けた形の棒は、昔理髮師は外科醫の様な事をして、血をどる事をしたからだ、フローレンス(Florence)の收稅吏の符號、金色の玉は、今も質屋の店にかつて、浪費者の目を引いて居る。

さて楔形文字に立戻つてこれを述べると、支那語は一綴字で、その字數が四萬もあつて、これは皆音字に、ある區別字を加へて、その音字は何に關係したかを示したのだ、然るに昔のユーフラテス(Euphrates)河畔の住民は、皆多綴字の言語を用ひたから、全綴字を表はす符號の必要がある、バビロンで瓦に書いた文法書が出來た、これをシラバリア(Syllabaria)と名づける、この中に文字の表が載つて居る、そして一方には、發音字が單綴字で説明してあり、またアイデオグラフィの時は一方にその説明が載つて居る。

此シラビズムに進んだのは、バビロン人が世に知られる長い前に、メソポタミヤの住民が既に作つたものだ、この住民といふのは所謂アッカチアン(Akkadians)で、詳しくいへばアッカドスメリヤン(Akkado-Sumerians)だ、アッカチヤンは高原地方、スメリヤンは平原地方に住んで居つた、この二種族が結合したことはよく分らぬ、或學者はこれをフィンノ土耳其種(Finno-Turkic)から出たとし、或はタータル蒙古種(Tatar Mongolic)に屬する者として居る、歴史の曙に、既にセミチツク人に歸した爲めに、その何時頃カルヂヤに移住したかは分らぬ、紀元前幾千年か前に、カルヂヤはバビロン人の祖先に襲はれた、バビロン人の祖先は、ヘブリー、フィンシヤ等のセミチツク種と共に、アラビヤ地方に住んだらしい、バビロン人は、その従服した種族と雜婚して、かの豊饒な土地に移住し、その支派のアッシリヤ人は、大河の北の山地、及び森林地方によつて、純粹なるセミチ

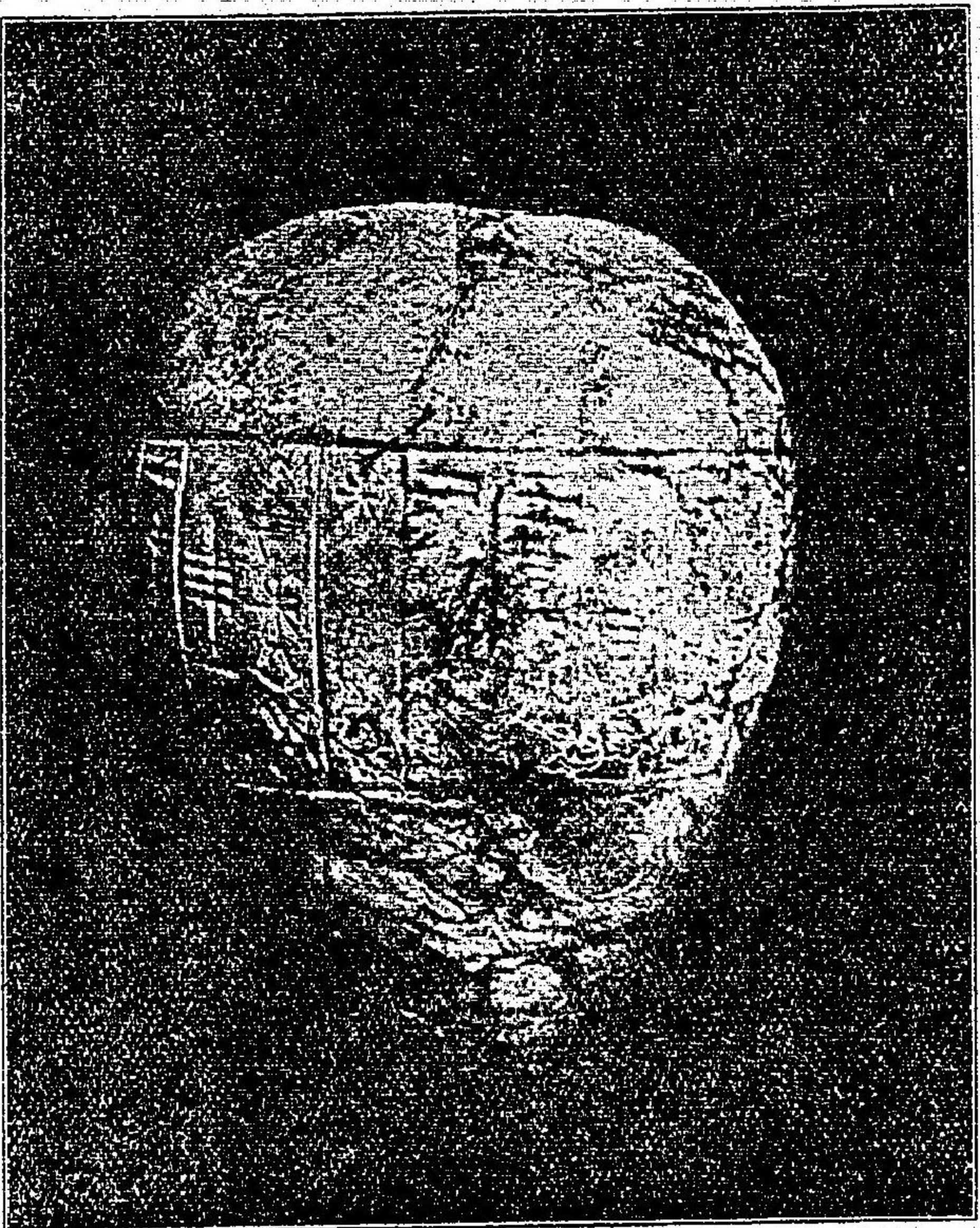
ツク種属として残つた、これ等の人種即ち所謂東方の羅馬人は、兵卒となり商人となつて、フィニシヤ及び他の商敵を征伐した、されど單に劍にのみ、たよつた爲め、アッシリヤの爲めに劍で亡ぼされた。

アツカヂヤ人(即ち古セミチック人種を包括す)が、カルヂヤを襲つた時には、已に野蠻の人民でなく、金屬を用ふる事を知り、工業家も居り、沼地であるからして、堤や溝の必要もあつて、これを作る技師もあつた、その法律や社會組織は進歩して居つた、前にも述べた如く、その國語は綴字になつて居る、その文學はその生活上の事を記録した外に、後來バビロン人を風靡せる宗教の基を起した、それでヘブリー人は遂に耶蘇教に歸した、この宗教は高下の思想を調和した、その根底は鬼神信仰であつた、天然の現象、日、月、星辰、土地等を禮拜し、魔術を用ひて呪咀治療等をした、これが他の野蠻の宗教と同じく、漸次と迷信に伴ふ公式を生じて讚美歌、祈禱等が出来た、これらの世俗及び宗教の文學に關する書類は多くある、その研究は、重に近世學者の、苦心の餘に出たものである。

楔形文字の例として、古くから尤も著名なのは、第四十八圖に示したる西紀前三千八百年頃のセマイト王、サルゴン一世(Sargon I)の雲斑石の圓筒形の印章だ、この印には「アツカッド市の王サルゴン一世、シツバラ市なる日の神サルナム(Sannas)に呈す」とある、大英博物館(British Museum)

に藏する板にかいた、モーゼス(Moses)に關する傳説の根本は、この王に關係して居る。

第四十八圖 サルゴン一世の圓筒形の印



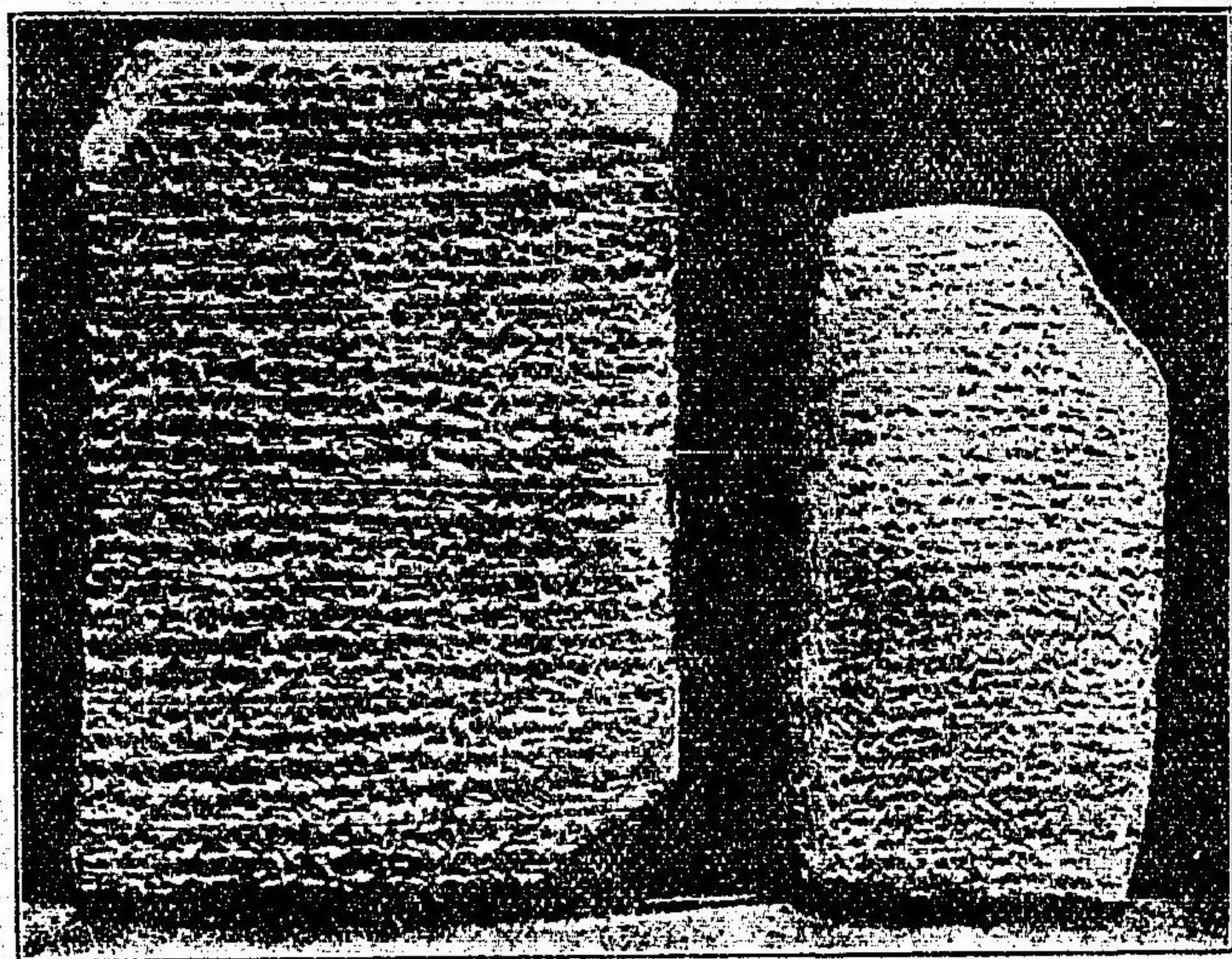
の貢物を得ることが書いてある、他の書物によると西紀前四千年頃に肖像が始まり、戦争に車を用

次は秃鷲の把手 (the Staff of the Vultures) の名づくるもの

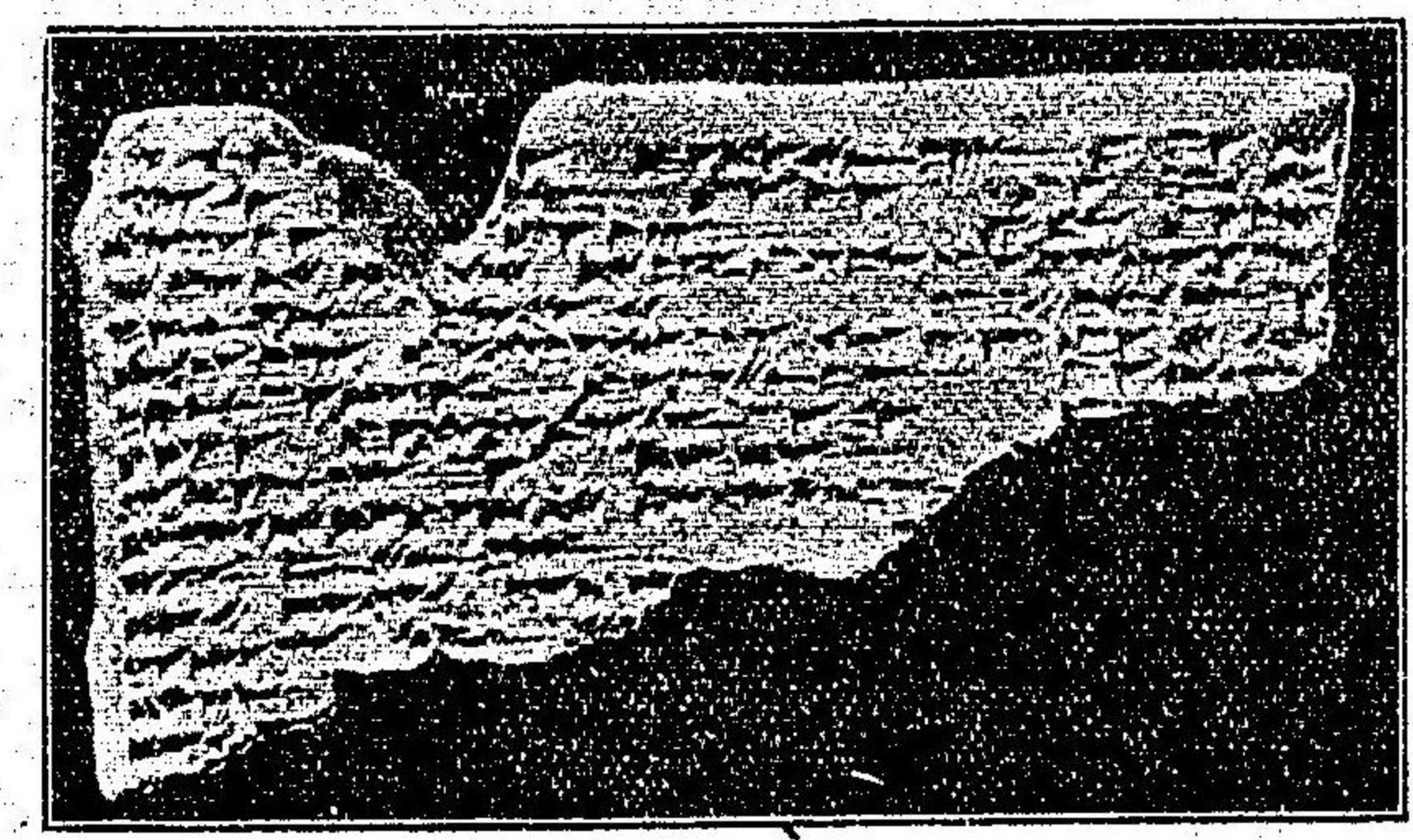
ので、その大部分は巴里市のルーヴル(the Louvre)にあるそれは西紀前四千五百年頃のもので、それには戦死者の首を、秃鷲が持ち去る圖がはつてある、これはシルヅラ(Silpura)の僧王エアンナツ(Eanna-du)が、エラマイト(the Elamite)の境界で、弓の國の人民 (the people of the Land of the Bow) に勝つて、穀物

ひ、銀銅を細工し、機織、詩作等が行はれ、敷を干まで敷る法があつたことを證明する。

板土のナルマアルレテ 圖九十四第



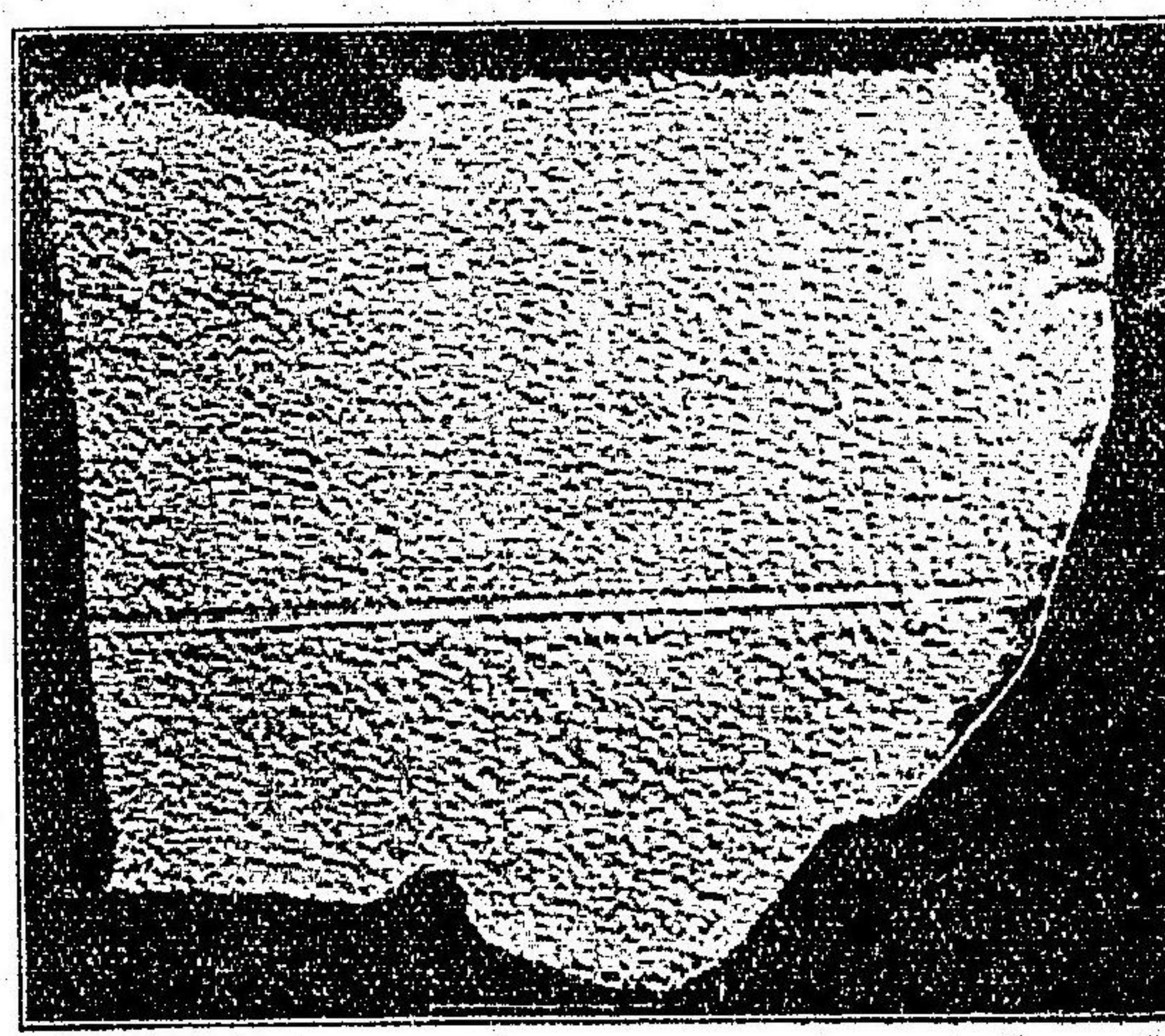
板土の紀世創 圖十五第



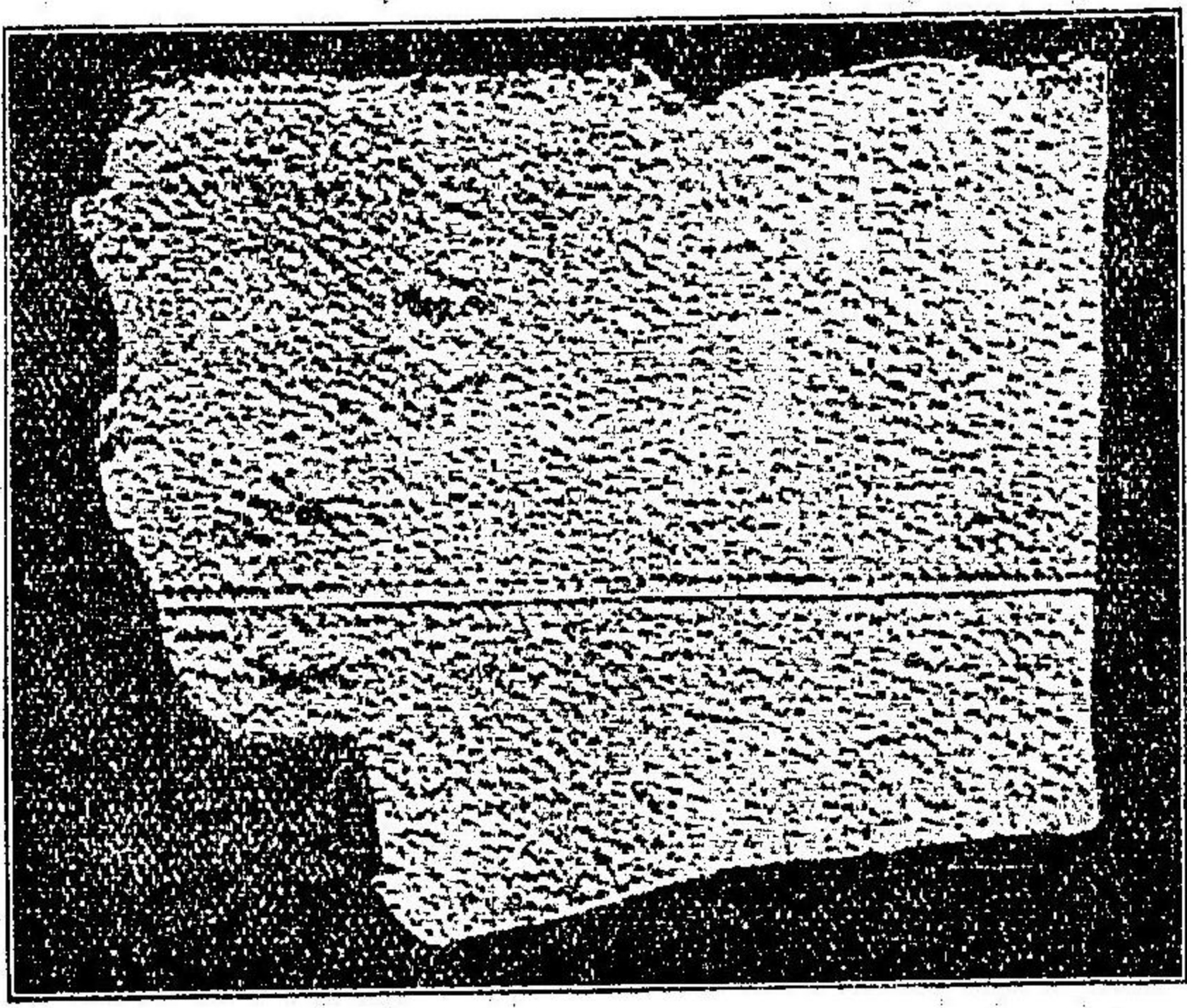
楔形文字で記した有名なもの例を挙げると、第四十九圖のテルアマルナ土板は、西紀千八百

八十七年、ナイル河の東岸メムフェイス舊市の南、百八十哩のテルアマルナ(Tell-el-Amarna)村から出たものだ、この村はアメンホフイス三世(Amenophis III)の建てた市街の跡であるから、この土板

板土の水洪 圖一十五第



同 圖二十五第



も同王の治世西紀前千五百年乃至千四百五十年頃のものであらう、傳説によれば、一枚は軍神への讚美歌で、一枚はヒツタイトの王子のかいたものだ、これ等は大に當時の埃及、バビロン等の政治上及び商業上の關係を明かにする材料である。

カルデヤの古傳説に關する土板は多くある、これは世界の創造滅亡、大洪水等に關するもので「創世紀」の出來たよりも、幾世紀か前に出來たものだ、第五十圖は創世、第五十一、第五十二圖は大洪水の傳説を書いた土板だ、イスライル人はこの國を亡ぼして後、その傳説を自國に取り、それがまた漸次に變形して、ヘブリー文學に現はれる様になつたのだ、であるからして、これ等の土板は今の聖書の「創世紀」の祖先であるのだ。

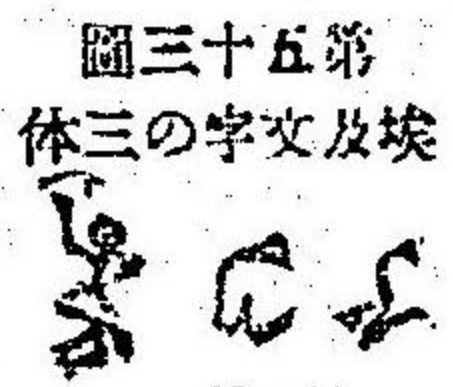
## 第五章 埃及の象形文字

埃及の古代の事跡は、ナイル河(Nile)の水源と共に、永く世界の秘密であつたが、第十九世紀になつて、その秘密の鍵は發見された、蓋し埃及人は羅馬の建設以前にありて、早く既に墳墓、方尖塔、寺院等を建て、<sup>パピラス</sup>蘆紙の巻き物に、文字を記すことを知つて居つた、殊に注意すべきは、埃及にては死人の記憶の爲めに、その記念を存するといふ念が盛であつて、これが爲めに、これ等の文字は今代まで保存されてあつた事だ、死人に屬するものは、凡て注意を加へて保存された、墓は家屋を作る様な設計で作られ、日用品飲食物などを、その中に貯へるか、又は墓の内部にその畫をかいて置つた。

埃及文字も亦他の文字と同じく、吾等の前に述べた時期を經過して、發達したものである、この文字は近頃まで歐洲のアルファベットの祖先と言はれて居つたが、これは誤解であつた、この埃及の文字はハイログリフス(Hieroglyphs)といふ名を持つて居る、ハイロス(hieros)は希臘語の神聖の義、グリフォ(glypho)は彫刻の義である、これは僧侶の專用の文字なりと考へて、希臘人がつけた名だ、この文字の早く世の中に知れたものの中には、アルファベットの如き性質を有して居るのである、併しこれはやはり繪畫から進歩變形したもので、その言語の根原を忘れたものでなく、只

その意味を少し變じたのみなのだ、埃及人は西紀前五千年に、アルファベット様の符號を用ひたけれど、決して今の歐洲のアルファベットの如く、單純な符號ではない、元來埃及人は保守的の人民だからして、祖先のしたことを變ずるを好まないのだ、フリンダース、ペトリ（Flinders Petrie）教授曰く、埃及人は何につけても裝飾といふ事を主として居る、支那人バビロン人は、その昔、美術心に缺乏せしものと見えて、その文字を改良して、單に便宜を主としたる線にしたが、埃及人はその文字を原の象形より大に變化するを好まなかつた、であるから、その文字も單に線によつて成

つて居るのでなく、或は廣く、或は狭く、或は深く或は淺く、常に調和を失はぬ事について注意して居つた、つまり埃及人は、世界中で一番美事な文字を有して居ることになつ



たど、

さてこの埃及文字には、楷行草の三体がある、楷書はハイログリフイックで原形のもの、行書はハイラチック（Hieratic）で、これを崩したものの、草書はデモチック（Demotic）で、更に崩したものだ、

甲、ハイログリフイック、これは畫符、想符、及び音符、即ち言語の符號、思想の符號、音聲の符號の三種から成立して居る、千七百許りある、その根本は粗畫から來て居る、この文字は石に刻み、木に畫き、または蘆紙獸皮等に書いてあつて、皆縦の行であるのだ。

近世になつて、埃及の古物を發掘して研究する事が流行し、ことにギゼー（Gizeh）及びアシモデヤン（Assimode n）の博物館には、早くから有名な遺物を藏して居る、その一つは西紀前四千五百年頃、第二王朝の第五王セント（Sout）の孫シェラ（Sera）の紀念の墓表で、アルファベット様の文字三字で以て、王國の名を綴つて有る、後、西紀千八百九十七年十一月に、ボルシャード（Borchardt）博士は、第一王朝を建設したメナス（Menes）王の碑を、セーベス（Thebes）の北、コプトス（Coptos）の對岸、ナガダ（Nagada）で發見したことを報告した、これはフリンダー、ペトリ教授の説に従へば、西紀前四千七百七十七年頃のもので、その王の死体（木乃伊）は、ギゼーの博物館にある、その副葬品に記してある文字を見ると、當時ハイログリフイックは、大に進歩して居つた様である、第一王朝以前の遺物は、西紀一千八百九十五年、北部セーベス地方に發見せられたが、これには何も文字が記して無かつた、つまり文字は、第一王朝の頃から出來たもので、カルデヤのセマイト種から傳來したといふ説がある。

埃及文字研究に關して、最も興味あるものは、所謂死の書（Book of the Dead）である、死の書には讚美歌、祈禱、及びオシリス神（Osiris）神への祈り、惡魔除けの呪文、下界（Amenti）への道しるべ等が記してある、この書の完全なものは、近來繪解きをつけて出版したものがあつて、容易すく買ふ事が出来る、この死の書は、金字塔（Pyramid）の中に、今も發見するもので、木製または石



製の棺にかいてあるのだ、併しヒクソス(Hyksos)が、セーベス王に逐ひ出された頃には、重にこれをパピラスに書く様になつたのだ。

パピラス  
蘆紙に書いたもので最もよく解釋の出来るのは「アエの蘆紙書」(Papyrus of Ani)である、これはセーベス人の作つたもので、第十八王朝から第二十王朝(西紀前一五八七一〇六〇)迄使用せられた、その言語は魔法的の性質を有して居るといふ、今この證據として、第七十二章の一節を譯出して見やう。

此の書、若し地上に於て死者に知られ、且つ其の棺上に記されたらんには、彼は其の望む所を得て、拒まるゝとならるべし、麵包及び麥酒及び肉をオシリスに献上せば……穀物を與へられ、天に在ます神の如く、永劫無限に彼の欲する所を得べし。

これは博士ウオリスバツヂが英語に譯したのを重譯したのである、其後近來になつて、他の蘆紙書の翻譯が出来た、その中に「呼吸の書」(Book of Breathing)といふのが有る、行書即ちハイラチツクで書いたもので、僧侶が死者に引導を渡す儀式等を記し、死者の再生、及び地上に於ける祥福の有様が説いてある、「汝の精神は生存すべし」、「汝の肉體は腐敗して消滅するも、汝は決して失はるゝとならるべし」……「神よ、彼の精神をして其欲する所に行くを許せ、而して、彼をして、未來永劫に、地上に住むとを得せしめよ」、など、いふことが書いてある。

見様によつては埃及文字の談話は、一般文字の發達の順序を、明白に示すことが出来る、殊に僧

侶に關する事に於いて然りだ。

凡そ或る者を表示するに、繪畫を以てするときは、如何に粗末で單純なるものでも、一目して其意味を知ることが出来る、然しながら、一步を進めて、徳義だとか、時間だとか、又は健康だとか、病氣だとかいふものを、表示する必要あるに到りては、是非とも符號を以てせなければならぬ、是を説明するに最も適當なる例は、今迄述べて來た埃及の記號法である、埃及のハイログリフは多少の改良はあつたが、要するに文字發達の第一階段にすぎない、今少しく實例を探つて見やう、蜂は親族の記號であるが、又他の意味にて勉強を表示することがある、蘆紙の巻物は智識を示し、駝鳥の羽は正義を意味する、これは其羽の長さが同一なるためであらう、棕櫚の樹枝は一年を意味する、これは一般に毎月新しく枝を生ずるからであるといふ、グリッドン氏(Giddon)のいふ所によれば、毎年最下の枝を落すが爲である、又僧侶の記號は狼屬を以て示すが、是蓋し僧侶が寡婦の家のみ嚴重に注目して居つたといふ、皮肉なることを意味するのであるに相違ない、母を表示するには禿鷲を以てする、これは禿鷲が、其の幼兒を保育するに、自分の血を以てするからであらう、渴を示すには、小羊が水のある方向に、走る様を以てし、力を表すには鞭を振ふ様を以てする、而して戦鬪は二人の武士を以てし、一人には楯を持たしめ、他の一人には投槍を持たしめてある、今日ダコタ地方の印度種(The Dakotah Indian)は、戦鬪を表示するには、埃及と異りて二人互に同じ

支度をさせるのである、埃及で夜を表示するには、オジツバに於けると同じで、弧線を書き下下に星を吊るのである、古代の人は之と少しく異りて、半圓を書きて、其下に星と同じく眼を記した、

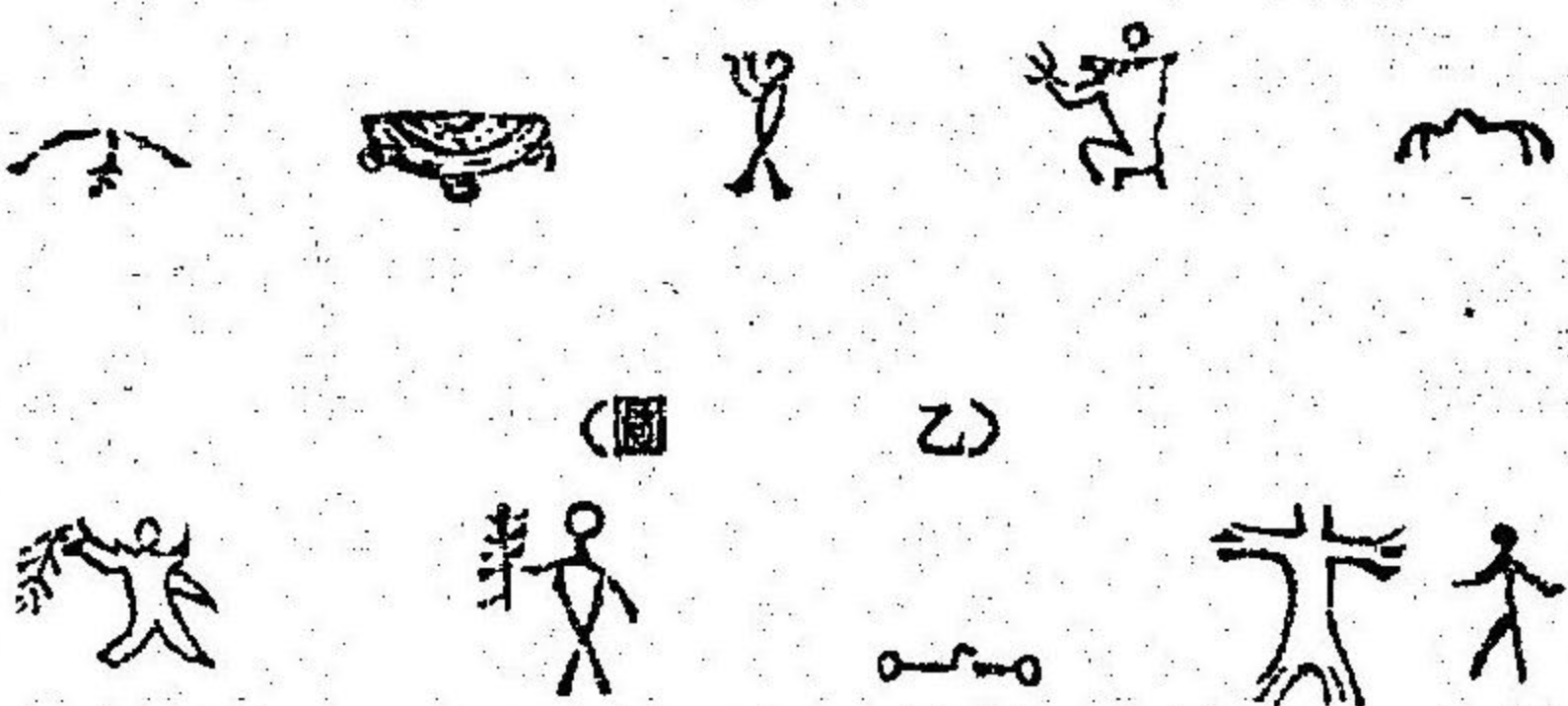
此他印度人、埃及人及び其他の種族間に、幾多の記號があつたが、要するに、皆音聲記號に達せずして、第五十四圖に示すが如きものである、概して、凡ての人に共通なるものは、精細に畫かれたといふことが出来る、

例ば水流の如きは常に能く畫かれるが、水を禮式等の用に供する場合に、其性質の變化より、記號も亦當然、他の繪を用ひざるを得ない、此點は埃及もメキシコと同様で、船から水が流れ出づる様を以て示し、埃及の記號には、特に武士が如何にも満足らし氣に、武器を以て跪座して居る所が書いてある、又否定の記號に就ても、兩國語間に類似の點がある、尤もその解釋に就ては、もとより疑なきを得ない。

かくの如く記號によりて思想を表示するは、比喩、謎等を含むものなる故、之を解釋するものは、充分に能く記憶を確め、明亮なる意味を捕へなければならぬ、些細なる疑問、又は不審が、記號の意味に混雜を來して、遂には誤解を引き起す様になる、故に意味を定めるには、餘程の注意を要するのだ、此のことは支那文字を述べたとき

第五十四圖

比較記號(圖甲)



に説明したから、茲には之を略すが、總じて是等は二種に分たれる、一は一語一思想を表示するに限らるゝ者で、他の一は幾多の意味に使用せらるゝものである、支那文字中には、使用法二百様に昇るものすらある。

併し、凡て思想を表はすには、文章に綴らなければならぬ、即ち名詞、形容詞、動詞其他種々の品詞を要するので、唯記號たるのみでは、用をなさない、且つ又思想は日々に進歩して行くものである、然るに之を表示する記號が、從來のまゝでは、とても完全に思想を表はすことが出来ない、そこで、此不便を救ふ爲に、繪畫記號で物を表はす時代には夢にも見ぬ様な發見をなすに到つた、即ち、字音記號を結合して、略字を作る様なつた、之に付いてカノンテローン(Canon Taylor)が、エドフ(Edouf)にあるトレミー十五世の記念碑から拔萃した面白い例がある、曰く、「古代埃及人の滑稽中には、一寸面白い意味がある、例ば白青石をケステブ(Khesteb)といふ、ケスは「止まる」を意味し、テブは豕を意味する、即ち「止まる豕」なる語は白青石を意味し、之を表はすには、人が豕の尾を捕へて止むる様を畫いた」と、蓋し彼れのいふ所は眞實であらうが、併し西方の國では、少し違つて、豕の進行する様を以て示して居る、此他オシリスの如きも謎語の一例で、オシリスは埃及人はヘシリ(Hesiri)と呼び、ヘス(Hes)は一席を意味し、イリ(Iri)は一眼を意味し、此の二者を畫きてこの神を表示した、尤も其後、埃及學者の解釋も漸次修正せられて來たが、琵琶の繪が、善

即ちチフアー(Nifer)なる語を示すとは明かである。蓋し是れ心と氣管とを畫いたものであらう。

右述べた様に吾等は人が有する凡ての思想は、到底かくの如き僅かな象形文字では表はし盡し得ないことが分る、果して然らば、記號や略音等の是等の紛雜なるもの、代りに、何を以て、是等のものを表はしたらば宜からうか。

この不自由を避くる爲に、爰にアルファベットなる者が生れて來たのである、此の時は實に人類が社會に於て、最も大なる勝利を得たのであつた、惟ふに古代の略字は、字音を示したものであつたが、其字音は一音でなく、従つて母音子音などは、未だ出來て居らなつた、彼の猶太語及び其他のセミチック語も、眞に一も母音を有たぬ、唯個々の文字を持つたのみである、畢竟、前來長く述べ來つた所を一言で言へば、文字發達の順序は、第一に繪畫的記號、第二には字形に拘らずして意義を表記し、第三には言語を表はす略記文字、第四には字音を表示する略記文字となり、第五にアルファベットが出來たのである、即埃及人が、古代に持つて居た四百餘の略記文字から、アルファベット様に用ふる四十五個の記號を撰び遂に減じて二十五文字となつた、テロールが其著述にいふ所を見るに「總て是等の殘れる文字は、埃及人が、殆ど數へきれざる程長き間有し居りし、記號の中から、同音語、多音語、連字及び單純の記號の如き不用物を除去して、完全なるアルファベットを作つたもので、ある」と。

(ロ)ハイラチック文字は、ハイログリフィック文字を略した形である、而してハイログリフは専ら紀念碑等の銘文に用ひたので、普通、僧侶が作文に使用したのは、ハイラチック文字であつた、有名なる「死者の書」の如きも、この文字で書かれ、用紙は多く蘆紙を用ひた、此の蘆紙は、ナイル河の濕地に生長せる植地からつくるのであるが、この植物は、今はシ、リー島に生えて居るのみである、當時埃及人は、東洋人が今竹類を使用するが如く、これを種々の用に使つた、即ち其の根を以て燃料を作り、幹の一部を食ひ、他の部分を紙、船、繩、墨等を造るに用ひた、之を紙に製するには、先づ外皮を剥ぎ去り、心を條片に割き、之を並べ、交叉して、護謨の溶液に漬けて、一片の紙が出來る、之を壓して日に乾し、表面を磨すれば、滑かになるのである、此の紙は時々卷物に造られる、長さは時に百呎以上に上るともあるが、幅は六時から十七吋位迄である、「死者の書」の最も美しきものは、幅十五吋位で、長さは八十呎より九十呎に上る者がある、蘆の尖頭を日本の筆の如くし、又は西洋のペンの如くにして、種々の色を以て書く、而して其色は主として、黒及び赤を用ふるが、時としては物の色に習つて、空には青を用ひ、婦人には黄を用ふる等の特例がある。

ハイラチック文字の最も古き標本ともいふべきは、アサ王(Kings Ass)の歴史を書いた蘆紙で、近く見積りても、西紀前三千五百八十年の頃に出來たものと思はれる、其れよりも少しく後の年代で、最も完全な蘆紙書がある、今は巴里の國立圖書館に保存せられてゐるが、もとプリス、ダベンヌ氏

(Prisse d'Avignes) がセーベスから持つて来たもので、西紀前二千七百年から二千五百年迄の間に書かれたものであらう、此の價値ある遺物は今日は寄贈者の名をとつて、プリス蘆紙書と呼ばれて居る、その標題は「プタヘテップの格言」(Precepts of Ptah-Heh)といひ、其内容に到りては、博士ウオリス、バツヂ(Wallis Budge) が「縦令埃及大文明の、他の凡ての紀念碑なかりしとするも、此の一物は以て、今より五千餘年の昔、埃及人の有せる道德思想、及び高尚なる義務の觀念を、表彰して餘りあり」と言つて賞讃せる所である。

(ハ)デモチツク又はエンコーリヤル(Enchoria)文字は、繪畫的文字から出た痕跡もなく、一見すると關係なき様である、元來ハイラチツクと言ふ語は、希臘語のハイラチコス(Hieraticos)即ち僧侶といふ意味の文字から出た、デモチツクといふ語は、希臘語のデモチコス(demotikos)即ち人民といふ文字から出で、エンコーリヤルは、希臘語のエンコーリオス(enchorios)即ち國といふ文字から出で居るので、此の種の文字は一般人民の使用するもので、日常生活の目的に適して居る、その初めは西紀前九百年頃より使用せられ、西紀後四世紀の頃迄用ひられた、彼のダライヤス王の時代及びアケメヤ王朝(Achæmean dynasty)の他の諸王の代に於て、一般重要なる布告及び公文は、皆三個の言語を以て書いた、即バビロン語メデー語、及波斯語で書いたが、之と同じ様に、歴山大王の後を襲いで埃及を領したトレミーの時代から、羅馬の手中に落つる迄は、主なる公文は、皆ハ

イログリフイック文字とデモチツク文字と希臘語で書いた、イログリフイックは神の文字であり、デモチツクは一般手紙に用ふる文字、希臘語は希臘人が用ひたから、便宜の爲めに、三様に書いたものと思はれる。

さて埃及の事を述べるに忘れてはならぬ者は、有名なるロゼッタ石(Rosetta Stone)である、ロゼッタ石は黒い鎔化石板に碑銘を刻んだもので、埃及のイログリフを解釋するには、貴重此上なき關鍵であつて、恰もペヒスタンの岩に刻んだ碑文が、楔形文字を解釋するに、必要なと同様である、このロゼッタ石は、今は大英博物館に保存して在るが、もとこれは、ナイル河口のロゼッタに近い城跡で、佛蘭西の一士官が発見したもので、その爲めにロゼッタ石といふのだ、那翁の埃及に遠征した時、其部下の一士官が、始めて此貴重なる遺物を発見したのは千七百九十九年のとである、其後英國軍がアレキサンドリヤを征服した時、この石碑も亦、英人の手に渡り、埃及考古學に深き趣味を有せるサー、井リヤムハミルトン(Sir William Hamilton)の管理の下に委ねられた、此の碑は完全なるものではないが、碑銘の大意を解釋するには充分である、此の碑はトレミーの治世(西紀前三百〇五年)後、百五十年間の使用に止まり、且つ西紀後第三世紀に到る間の、羅馬諸帝の名を記すに止まるけれども、其の発見せられてから、一世紀の間、之が研究に熱中する様になつたのは、驚くべき次第である、これを研究した學者の中で十九世紀初期に於て、イログリフの秘密を發

かんと勉めた有名な人は、ヤング(Young)及びシャムポリオン(Champion)である、此兩氏は互に相譲うたが、中原の鹿は意外の點に落ちて、ゾエガ(Zoega)氏の獲る所となつた、氏は碑銘中輪廓の中に圍まれ居るは、國王の名なることを發見した、此の他アケルブラッド(Akerblad)はロゼッタ石に載つて居るデモチツク文字のアルファベットを公刊した。

博士トーマスヤングは千七百七十三年を以て、クエーカー宗の兩親の間に生れ、幼い時からして文學、語學及び器械學を修め、三十歳にて學士會院に入つたが、是より二年前、既にローヤルインスチ、ユーション(Royal Institution)に於いて博物學の講坐を擔任した、彼れは親族の遺産を承けて家計を省みるの要なく、専ら物理學及び言語學の研究に身を委ねた、其の結果ニュートンの微分予説、即ち發射説に反對して、音波に類する光の連續性を發見し、又他の一方に於ては、デモチツク文字の一部の解説、即ち埃及の神ラー、ナット、トース、オシリス、イシス及びチフェイスの名と、トレミー及びベレニスの名を發見した、彼は遂に千八百二十九年を以て此世を去つた。

ジェーン、フランソア、シャムポリオンは博士ウオリスバッヂが「埃及に於けるハイログリフの正しき解説をなした不朽の發見者」と云つて賞賛した人で、千七百九十年に生れた、ヤングと同様、彼は幼より語學の研究に身を委ね、十三歳の頃には、ヘブリー、シリヤ、及びカルヂヤ等の智識に精通する様になつた、二十五歳の時に、グレノーブル(Grenoble)の文藝會に於て、上古史の講義を

受け持つたが、丁度埃及學研究の盛んな時で、これに刺撃せられて、蘆紙研究の爲めにチューリン羅馬及びチーブルス等の博物館に遊び、遂に埃及に渡つて、大なる材料を得た、彼は千八百三十二年を以て逝いたが、其の死ぬ前に、埃及のハイログリフは「一部は物の形狀を示し、一部は音響の記號より成る」とを發見したのは、實に大なる功蹟と云はねばならぬ。

ロゼッタ石は、埃及のハイログリフ解釋の基礎であるが、彼のフィレー島(Philae)で發見した小方尖塔<sup>オスリス</sup>も、亦大にこれに便利な者である、此の方尖塔は、希臘語で碑銘を書いてあるが、之はフィレー島のイシス神の僧侶が、トミレー、及びクレオボトラ(Cleostrata)等に宛てた請願を記したものである、またこの碑銘のハイログリフを以て書いてある所には、王の名は輪廓の中にあつて、ロゼッタ石と同じだ、たゞこの方尖塔の方が、研究に便利なのは、トレミー又はクレオボトラなといふ文字が、希臘語とハイログリフと對照して見る事の出来る點である、而して此二様の言語で記した王名が、同じとすれば、當時既に聲音記號が用ひられて居つたことが、明かである、こゝに於いて埃及のアルファベット發見は、單に時の問題に止まるに到つた、(第五十五、五十六、五十七圖)

ロゼッタ石の碑銘は、十四行のハイログリフと、三十二行のデモチツクと、五十四行の希臘語とで記されてある、而して、その内容には西紀前百九十五年埃及王トレミー五世の名譽のために、僧侶等がメムフェイス(Memphis)に會合して、頌徳を布告せるとが趣意となつて居る、即ち其中には王

が金銭穀物を寺院に寄附せるとや、僧侶の租税を免除して、種々の特権を興へたる事や、又王の治世の第八年に、ナイル河が非常に氾濫して、原野に溢れたときに、王が自費を以て、堤を築き、堀

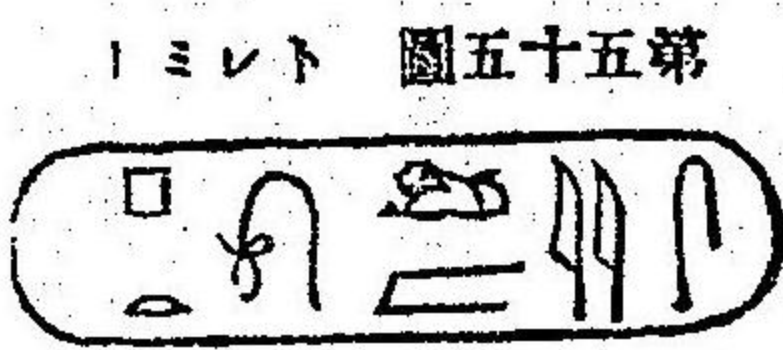
を穿つて、農民を救済した事等が記してある、此の他、王が寺院のために興へたる種々の賜物等をも記し、これ等の徳を頌する爲に、メムフェイスに會合して、布告をなすといふと迄、書いて有る、而して「埃及の救護者トレミー」の稱號を奉つた、又王の肖像をつくり、之に粧飾を施して、日に三拜し、各寺院に金鉞付きの王の木像を安置して、頌徳の意を表し、尙特に十ヶの金塊を用意し、王の誕生日及び即位の記念日には、壯大な儀式を以て祝典を擧げ、毎年トース(Thoth)の祭禮には、月の初め五日間は、王の名譽のために祝ふべきを記し、最後に到り、「此の布告の抄書は、ハイログリフと、デモチックと、希臘語との、三様にて、



レトリーヤアルザイカ 圖七十五第



ラトバオレク 圖六十五第



レトリーヤ 圖五十五第

記し、トレミーの肖像の建てる附近に於て、第一、第二、第三の階級に屬する寺院に保存す」といふことが彫刻してある、博士ウオリスバツヂは「この碑文の原文は希臘語で、これをハイログリフと

デモチックとに翻譯したものである」といつて居る。

これらの碑銘は凡て解釋するに、同一主義により、且つこの解釋の關鍵こそ、實に言語を説明し得る唯一の智識である、是を以てロゼッタ石に付いて得たる智識があれば、他の簡單なる碑文等を解釋するに、決して難くない、其の例を擧ぐれば、カノバスのステル(the Stele of Canopus)と呼ばれて居る碑がある、これも亦ハイログリフと、デモチックと希臘語の三様にて記されて有る、これはロゼッタ石よりも殆ど五十年位前に出來たもので、トレミー三世の朝の第九年に、僧侶が王の名譽の爲に、カノバスに會合して、頌徳したもので、トレミー五世のそれに、能く似て居る、其の中には「王婿ベレニス(Berenice)が、シリヤに遠征せるトレミー三世の、無事の歸宅を喜んで、頭髮を斷つてゼフィリヤム(Zephyrium)のマルシノエ(Arsinoe)の寺院に奉納した、所が、不思議なるかな、其の毛髮は星雲に變化した」といふことが書いてある、彼のコマベネニス(Coma Berenices)といふのは即ち此人の事だ。

## 第六章 埃及文字と他の文字との關係

前章で埃及のハイログリフに關する解釋を試みた、次に來る問題は「今日文明世界に於て使用する文字と、埃及の象形文字とは何か關係があるや、若しあるとせば、其の關係は如何なる風に連續して居るか」といふことである、吾等は今之を研究するに當りて、羅馬の文字から始めて、古代に遡らうと思ふ、即ち拉丁語から希臘語、希臘語からフェニシヤ語と、遡つて研究して見様と思ふ、ヘロドタスが之に就いて記すのに「フェニシヤ人が希臘に來たのは、ゼフイレア人 (Zephyrians) なるカドモス (Cadmos) と同伴して來たのだ、此等のフェニシヤ人が希臘に來て、ペオシヤ (Peonia) に殖民した時、種々の技術を希臘人に擴めたが、特に大切なのは、今迄希臘に無かつた文字を持つて來たとである、この文字は初めは純粹のフェニシヤ文字であつたが、時を経るに従つて、言語と共に文字も變化して來た、是等のフェニシヤ人に、最も接近して住居して居つた希臘人は、アイオニヤ人 (Ionians) で、從てアイオニヤ人は、是等の文字を使用する様になり、之を初はフェニシヤ文字と呼んだ、これはフェニシヤ人の持つて來た爲であらう、尙又たアイオニヤ人は紙を皮と呼んで居つた、是れ當時紙を得ると難く、山羊及び小羊の皮を紙の代はりに常用して居たからである、古も今も、未開の人種は紙を用ふる代りに、皮を用ひて居るものがある」と書いて有る。

プリニーは其著「博物學」に「アルファベットを發見したものは、フェニシヤ人である」といふと書いて居る、その他の昔時の學者も、此の語と同じ様なる事を繰り返して居る、思ふに是等の學者は正直に其信じたると書いたので、毫も責むるの點はないが、併し近世の學者が指摘する様な確かな證據は、一も有つて居らない、然らば近世學者の證據とは何であるか、曰く、希臘文字とセマイト人の文字とは、假令形狀は異なる所が有つても、其數に於て、其名に於て、(齒頭音 S 及び Z は別として) 及び順序に於て、明白なる一致がある、若し假りに一步を譲り、此の他には何の證據がないと見ても、アルファベットといふ言語が、充分なる證據をなして居る、アルファベットは希臘文字の首頭の二字アルファ (alpha) と बीター (beta) とを連結した言語であつて、またこれと同時にセマイト人の文字の首文字なる、アレフ (aleph) とベス (beth) との二字を聯結して居る、何と不思議な關係ではあるまいか、尤も前に説いた如く、希臘文字の方が新らしい、従つて各文字は全く無意味であるが、其先祖のセミチック語には意味が付いて居る、例へばアレフは牡牛をいひ、ベスは家をいふのである、次の表は希臘語とセミチック語との、名と順序を示すものである、尤も後者はヘブリー語の中で、最も多く使用せられて居る文字を、セミチック語のアルファベットとして撰擇せるものである。

右の譯けで、今の歐羅巴の文字は、ヘブリー語から來たものであることが明かである、然らば、

此のヘブリー語は、フェニシヤ人の創造せるものであるか、或はまた他より傳來して來たものであるかを研究せ

ねばならぬ、既に述べた通り、凡べて聲音記號は、初め繪畫様の記號から發達して來たもので

も亦この軌を脱せずとせば

必ずや其の祖先たる言語記

號がなければならぬ、傳説によれば、「元來フェニシヤ人は創作の才を有して居らぬ、文字に於ても

ヘブリー語		希臘語	
名稱	意味	名稱	名稱
א Aleph	牛家駱駝	A α	Alpha
ב Beth	戸窓	B β	Beta
ג Gimel	鉤	Γ γ	Gamma
ד Daleth	手	Δ δ	Delta
ה He	手	E ε	Epsilon
ו Vau	武器	(Vau—使用せず)	
ז Zayin	垣	Z ζ	Zeta
ח Cheth	蛇	H η	Eta
ט Teth	手	Θ θ	Theta
י Yod	手掌	I ι	Iota
כ Kaph	牛鞭	K κ	Kappa
ל Lamed	水	Λ λ	Lambda
מ Mem	魚	M μ	Mu
נ Nun	柱	N ν	Nu
ס Samekh	目	Ξ ξ	Xi
ע 'Ayin	口	O ο	Omicron
פ Pe	投槍?	Π π	Pi
צ Tsade	結	(San—亡失す)	
ק Ooph	頭	(Koppa—使用せず)	
ר Resh	齒	P ρ	Rho
ש Shin	點	Σ σ s	Sigma
ת Tau		T τ	Tau
		Υ υ	Upsilon
		Φ φ	Phi
		Χ χ ψ	Chi
		Ω ω	Psi
			Omega

後世に至りて生ず

號がなければならぬ、傳説によれば、「元來フェニシヤ人は創作の才を有して居らぬ、文字に於ても

亦然りて、埃及から傳來輸入せるものだ」と、ヘロドタスはいつて居る、ユーセビウス (Eusebius)

も亦これと同様のことをいひ、他の信すべき傳説に於ても、之をいつて居る、またフェニシヤ人が、

埃及人と長く交通して居つたといふ事實から見ても、このことは充分な證據とするに足る、もと

このフェニシヤ人は、人の能く知る如く、セミチツク種族に屬して、昔時はエリスリヤ海 (Erythraean

Sea) の地方、即、今の紅海から波斯灣地方に到る間に住して居つた、而して漸次シリヤ地方に移住

して埃及に接し、其の地をパレスタイン (Palestine) と呼ばれた、併し彼等は其の最初何處より出

でたものか、パレスタインに來たのが、抑も第一の移住であるか、否か、これらは毫も知れない、

耶蘇聖書の中には、「ソロモン (Solomon) が、彼の有名なる殿塔を造るときに、援助を與へたといふ

タイル (Tyre) 王ラヒム (Hiram) であるとか、又はシドン (Sidon) の諸王等の名が澤山に書いてある

が、併し惜しいかなフェニシヤ人の名は一も書いてない、皆カナ、イト (Cananite) なる總稱で以つ

て書いて有る、故に此の點に就ては参考することが出来ない、惟ふに教授ハックスレーが、例の無類

の説明法を以て、フェニシヤ人を Colossal pedlars 即ち「大行商」といふたのは、誠に適當なる形容

である、吾等が古代史を繙いて、始めてシリヤ海岸一帯の地に住する彼等を見たときには、其處は

實に東西間通商の媒介地であつて、其の船舶は遠く西方に航して、ヘルキエレス (Heracles) の連山

即ち今のジブラルタルの海峡を超えて、貿易を營み、其の殖民地は地中海エーキジアン海及び小亞



細亞地方に散布して居つた、然しながら前にもいつた如く、此フェニシヤ人は、羅馬人と同じで、創作の才能を有たない、唯製造と通商が上手で、自國及び隣國の物産を、運搬賣買し、古代の多くの都市に大市場を開設した、メムフィスの大市場の如き、其一例である、メムフィスに於ては、ヘファイストス(Hephaistos)神殿の北面に於て、タイルのフェニシヤ人が居住したから、此邊一帯の地を指して、タイリヤン(Tyrians)街と呼んだ。

斯くの如く活潑な商業を營み、一時千金といふ程、繁忙なる人民は、自然の傾向から、事務を迅速に且つ明亮に記載する方法を渴望するのは勿論のとである、即ち複雑なる文字を略して、單純明亮なる文字を用ひんと欲する、是實に當時のフェニシヤ人の状態である、果して然らば、フェニシヤ人は、斯くて如何なる記號を發見したか、これに就いて佛蘭西の埃及學者エマヌエル、ド、ルーゼ(Emmanuel de Rouge)は、千八百五十九年碑銘學會に於いて、アルファベットの歴史に付きて其研究を朗讀した、此の研究は前に述べた如く、一部は幾多の傳説より、一部は埃及とフェニシヤの關係より成り、アルファベット發達の原則を適用して得た結果で、其の結論は、今日歐羅巴で使用して居る言語の起原は、埃及にあるので、そのもとはフェニシヤ人から傳來したものであるといふのだ、思ふにルーゼ氏がその研究に成功した譯けは、從來の學者と違つて、セミチック文字の直接の原形は、埃及の紀念碑等に記された象形畫では無くて、象形文字から發達轉化して俗用せられた

る文字であるといふとを、明確に知覺したからである、即ち氏は、セミチック文字中最も古い形をどり、之をハイラチック文字の最も古い形の中で、所謂埃及のアルファベットと稱する廿五文字と比較對照したのである、氏の得た材料は頗る稀なるものであつた、埃及の方では新帝國時代(約西紀前千五百八十七年後)に出來たハイラチック文字の蘆紙は、少からず存して居るが、是等は比較的新しいものであつて、用をなさない、然るに幸にもハイラチック文字を記した最も古いものがあつた、是れは即ち、前に述べたプリス蘆紙書である、氏は之を以て埃及文字を代表させ、他の一方のセミチック文字は舊約全書の中に、埃及の言語をセミチック文字で記したものがあつた、而して、また、埃及の新帝國の凱旋史中に、シリヤの都府をセミチックの名にて記したものがあつた、即ち是等を對照して見ると、セミチック文字とハイラチック文字とは同一に歸着するのである、此他主な起原となるものは、サイドン王エシムナザル(Eshmunazar)の石棺に刻んだ銘である、これは紀元前第五世紀頃出來たもので、彼のプリス蘆紙書より殆ど二千年も後に書かれ、従つてフェニシヤのアルファベットの新しい形の起原をなすものである。(第五十八圖及び第五十九圖)

此の石棺は今日巴里のルーブルに保存せられて居るが、もとサイドンの古跡で墓石の中から發見したものである、此の碑銘の解釋も亦一世の學者皆之を勉め、之が爲めに澤山の文學を興起させた、エシムナザルは自己の假面及び木乃伊の存在するこの石棺に、一人稱で碑銘を書いて居る、即ち自

I 埃及のハイロケリフイック文字にして左に面す。

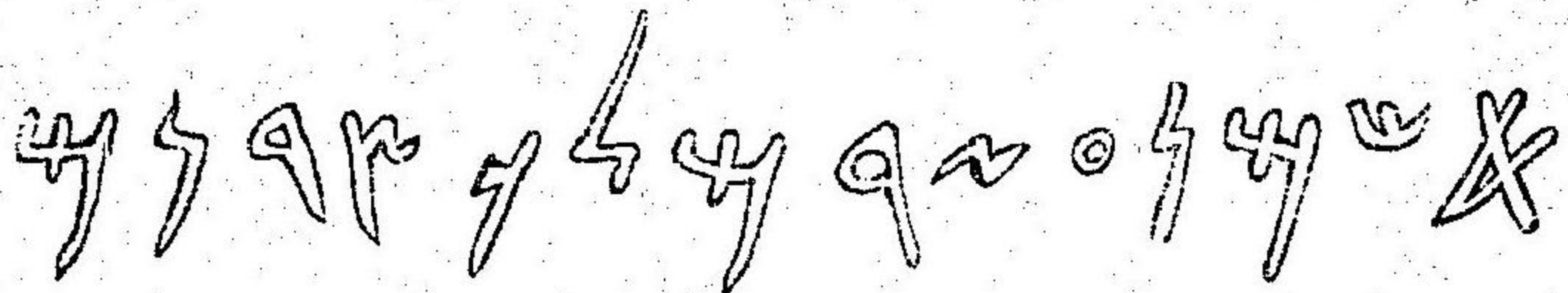
ラテン	希臘	埃及	ラテン	希臘	埃及
α	Α	Ⲁ	α	Α	Ⲁ
β	Β	Ⲃ	β	Β	Ⲃ
γ	Γ	Ⲅ	γ	Γ	Ⲅ
δ	Δ	Ⲇ	δ	Δ	Ⲇ
ε	Ε	Ⲉ	ε	Ε	Ⲉ
ζ	Ζ	Ⲋ	ζ	Ζ	Ⲋ
η	Η	Ⲍ	η	Η	Ⲍ
θ	Θ	Ⲏ	θ	Θ	Ⲏ
ι	Ι	Ⲑ	ι	Ι	Ⲑ
κ	Κ	Ⲓ	κ	Κ	Ⲓ
λ	Λ	Ⲕ	λ	Λ	Ⲕ
μ	Μ	Ⲗ	μ	Μ	Ⲗ
ν	Ν	Ⲙ	ν	Ν	Ⲙ
ξ	Ξ	Ⲛ	ξ	Ξ	Ⲛ
ο	Ο	Ⲝ	ο	Ο	Ⲝ
π	Π	Ⲟ	π	Π	Ⲟ
ρ	Ρ	Ⲡ	ρ	Ρ	Ⲡ
σ	Σ	Ⲣ	σ	Σ	Ⲣ
τ	Τ	Ⲥ	τ	Τ	Ⲥ
υ	Υ	ⲧ	υ	Υ	ⲧ
φ	Φ	ⲉ	φ	Φ	ⲉ
χ	Χ	ⲇ	χ	Χ	ⲇ
ψ	Ψ	ⲏ	ψ	Ψ	ⲏ
ω	Ω	ⲑ	ω	Ω	ⲑ

引用に於て成功したものは未だないのだ、カノン、テールは、其著「アルファベットの歴史」中にルーゼ氏の説を抄録して居るが、あまり細かくて相當の素養ある言語學者でなくては了解が出来ない所がある、吾等も亦、次ぎに少しく解説を試みやうと思ふ尤も、千八百五十九年以來發見せられた古代の碑銘があるから、ルーゼ氏の表に一二の新例を加ふることが出来る、アルファベット起元に關するド、ルーゼ氏の説

寫模の紙磁スリップ 圖八十五第



銘の寶石エレザナムシニ 圖九十五第



萃)

右はド、ルーゼ氏がその比較研究に採つた材料の概略で、其巧妙なことは、これよりも能く分類して、我れをば苦しむる勿れ」。(沙翁の過去の記録中より抜

ら「タブニットの子にしてシドニヤ人の王」と稱し、彼及び、アシタロスの尼なる彼の母が、如何にしてパールサイドン、アシタロス及びエムンに、寺院を建築せるかを書いた、而してまた彼は神の恵を求め、ドラ、シヨツバ及びシヤロンの肥沃なる穀産地が、永久に其の王領たらんことを祈つた、この石棺の銘は、シエクスビヤの碑銘記の文意とよく似て、彼れの墓を發く所のものは、必ずや天爵を被るべきをいつて居る、即ち「我が時は逝けり、我が日は一日も残らずなりぬ、而して我れは今自ら造れる此の墳墓の中に、此の石棺の中に横はれり、噫々、記憶せよ、宮人も町人も、將た誰れなりとも、この埋葬場を發くこと勿れ、寶物を入れたることなければ、決して搜しものをするなかれ、あるはまた此の葬床を他の墳墓に移して、我れをば苦しむる勿れ」。(沙翁の過去の記録中より抜

II 埃及のハイラチック文字にして右に面す。

III 最古のフェニシヤ文字にして、多くは、ヌールレノン (Baal Lebanon) の碑銘より得たるものなり。

IV 最古の希臘文字にして、テラ (Thera) 及びアセネスに於ける碑銘より得たるものなり、右より左に讀む。

V ヘルシヤ戦争當時、碑銘に用ひたる希臘のアルファベットなり、左より右に讀む。

VI 希臘語の大字、コテックスマフレキサンドリナヌ (Codex Alexandrinus) より得たるものにて、紀元後四百年頃のものなり。

VII 希臘語の小字。

VIII 伊太利古代のアルファベット。

IX シネロ (Cicero) の時、碑銘に用ひたる拉丁語のアルファベット。

X 拉丁語の大字及び小字。

XI 近世ヘブリーの角文字、III に記せるフェニシヤ文字より傳來せるものなり。

我が輩は今ド、ルーゼ氏の方法を説明するに當り、例として **β** と **ϐ** の二字を採る。

**β**、埃及人は **β** の字を表すに、二様の記號を用ひた、一は脛の形 **β** で表はし、最も普通なるものである、他の一は鶴を以て表はすので、フェニシヤ文字の原形として、**β**、ルーゼ氏がどつたものである、其の理由とする所は、脛の記號は **β** よりも **β** に近く、且つ鶴は多くのセミチックの名に翻譯するのに、**β** (beta) と同じに使用して居ると言ふにある、尙また脛のハイラチック記號

は、他の文字即ち雜だとか、腕だとかと混同し易いため、採用するに不便なのであらう、元來セミチック文字の **β** は、その原形なるハイラチック文字の **β** とは、輪を結んで居る點に於て異なつて居る、書くのに便利なので、輪を結んだものと見える、が併し最初セミチック文字では、輪を結ばなかつたといふ間接の證據がある、それはコリンス (Corinth) で用ひた希臘文字である、コリンスはフェニシヤ人が希臘に開いた殖民地の中で、最も古いもの、一である、従つて其の使用した文字も彼の後に説明する所のモアバイト石 (Moabite stone) に記せるものよりも、一層古いセミチックのアルファベットから傳來したものであつた、所でこの古いコリンス人のアルファベットに於ては、ベター (Beta) なる文字の輪は塞がれて居らぬ、即ち **β** の如く開いて居つて、殆どハイラチックの原形に一致して居るのである。

**β** (eta) なる文字は曲路にも、亦、結目ある綱にも似て居る、が併しハイラチック文字の形を見ると、前者が原形でなければならぬ、即ち窓なる意味を有するセミチック文字は、能く此の前者のハイラチック文字に一致して居る、これもベターと同じ様に、コリンスの古い碑銘から確證を得ることが出来る、コリンスの最古のアルファベットを見ると、通常の形のエプシロン (Epsilon) なる字の代りに、輪の結んだ **β** なる文字を用ひて有る、即ちプリス蘆紙書に最も普通な曲路の形と殆ど一致して居る。

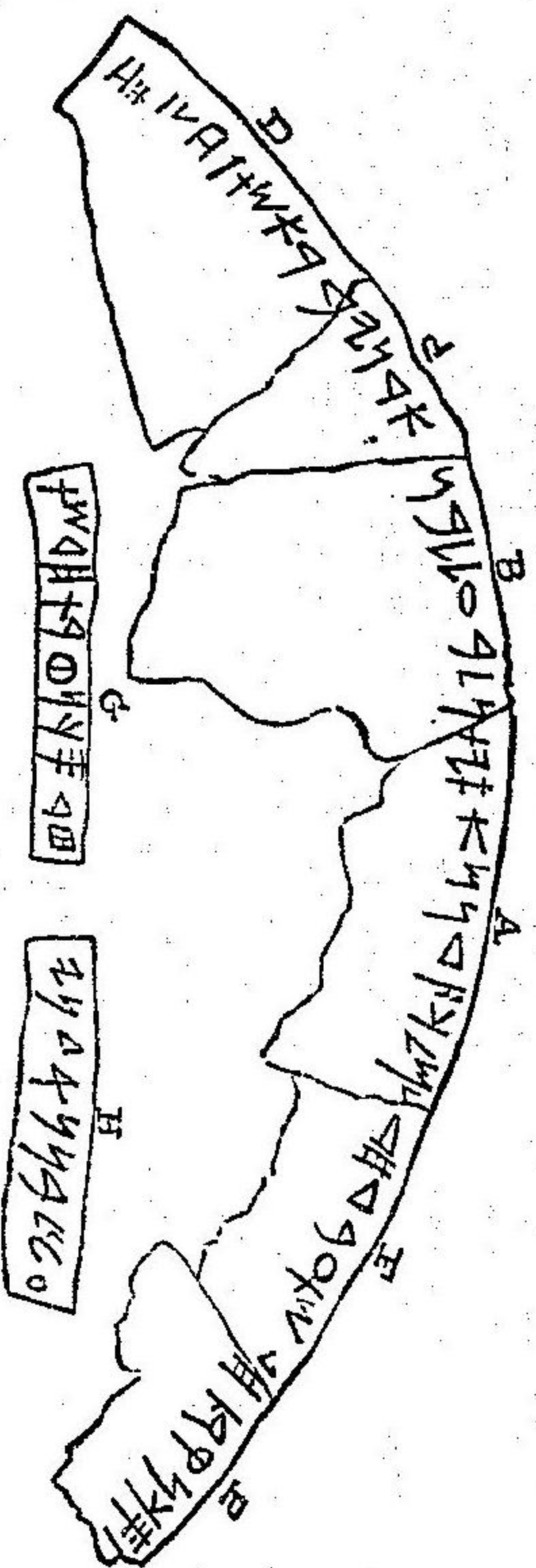
エシムナザルの石棺の銘よりも尙重要なセミチック文字の碑銘が四個ある、第一はバールレバノン (Baal Lebanon) の寺院から得た青銅器の一片に記した刻銘で、これは紀元前第十一世紀のものである、第二は鎔化石版にモアブ (Moab) の王メツシヤ (Mesha) の碑銘を記したもので紀元前第九世紀の頃に出来たものらしい、前に述べたモアバイト石と云ふはこれである、第三はニキベから得た獅子重錘であるが、西紀前第八世紀後半のアッシリヤの諸王の名が刻んである、第四はケドロン (Kedron) のギンギン (Virgin) 池からタイロンオン (Tyropneon) のシロアム (Silam) の池に通ずる水道中の、一扁板に記した碑銘である、これは紀元前第八世紀から第六世紀の間に来たものであらう。

(一)バールレバノン器、之は千八百七十六年に、クレルモントガノー (Clermont-Ganneau) 氏がサイブラスの一商人から購つた青銅板の數片であつて、フェニシヤ文字が記してある、(第六十圖を見よ) これはもと、農夫が耕作中に掘出したもので、黄金であるかと思つて、小片にしたのだといふ、クレルモントガノー氏は、之を買つてから、レナン (Renan) 氏と共に、農夫の小片に破つたのを、もとの通りに連結して見た、「この青銅器は、サイドン王ヒラムの臣下、カーセージの一市民がバールレバノン神に献上せるものなり」と書いてある。

(二)モアバイト石、これはセミチックの遺物の中、最も有名で且つ最も重要なものである、初

め獨逸の宣教師クライン (Klein) 博士が、千八百六十八年にモアブに旅行したとき、発見したもので、博士は其の數語を寫し、歸途にゼルサレムで之を公にした所が、獨逸領事と佛蘭西領事とは互に、この寶物を購入せんとして競争を惹起した、之が爲め遂に亞刺比亞人の疑惑を生ずるに到つた、蓋し、此の石は亞刺比亞人が、五穀豊稔の護符として尊敬したもので、彼等は之を頗る大切なるも

銘のバールレバノン器 圖十六第

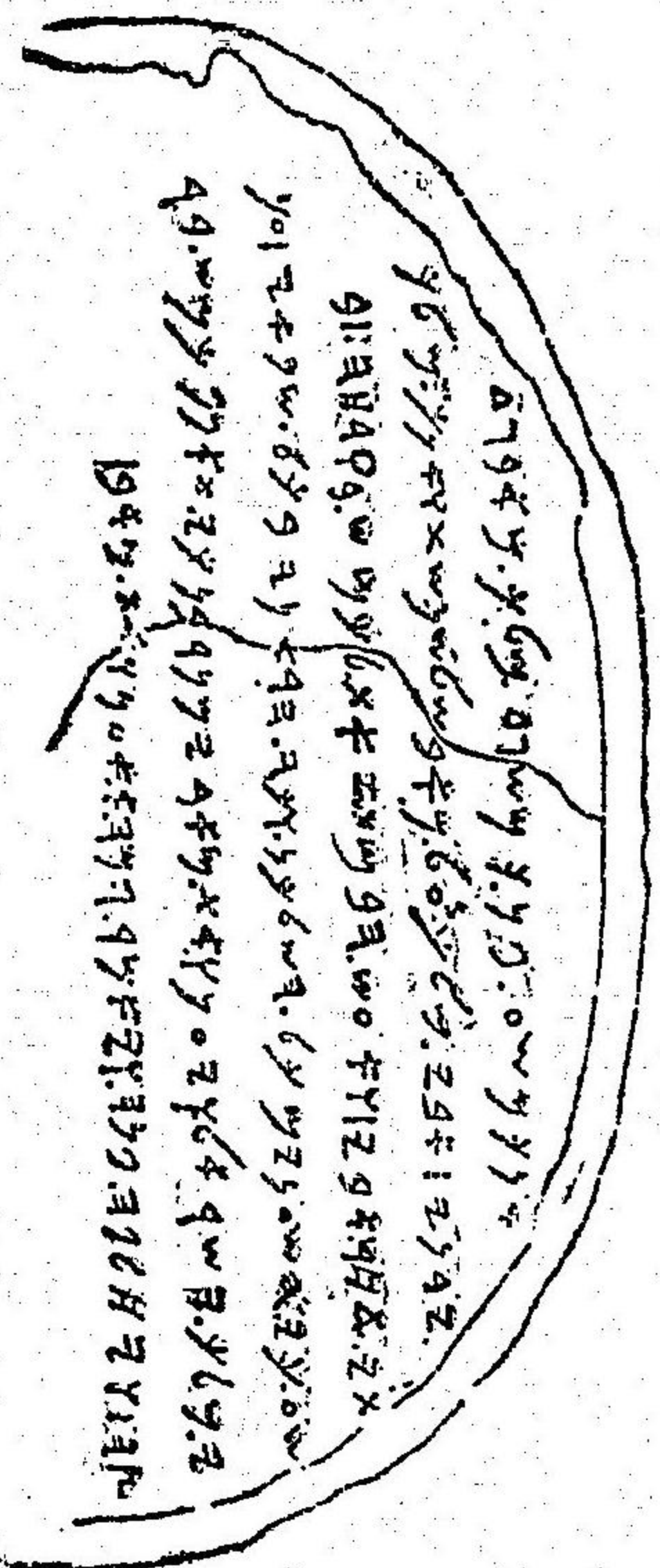


のと考へて居たので、クレルモントガノー氏がこの碑銘の寫刷を得んとして、委員を送つたが、これをすら尙非常に惡業として亞刺比亞人に拒まれた、ナブラス (Nabius) の土耳其知事が、

之を賣つて私利を營まうとしたが、亞刺比亞人はこれを拒んで、遂に此の石を火に焼いて、冷水を注ぎ、小片にくだいて、護符として種族中に分配した、然し、クレルモントガノー氏が盡力の結果再びその小片を集むるを得て、數行を除くの外、碑銘は完全になつたのである、この原物は、今はルーブルに保存してあるが、英國の博物館にある模型も、亦實に好く出来て居る。

此の銘に書いてある事は、メッシヤが、イスラエルの王に謀反せるとであつて、ヘブリーの舊約全書と同じ様な言語で書いてある、歴史上から見ても、頗る価値のある記念物といつて宜しい、メッシヤは自らこれに記して、ケモシメルク (Chemosimelek) の子なりと稱して居るが、このケモシメルクはモアブ小王國の國神であつて、恰もヤウエ又はエホバ (Yahweh or Jehovah) がイスラエル

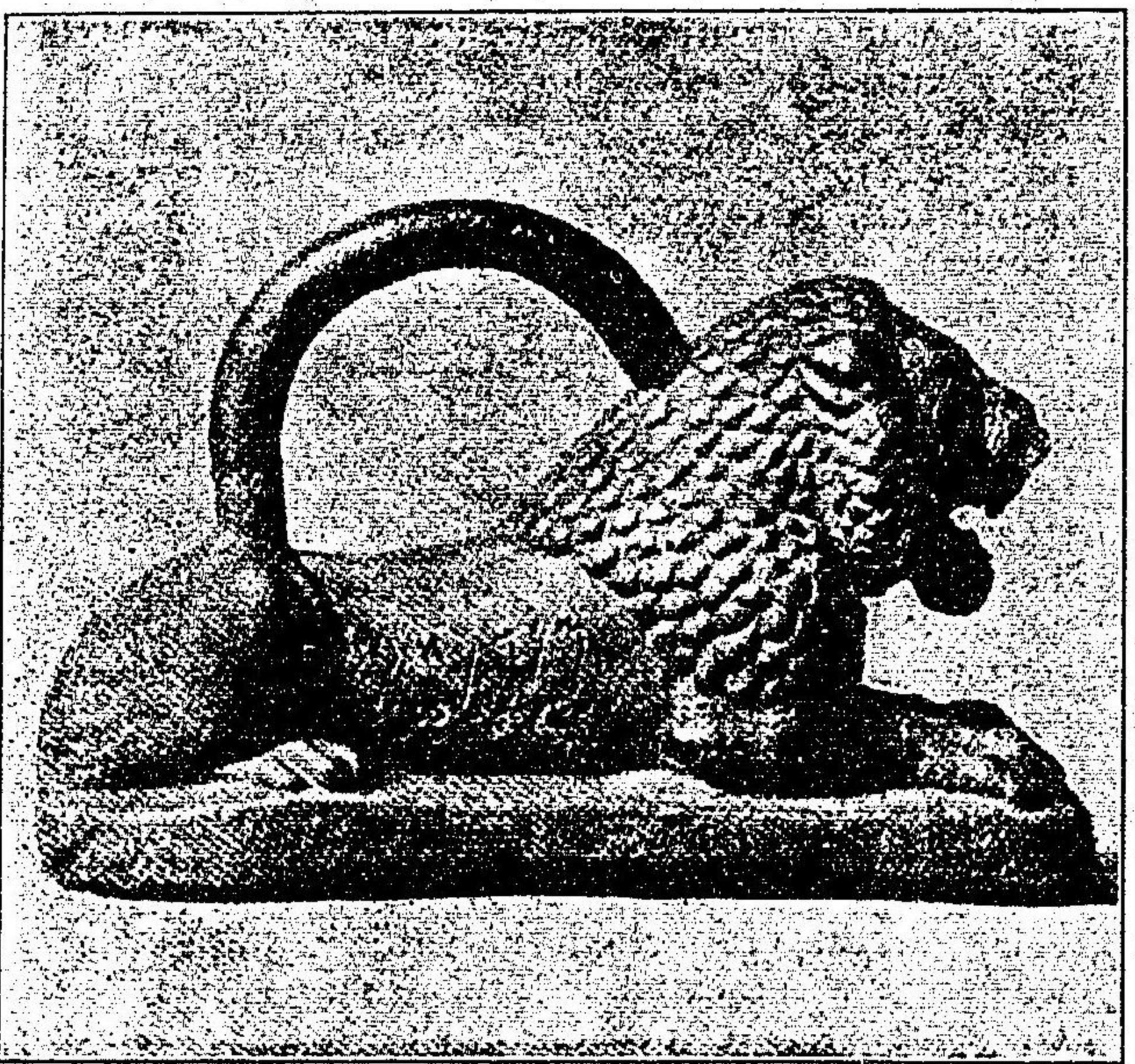
右マシヤの圖一十六第



人に於けるが如き關係を有して居る、即ち各セミチック人の間に、同様なる信仰を有して居つたといふ、餘談は別として、兎に角此の銘が、ルーゼ氏の説を補助する適例であるといふとはカノンテロール及び其他の學者

の説が一致して居る。(第六十一圖)  
(三)獅子重錘、これは秤量の重錘で、サー、オーメナム、レヤムド (Sir Austin Layard) 氏がエチオピアの第一發掘の時に數個を發見したのである、これには兩國の語が記してある、其の一は楔形文字でアッシリヤ諸王の名を記し、他の一はフェニシヤ文字を以て量目を記したものである、蓋し是

れフェニシヤ及びアッシリヤの通商關係の親密なるを示し、貿易に従事せるフェニシヤ人が、アッ



圖二十六第 獅子秤量

シリヤにて使用せる度量衡の標準を採用し、之をフェニシヤ文字にて記すに至つた事を示して居る、長く使用した爲か、この銘は大に磨滅して居る、其の中でアッシリヤ諸王の名が出て居る、即ちチグラスベセル (Tiglath-peser) シヤルマナセール四世 (Shalmaneser IV.) サルマン二世 (Sargon II.) 及びセナケリム (Sennacherib) の名がある、またこの碑銘中にはフェニシヤ文字とアッシリヤ文字との類似せるものがあるが、それは量目の文字で、第十一獅子型に記してある、此の獅子型は、重量二十オンス強を有し、一マチ

(maneh) を表はし、金銀を秤るに用ひ、一マチの金は百シニケル (Shekels) に値し、銀の一マチは

六十シエツケルを値すると信じて居つた、此のマチなる語の語原は明確には了解し難いが、教授セイス(Sayce)のいふ所によれば、西紀前七世紀の頃の王シヤルマチセル(Shalmaneser)の名に出でたとす。(第六十二圖)

(四)シロアム銘、此の銘を記した水道は、ゼルサレムが包圍されたときに、水が欠乏して、城外のギルジンの池より、城内のシロアムの池に水を流入するために、造つた物であるとは疑ない、千八百八十年に、始めて之を發見したときは、炭酸石灰が澤山附着して、解釋するに頗る困難であつたが、ヘブリー文字の研究に重要なものであるとは明かであつたから、其後種々の方法を施して、やゝ解釋するとを得る様になつた、其字は能くモアバイト石の字に似て居る、今其の意味を譯して示さう、尤も是れは、教授セイス氏が、英語に譯したもので、多少想像に出でた所がある。

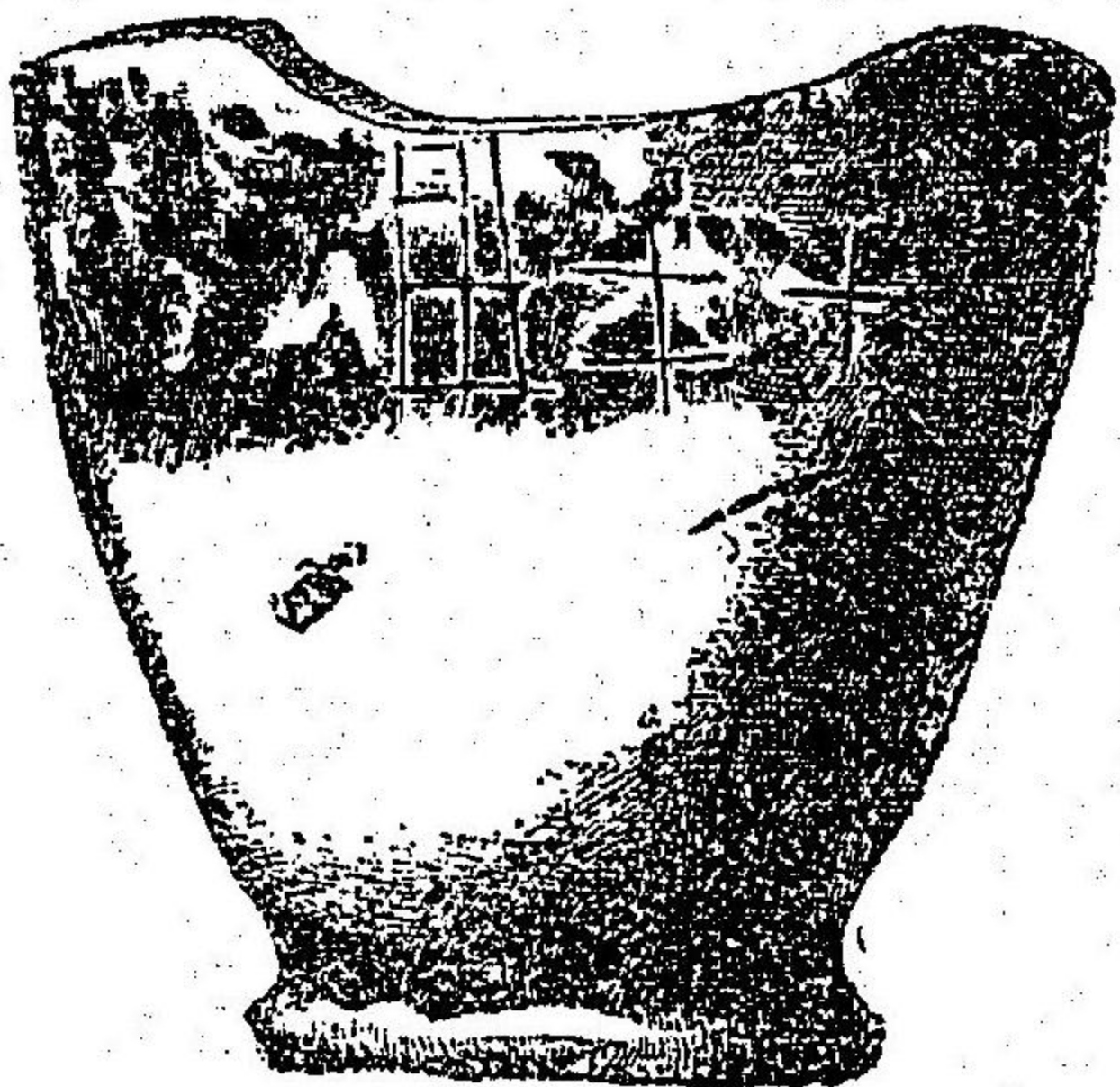
- (一)開鑿(を見よ)、こは水道の歴史なり、今や開鑿者ぞ
- (二)その鋤を以て隣人(五)に廻りつゝありし時に、而して尙堀(おほく)三キニヒット(Chulils)の残れるに………然ら難
- (三)隣人を呼べるものあり、そは右手に當りて岩の(凸出せるもの)ありければなり、彼等は立上り………彼等は穴の西を突けり
- (四)開鑿者は互に鋤を振つて突き進めり、而して遂に
- (五)水は千キニヒットの遠距離にある池より、茲に迄流れ來れり、
- (六)而して岩の高きは一キニヒット(の三分の二)に上れり、

右の譯文中、括弧の内は多少想像で解釋したもので、もとより確實なものでは無いのだ。

此の銘は、若しこれを單に、古代の開鑿術は、如何なるものであつたかを示すものとしても、なかゝ興味のあるものである、これによりて見るに、人の一群は一方の端から開鑿を始め、他の一群

は他の端から始め、遂に中央に於て結び付けるといふ計畫である、所が兩方唯宜い加減に掘て行つたので、甘く合しないといふ滑稽を演じたのである、今日の進歩せる科學によりてこそ、一哩も其餘も、兩端から穿つて、甘く合するが、當時のフェニシヤ人がこれを遂行したのは、なかゝ甘く出來たものである、これは餘談に渡つたが、元來サマリヤ人(Samaritan)のアルファベットは古代のフェニシヤ人から傳來した唯一の言語であつて、本源たるフェニシヤ語自身は絶滅してしまつた、それが斯く近代になつて、種

瓶るめ刻を字文 圖三十六第



々の碑銘が發見せられ、再び世に出で、文字研究の好例を供するに至つたといふ次第である。アルファベットの起原及び其の發達に關するド、ルーゼ氏の説は、其後大に論議さるゝ所となつた、元來この説は假定説で、その假定は事實の選擇を許して居る、即ち記號文字の酷似して居るも

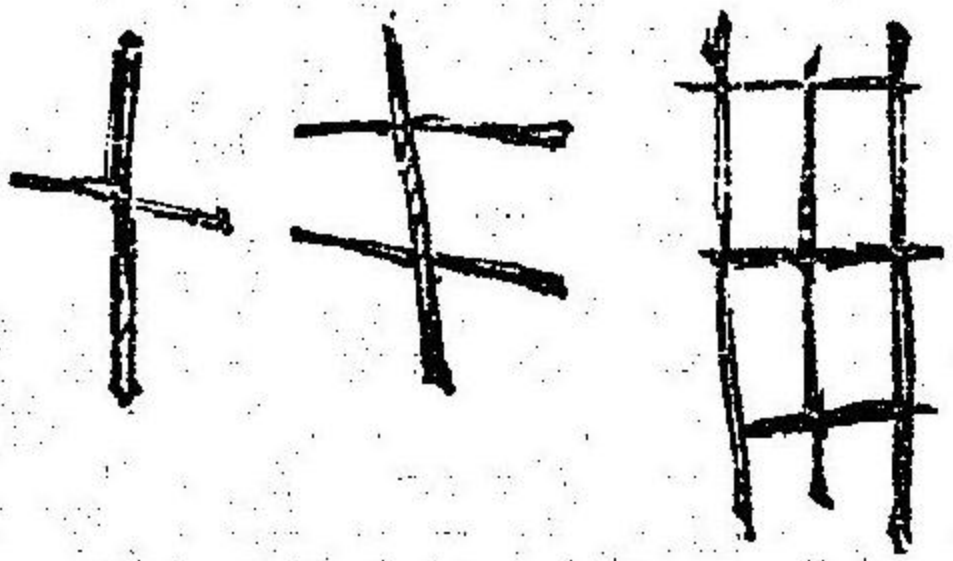
百  
のを證據として論じ、フェニシヤ文字は他の人種の文字から傳來せるものである、何故なれば澤山の例が之を證明して居るではないかといふ風な説だ、之に關して注意すべきことがある、即ちレジナルドプール (Reginald Poole) 氏は大英百科全書の象形文字の部門に、「元來ハイラチック文字は、他の凡ての古代の文字の如くに、人々各其の手の異なるに従つて、其形も相違せざるを得ない、之を以て學者若し、フェニシヤ文字とハイラチック文字との關係を説かんとするときは、自分の都合の宜い形の字を撰擇するの弊を免れない」と書いて居るが、誠に恰當の議論である、嘗にそのみならず、比較にとつた材料の間に存する時代の差異をも注意せねばならぬ、かのプリス蘆紙書の如きは、エシムナザルの銘に比較すれば、少くとも二千年程古いといふことを注意するの必要があらう、又他に、或セミチック文字は、其の固有の音聲を有して、埃及文字から採つたものでないものがあるといふ議論がある、が併し之に對して、これは文字を埃及から借りて、假令これと同音でなくとも、多少似寄れる音聲を表はさしめて居ると、辯解する事が出来る、又彼のセミチック文字の名と象形文字 (ハイログリフ) の名とは異なつて居るといふ議論がある、また何故フェニシヤ人はハイラチック文字の代りに、象形文字を借りなかつたのであらうといふ疑問が起る、アーサーエバン氏は、これに就て、或る場合には、象形文字から採用したものがあつたと書いて居る、即ちフェニシヤのアルファベットの或るものは、埃及の繪畫記號から出て居る、例せばアルファ (alpha) 即ちフェニシ

ヤ文字の牡牛を示すアレフ (alef) といふ文字は、牡牛の頭形をなせる象形文字より出で、ゼター (Zeta) 即ちフェニシヤ文字の武器を意味するゼーン (Zayin) は、兩刃の斧形の象形文字に出で、此の他シグマー (Sigma) は木の象形から、オミクロン (Omitron) は目の象形から、エプシロン (Epsilon) は窓の象形から出て居るのだといふ、然しながらカノンテロールの論は、これらと異なりて、セミチックのアルファベットは、もと下部埃及に、奴隸、商人、兵士、其他種々のものとなりて殖民せるフェニシヤ人から、起原せるものだといふので、要するに、ド、ルーゼ氏の説を是認するのだ、従つて、埃及人の宗教及言語等と接近して居つたフェニシヤ人の中には、記念碑等に用ひた象形文字は採用せられずして、一般俗用の簡單なるハイラチック文字が採用せられた所以である、而してこの想像が確實なる證據は、セミチック人が埃及を支配して居た時代、即ち牧王 (Hyksos) 時代といふ彼の三王朝中に出來た記念碑は、皆ハイラチック文字で書いてあつて、ハイログリフを以て記したものは一もないといふのだ。

カノンテロール氏は強ち理由なく、一反對説を採用しないのではない、之を以てセミチック文字とハイラチック文字との間に、適當なる類似が無いといふとが、果して眞實であつたならば、ド、ルーゼ氏の説は全然地に落つることを認めて居る、カノンテロール氏は、實にド、ルーゼ氏の説の擁護者としてとより熱心無比であるけれども、亦これと同時に、二國語間の關係に就ては、頗る慎重

なる態度を以て観察して居る、採用者が材料を他より得たるときは、必ずや、之を適當なる形に變化して用ひんとするは、自然の傾向である、而して殊に文字が他種の材料に書かれたるときに於て然り、といふとを得る、埃及文字がフェニシヤに採用せられたときにも、亦此影響を充分にうけた、前にもいつた如く、古代のハイラチック文字は柔軟なる蘆筆を以て蘆紙に書いたものであるが、セ

第六十四圖 プツコに刻る文字



ミチック文字に到りては、之と異りて鑿を以て石に彫刻したので、曲線等は如何にも少くなつて居る、ハイラチック文字とモアバイト石の文字とを比較するときには、一見直にセミチック文字は非常に簡単に節約してあるといふとがわかる、即ち一層規則的で、一様で、確固として真直で、不調和複雑なる點は皆取り去られて居る、カノンテール氏がアルファベットの歴史を著述して以來、ド、ルーゼ氏の説に反對するものが多く出でた、其主なるもの、二三は既に述べたが、カノンテール氏は、その著述の再版に當りて、何もこれ等の非難に對して、附加辨解する所がない、依然ド、ルーゼ氏の説は「常に演繹法上實らしき結論にして、傳説も亦之を證し、且つ數多の事實がその正常なることを指示するのみならず、實にこれに對して未だ答辯に苦しむが如き大非難を加へた者もない、蓋しこれド、ルーゼ氏のアルベット起原説を否認せんと欲するも、これに抵抗するに足る理由を、見出し得ないが爲めで

あらず、今日幾分か注意するに足るアルファベット起原説が、ド、ルーゼ氏の説の他三個ある、一はフェニシヤ人自ら創造せるものであるといひ、二はヒツタイト人 (Hittites) の象形文字より傳來せるものなりとし、三は楔形文字の一種に起原せるものとしてある」といつて居る、即ち充分なる辨解、否な少しも辨解をして居らない、思ふに、未だ解釋し得ざる彼のヒツタイト象形文字が、他の文字と如何なる關係があるか、今日に於いては不明である、而して又デイーク (Deike) の説の如く、フェニシヤ文字は楔形文字より傳來した者であると言ふのも、一面の眞理を含んで居つて、強ち否認するを得ない、何となれば彼の楔形文字は、特にセミチック人の創めた文字であつて、同種族に屬するフェニシヤ人が、これ等の楔形文字を有する人民と接近して、既に未だ埃及のハイラチック文字を知らぬ前に、楔形文字を採用したといふことを假定し得るからである、然れども、吾等はこれに更に一步を進めて考へて見るに、ド、ルーゼ氏の説に賛成する者も、將た反對するものも、共に希臘語とフェニシヤ語との直接の關係を肯定して論議をなし、其の根本たる肯定が果して眞理なるや否やに就ては、毫も研究して居らない、近來の發見は實に此の問題に、新らしき且つ重要な光明を與へた、依つて我輩は此の關係を明白にせんが爲めに、次章に於て少しく論じやうと思ふ。



## 第七章 クリト文字及び其の同類文字

百四

希臘羅馬の盛になる數世紀前、文明の潮流は地中海の東方から西方に向つて流れ出した、而して史家は其の文明の起原を尋ねるに當りて、必ず指をナイル及びユーフラチスの流域に向つて屈する、これは埃及及びカルヂヤは人類の智的及び精神的根原であるからである、これを以て、その研究は早くから頗る盛に行はれ、二國の過去に就ては價值ある事跡が澤山發見せられた、而してバビロンの場合に於ては、實に今より八千年の昔に於て文字があつて、繪畫文字の時代であつたことが分つた、これは彼の埃及の第一王朝の建設者メネスの治世より千三百年の昔である、従つて埃及の象形文字よりも數等古きと知り得る、世人がバビロン文字を以て世界に於ける文字の嚆矢といふのは決して誣言ではない、而してまた幸にしてこの二國の文明は、今日迄連綿として續いて來たが、人類の進歩に貢獻せる點よりいふときは、軍扇は寧ろバビロンの方に上る、且つ吾等は埃及の文明は、或る點に於て頗る高き所があつたが、惜しむべし他の文明の母となりそこねたことを認知して居る、近代の學者は、「宗教に於てもまた風俗に於ても、希臘は埃及の恩澤をうけない、即ちそは恰もヘブリー人の宗教に於けるが如く、將た又フェニシヤ人の貿易に於けるが如きものである」と言つて居る、然り而して、埃及はイスラエルを束縛しなかつたが、却て基督國の爲に奴隷とされてしまつた、

即ち自由なる精神に出でたる信仰を、三位一体等の教義を以て束縛を加へたのである、元來、三位一体の説の如きは、埃及の三神一体の神説に基いたものであるといふので、羅馬のセント、ピートル寺院の前に立てる方尖塔は、耶穌教會と埃及寺院との關係を示せる、歴史的事實を紀念するものではあるまいか。

右の如く埃及カルヂヤ及びバビロン等の文明が、今日の開明の起原であるとは、誰とて一人も疑ふものがない、然るに最近數年間に、希臘及び其附近の群島を探究した結果、文化の第三中心點が存するところが漸く明かになつて來た、今を去ると約三十年前、博士シリエマン (Schliemann) 氏は希臘地方の有史前の土地を發掘した、その時に、氏は自らオデイスー (Odysseus) の宮殿及びイリオ (Ilios) の塔を發見せることを信じて、「余はアガメムノン (Agamemnon) の骨を見た」と公言したが、世人はこれに對して一笑を興ふるのみで、毫も顧りみない、併しながら、氏の發見があまり漠然たるものであるより、尙一層精細なる觀察を加ふるの必要を認められた人がある、これホガルス (Hogarth) 氏その人である、氏は此の非常なる發見の結果「希臘に於ては、有史時代よりもその有史前の時代の方が、文化の程度が進歩して居り、其社會組織又は生産方法等の起原は、かのペリクレスの時代を溯ると、實に今日より、ペリクレスの時代に到る年月よりも尙久しい昔である、思ふに、エージャン海の文明は、ナイル河の文化に比して、何れが太古なるや判斷するを得ないであらう」と言つて

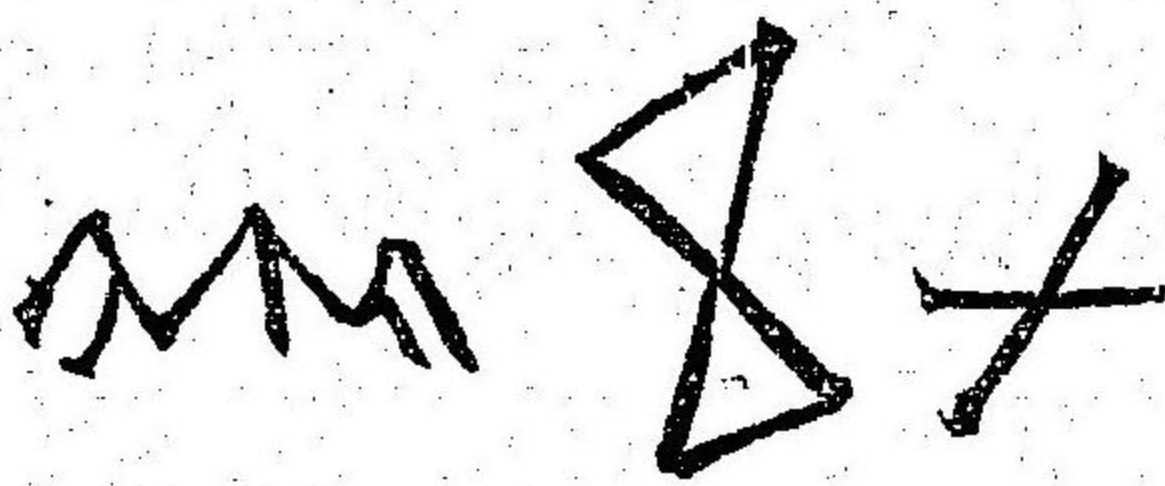
百五

居る、吾等は今これ等の問題を、初めから委しく語ることは止めて、極めて近代、即ちアーサー・エバン氏が此の六七年の間に於いて、クリット島に赴き、自ら拓ける事跡に付いて話して見やうと思ふ、氏の發見によれば、二個の事實を打立て、居る、一はクリット島固有の文明が存するといふ

こと、二はクリット人は、フェニシヤ人が通商を盛にして、地中海に乗り出し、サイプラス人やクリット人と交通するに到らなかつた以前、既に希臘、埃及、シリヤ其他の諸國と交通したといふこと、これである、氏がこの説明は、漸次學者社會の注意を引くに至つたが、尙世の中に公けにするには至らなかつた、後、是非とも公表するの必要があるといふので、始めて希臘研究雜誌に於て發表した、實にこれ千八百九十四年のことで、其の題號は「クリット及びペロポネサスより來れるフェニシヤ文字」と稱し、翌年また「クリット記號文字」と題して再刊した。

千八百九十三年、エバン氏が希臘に赴けるとき、不圖、記號の刻んである一小石を見認め、その記號は象形文字であつて、ヒッタイト文字に似て居るが、全く其固有の形を有して居る、伯林に來て能く研究して見ると、それはクリット人より傳來したものであるらしい、且つ、それは伯林の帝國博物館の保存して有るクリットから持來りし石の記號と酷似して居る、此

第五十六圖 瓶の文字



の他尙種々の確實なる證據を得て、エバン氏は千八百九十四年の春、自らクリットに赴き、先づ、島の東方を撰擇して探究を始めた、是れ蓋し早い時代に、島の東部には、エテオクリット (Eteoerotes) 人即ち原始的非希臘人が住んで居つたが故に、有史以前の事跡を求むるに、最も便宜なるを以てである、氏はプレソス (Praisos) に於て象形文字と、少しくアルファベットになりかゝつた文字を記載した石を見出したが、時を経るの久しき今日に於て、尙保存してあるには、何か譯が無くてはならぬ、果せる哉、土地の婦人は此の石を以て乳母石と唱へ、乳兒を有する母の、乳少なきものは、此の石の御利益を被ることを得るといふ迷信を有つて居る、これを以て、エバン氏はこの石を得ることが出来なで、止むを得ず、其の文字の形狀を寫し得たに過ぎなかつた、然るに後、グーラス (Goulass) に於て、希臘伊太利の有史以前の遺蹟よりも尙一層荒廢して居る所のものを獲た、それは、第一に山菜莢の果實及び枝葉の若芽の形、第二に焼粘土に牡牛を記せるもの、第三に陶土に粗末に記した三個の文字で、其中の二個は、サイプラス語の  $\rho$  (pa) と  $\sigma$  (co) とに一致して居る、またその隣村プロドロモスボザノ (Prodhomos Botzano) に於て、一の古風の焼粘土瓶を得たが、其の頸部に彫刻してある文字は、三個あつて、前者よりも更に一層複雑な記號である、其中の一字は、象形文字より出た兩斧頭形の變じたもので、これを直線にしたものである、而し最後の文字は、グーラスにて發見せるのと同じ様に、 $\rho$  と一致して居る、更にまた、グーラスに近い他の一村に於て、エ

バン氏は兩頭斧の、青銅で作つたのを発見したが、これにも記號が彫刻してある、而して氏は、之を以て、かのデルヒで発見した青銅斧に刻んだ記號と比較したが、最初の二記號は、鴨か又は他の水鳥の外形をとれるもの、様である、またノースヌ(Knosos)に於て或る記號を有する壁がある、それは初め仕事師が過つて傷つけた者として、看過されて居たが、エバン氏は之を以て、規則正しき記號にして、かの陶土や何かに記してあるものと異ならぬ、即ちこれ等は土片に刻んで後、壁とした

第六十六圖 青銅斧の文字



ものであると信じた、蓋し是等の滑石其他の石に刻んだ記號は、單に想像に出でたるものでもなく、また工人が過つて傷けた者でもなからう、

エバン氏のいふ如く、「石の數には成る程制限がある、が併し、其範圍内に於ては、續々或る一定の文字又は記號が現はれて来る、今迄見た所で石にては四回、大矢石にて七回、而して他の種類の器具にて十一回と

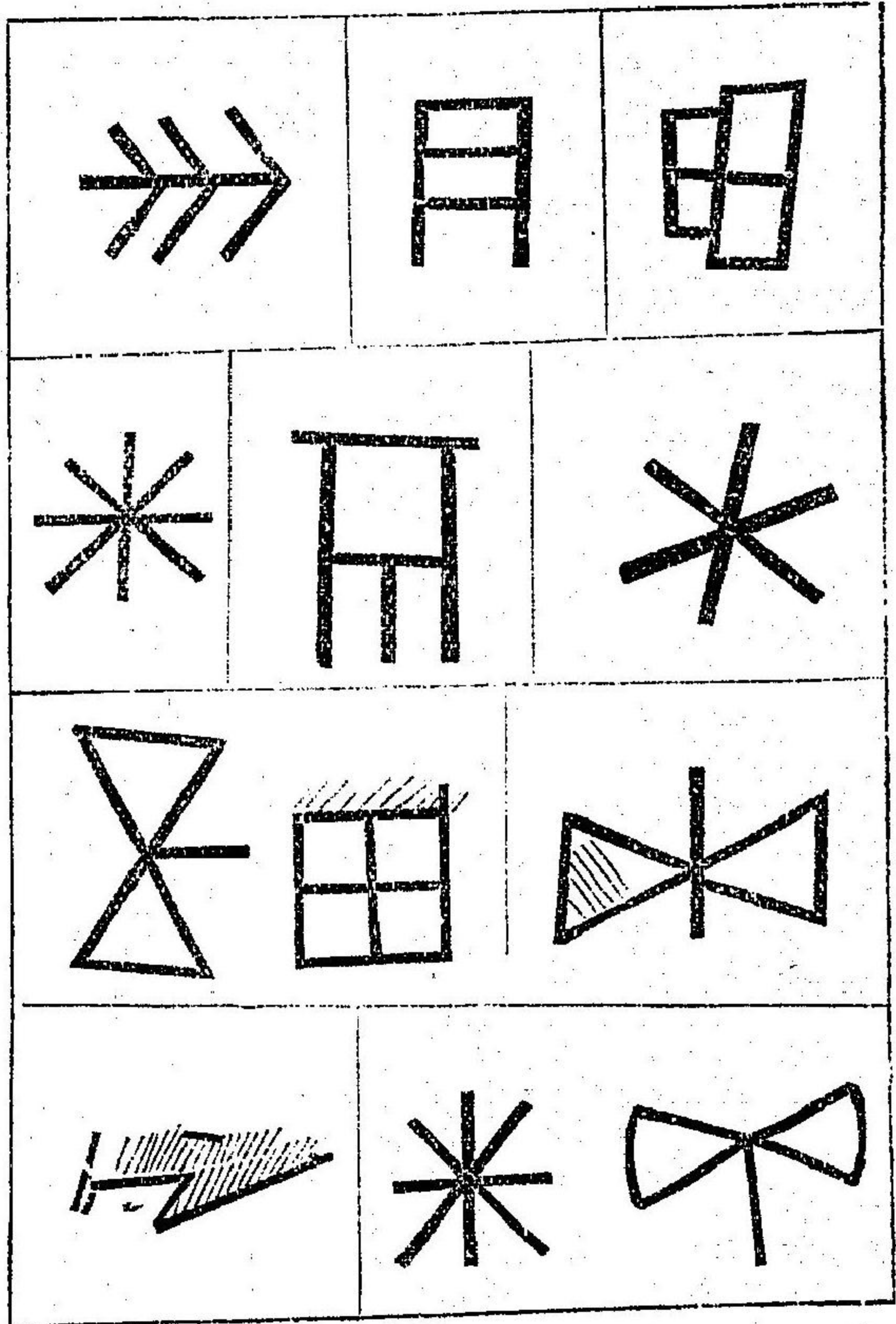
いふものは、皆之を明白にして居るのである、或はその文字の撰擇は明白に限られて、或る者は屢々見ることが出来、他のものは頗る稀なるものがあるが、併し之を以て、直に、當時の工人が粧飾の爲に彫刻したのであるといふことを拒むとは出来ない」と思ふ、而して、またこれらの記號の或る者は、省略文字なのがある、例へば單に頭のみを畫いてすべての獸を指示し、或は單に花を畫きて、すべての植物を意味することがある、これらは即ち文字の發達に於て、象形時代より記號時代に達した

ることを示すものだ、且つまた思想及び情緒を表はすに、記號を用ひたのもある、即ち手又は腕等の位置により説明して居る、尙また更に進んでは、これらの記號が二個以上七個位迄を連結して一

群として居るのである、

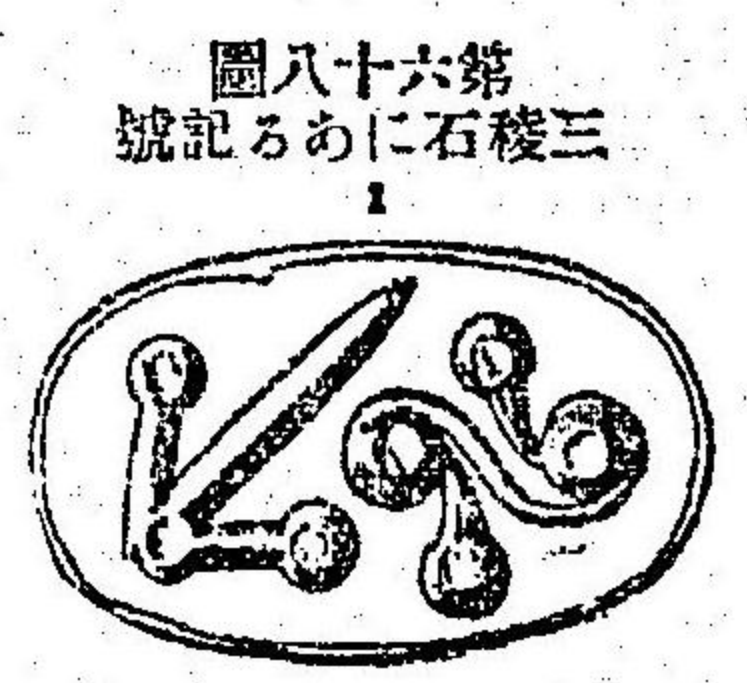
これによつて見れば、既に連字の認められたものと見える、而してこの記號は偶然に生じたものでなく、何か目的ありて(尤も判断の材料の少き間は、この目的を推定することは困難であるが)生じたものと見ることが出来る、而して、その目的たるや、

第七十六圖 ヤニセイマ建築物に記號

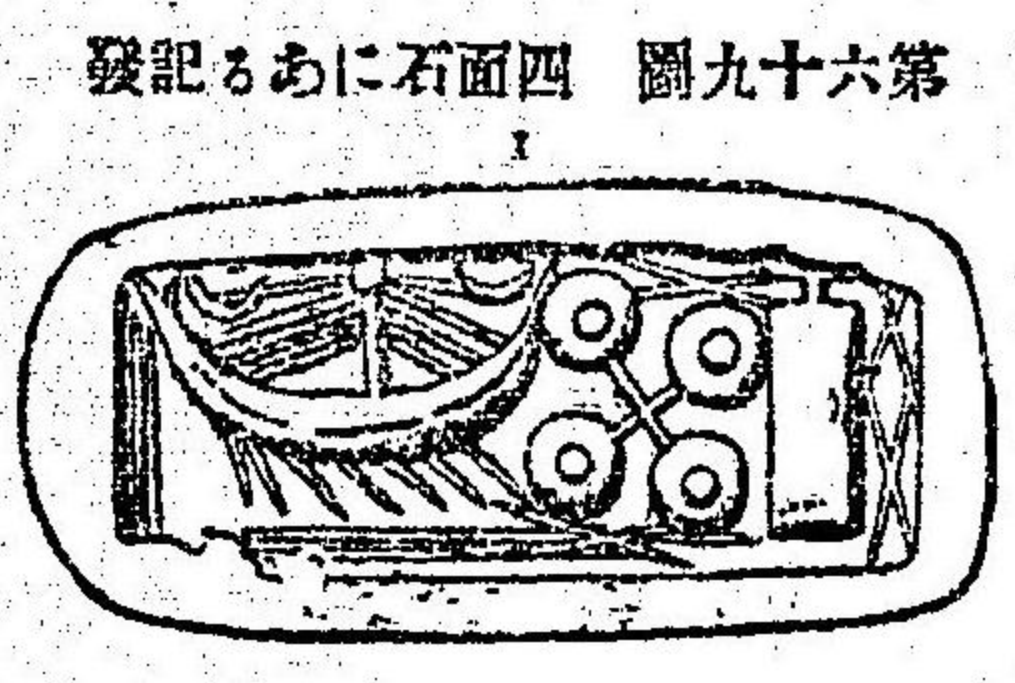
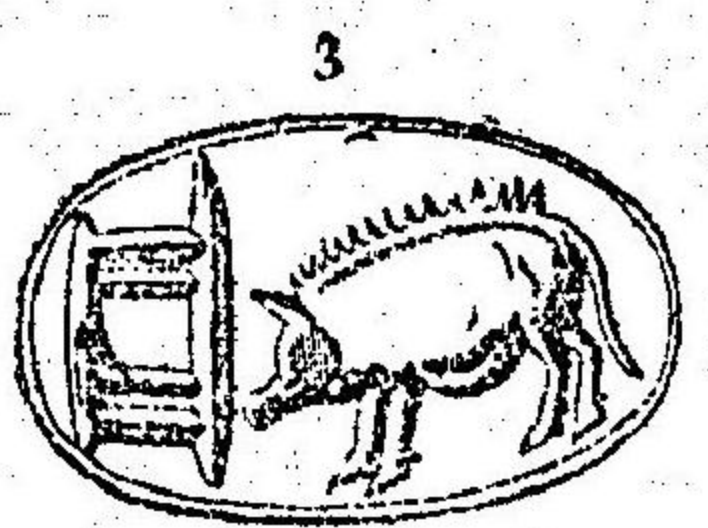


他の文字の場合に屢々述べた通り、自己の職業上の必要からして、かの商用記號の如きものを生ずるに至り、漸次發達したものとみることが得やう。

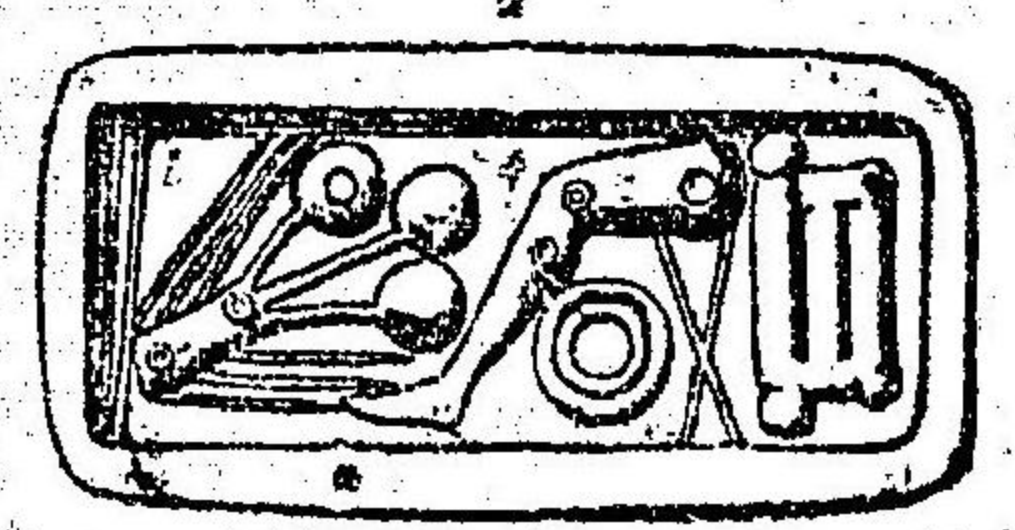
以上説明した種々の石、即ちフェニシヤ人と交通しない前に、クリート島で使用した記號を、刻んだ色々の石を、エバン氏は五種に分類した、第一は三稜形即ちプリズム形の石(第六十八圖)、第



圖八十六第  
號記るあに石稜三



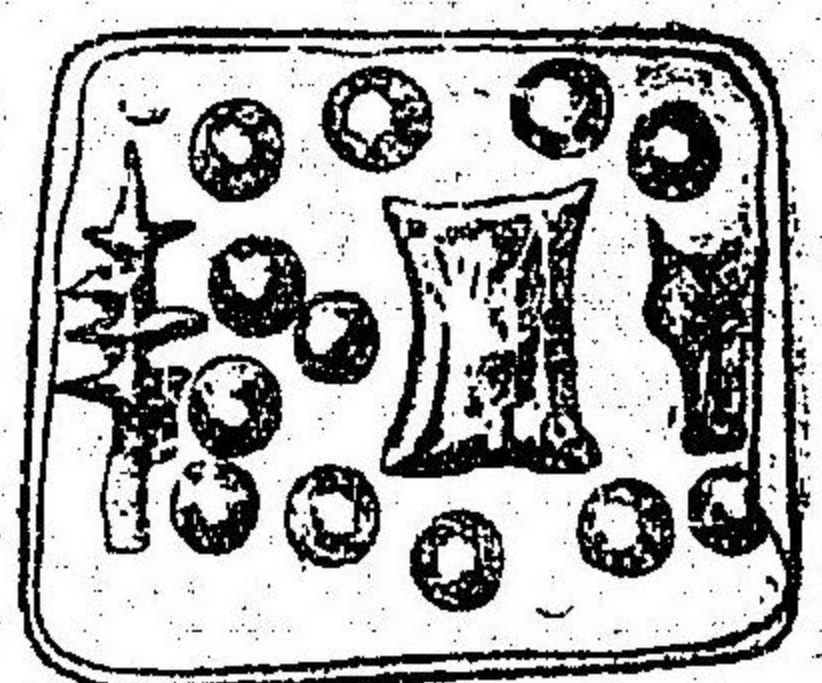
圖九十六第  
發記るあに石面四



二は同面を有する四面形の石(第六十九圖)、第三は一層大面を有する四面形の石(第七十圖)、第四は一面のみ彫刻せられ、上部は捲曲せる凸彫を以て粧飾せられた石(第七十一圖)、第五は普通のマ

イセニヤ型の石(第七十二圖)である。

圖十七第  
號記の石面四面大



圖一十七第  
號記の面石單



圖二十七第  
石の型ヤニセイマ



さて二十一個の遺石から、エバン氏が指摘した記號は、八十二個あつて、象形文字も記號文字も含んで居るが、氏がこれを分類したのを見ると、次の如くである。

- 一、人体及び其の部分.....六個
- 二、武器及びその他の器具.....十七個
- 三、家屋の部分及び一家の器具.....八個
- 四、海上の事物.....三個
- 五、獸類及び鳥類.....十七個

- 六、植物の形……………八個
- 七、天候及びその附屬物……………六個
- 八、地理風土的記號……………一個
- 九、幾何學的形狀……………四個
- 十、其他の記號……………十二個
- 合計……………八十二個

直線記號は、便宜の爲め別にして有るが、エバン氏はこれを以て根本的に象形文字と關係を有し、互に共通して居るといふ、然しながら、これに就ては少しく疑問がある、初めエバン氏は、三十二字を指摘したが、ツァンタス (Tsontas) 博士は三十八字に増加した、之と同時に他の一方には、是等の結果を來せる材料に、重大なる増加を來した、それは千八百九十六年の春、エバン氏が、傳説に所謂ゼウス神の誕生地と稱する、ダクタ山 (Dikte) の大岩窟に於いて發見した滑石板で、澤山の記號が記してある、之に就いて、エバン氏が自ら記す所を見るに、「それは奉納物表の一片より成り、連字九個を以て作られたる奉納書の様に見ゆる、而して二個の句讀がある、が、兎に角古代のクリット文字であつて、數多の遺石に見ゆるものと類似して居る」。

是等の直線形の記號は、三稜形の石に記してあるが、各點に於て象形文字と類似して居る、而し

て、是等の凡てを合したるものから、エバン氏は、三十二字を指摘したので、第二表は其のタイプラス文字及び埃及文字との關係を示したもので、第三表は二字以上の連字よりなるものを表示した

(表 一 第)

PICTOGRAPHS	EGEAN LINEAR	CYPRIC AND SEMITIC	PICTOGRAPHS	EGEAN LINEAR	CYPRIC AND SEMITIC
1			8		
2			9		
3			10		
4			11		
5			12 A		
6			12 B		
7			13		

TABLE  
PICTOGRAPHS AND LINEAR SYMBOLS  
COMPARED.  
CYPRIC - CYPRIC SEMITIC ARCH. CK - ARCHAIC  
GREEK - SEMITIC

のである。

元來クリットで、象形記號を記した石を發見したのは、單にノースの東方地のみで、是等の文字を使用したのは、島の中許りで、事實上あまり進歩しない部分に限られて居つたらしい、このと



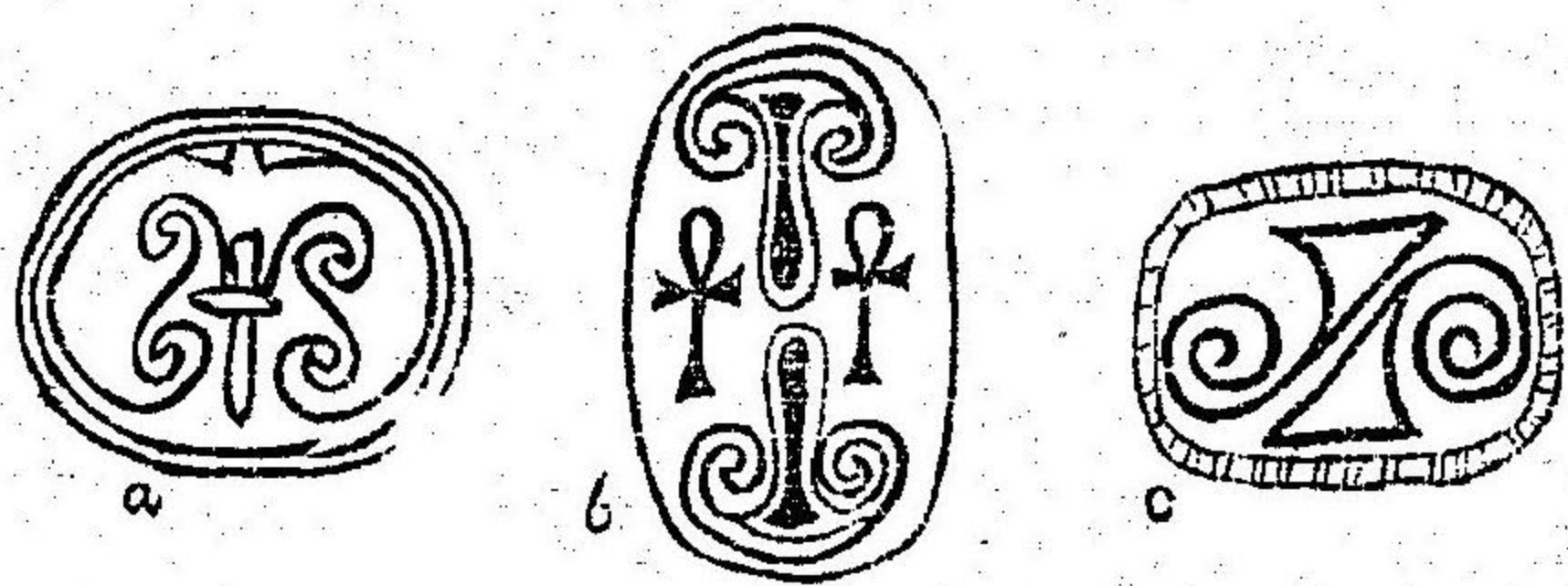
あるが、直線記號に至りては必しも然らずで、マイセニヤ (Myeneo)、ノープリヤ (Nauplia) 及び希臘埃及に於て有史以前の遺蹟のある所に發見せられる、且つまた、その或るものは前にも述べた如く、サイプラス、ヒツタイト及びセミチック文字にも著しい同化を見出すことが出来るのだ。

かの有名なフェニアム (Feniam) の古蹟中に、二個の市府が存して居るが、その一はカフン (Kahun) で、第十二王朝即ち西紀前二千五百年頃の市である、他の一はグロブ (Gurob) といつて、前者よりも十二世紀程新しい、双方とも古代には、亞細亞人及多島海附近の人民の殖民地があつた、然るに、今から十年餘前、フリンダースペトリ (Flinders Petrie) 教授が、是等の古蹟を發掘したときに、マイセニヤ文字と似た記號にて記した陶器の一片を發見したが、その中には希臘に於て發見し得るのと同じ様なものも在つた、カフン市の古蹟に於て發見したこの遺物は、その古さが市と同時に代であるといふことに就ては、教授もエバン氏も一致して居る、而して教授は「是等の記號は西紀前千二百年の頃使用され、其附近には、多島海の人民も、小亞細亞の人民も、チュルセン人 (Turseni) も、アケーアン人も、またヒツタイト人も住んで居つた」といふことを記すと共に、「吾人は地中海に類する國のアルファベットの起原が、茲に存することを拒む前に、先づフェニシヤのアルファベットが、或る亞刺比亞種<sup>アサシヤ</sup>の根原に出でたるものなりや、否やを研究しなければならぬ」と言つて居る、而してクリートに於ても、同時に第十二王朝の頃の遺物が見出されたが、それは、其の時代特有の

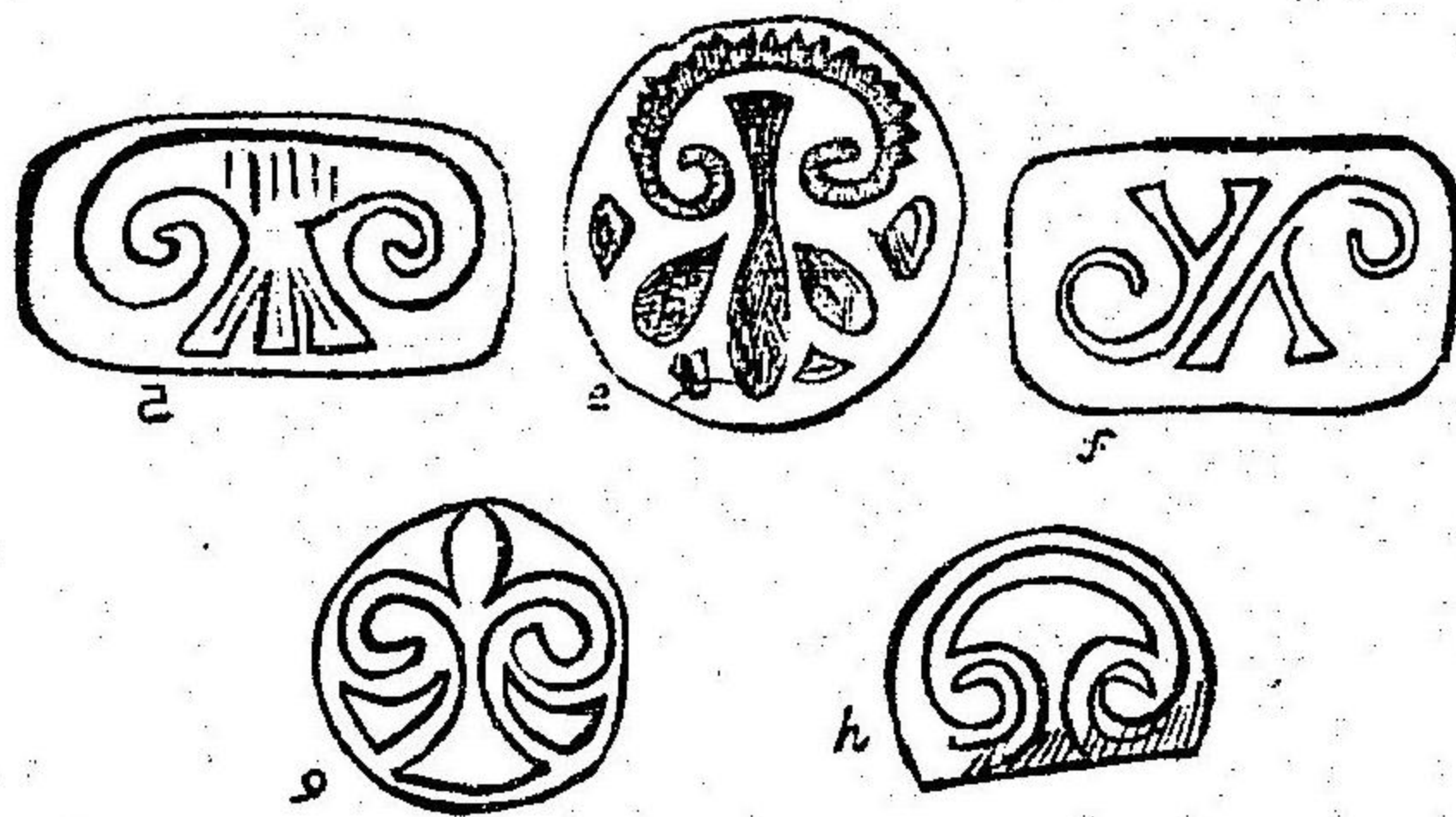
螺旋狀の粧飾を有する陶土に記したものである。

更にまた、パレスタインに於けるテルエルハッシー (Tell-el-Hesi) の大阜丘を發掘したが、この

圖三十七第 埃及及第二十王朝の模樣



圖四十七第 リクト古代の模樣



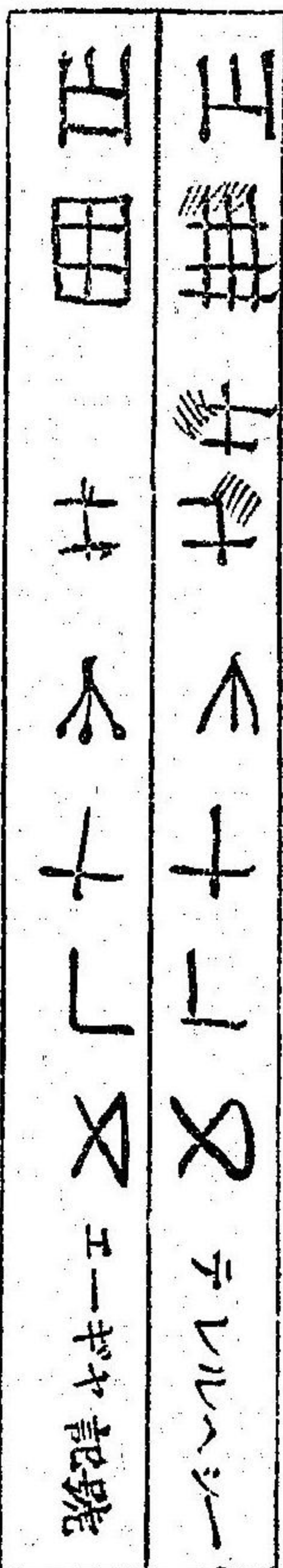
地は、人の能く知る通りに、昔より、十一個の市府が漸次荒廢して、積み上げたものである、吾等が發見したのは、第四の市府の遺跡に於て、約西紀前千四百五十年頃に記せる、瓶の破片であるが、それは多島海地方の記號に似て居る。(第七十三圖及び七十四圖) 前述の事は非常に複雑して居るが、要するに、クリートの象形文字の百分の二十は、埃及象形文字に類似し、更に直線記號に至つては、三十二個のク

リート文字中、二十個は埃及の直線記號と似て居る、而してエバン氏の言ふ所によれば、「サイプラス記號とも著しく類似して居つて、クリート文字の字音の十五位は、サイプラスの字音に似て居る」

といふ。(第七十五圖)

此のサイプラス字音は、いふ迄もなく、サイプラス島に於て見出されたものである、元來同島は小亞細亞を離るゝと僅に六十哩の所にあつて、既に有史以前に於ても、二者が盛に相交通したことは、強ち無根據の想像とのみいふを得ない、彼のサイプラス古代の記號文字と西部亞細亞の文字と一致するが如きは、實にこの研究の端緒とするに足るので、兩者の間に最も親密な關係が在つて、

西紀のシキリアの碑文、ヘラクレオン、ミナモス、圖五十七號



サイプラス字音はヒツ  
タイト字音の嫡裔であ  
るともいへる、今日こ  
そ、吾等は是等の島の

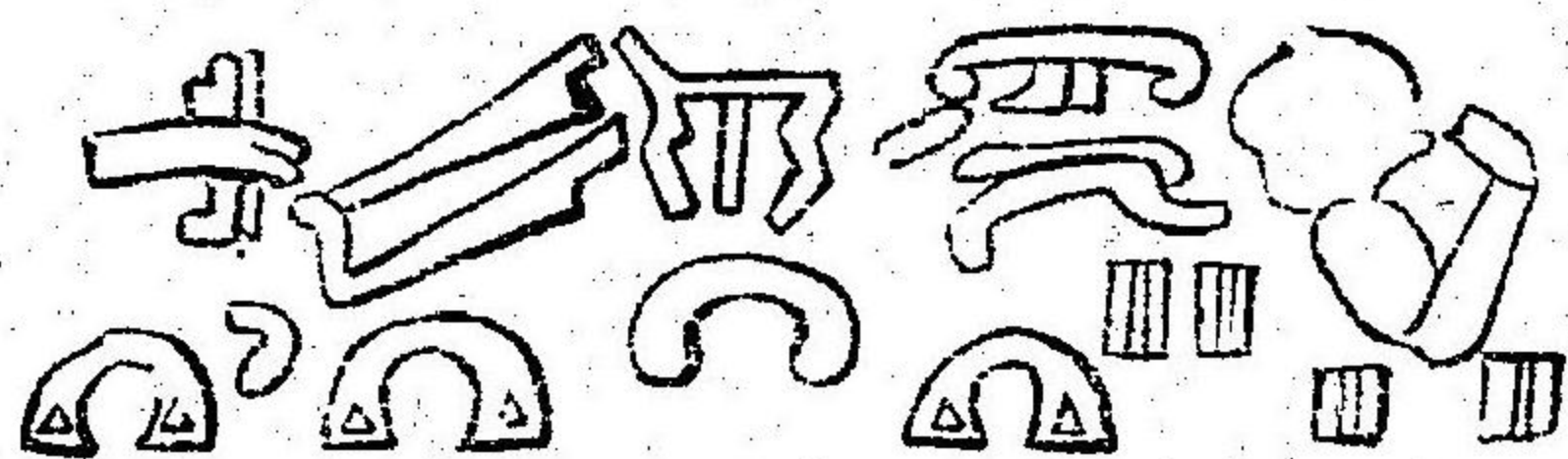
状態を少しく知ることを得たが、歴史の序幕に於て、地中海東部の一閑島が如何であつたかは、吾等はフェニシヤ及びフリヂヤン人に關して持つ智識よりも少ない、換言すれば吾等は實際サイプラスの古代に付て知る所は、極めて僅少なものだ、であるから、この時代の事に付ては、單にテルエルアマルナ(Tell-el-Amarna)の碑板、カルナック(Karnak)の彫刻物、及びヘブリー其他の記録によつて少しく知り得るのみで、ユーフラチスからユーキシム(Euxine)に到る間に、強大なる帝國を建設し、一方は、境を埃及に接し、他の一方に於ては、アッシリヤの境域に連れるを見るのみである、

西紀前千二百七年埃及の王ラムセス第三世は、此のヒツタイト人の帝國及び之に附隨せる諸人種の侵入を防ぎ、ミグドル(Migdol)に於て之を破り退かしめた、が併し敗軍の報は非常に強大で、シリヤ全國を蹂躪し、その地中海の沿岸及び附近の島嶼に於て、大に奪掠をなし、海上を擧げて彼等の小舟と糧との横行に任せた、このヒツタイト人が始めて歴史に現はれたのは「西紀前約千九百年、アガチ(Agathis)王サルゴン一世の碑銘に記してある、西紀前七百十七年のサルゴンの碑銘には、最早記されて居らぬ、歴史から絶えて終つた」と、ライト(Wright)博士は言つて居る、今から三十年前迄は、これらのヒツタイト人に關する記念物は少しもなかつたが、遂にヒツタイト人と埃及人との間に結べる條約が発見されるに至つた、之は人の能く知る如く、世界最初の外交文書として知られ、相互對當の條約を以て援助を約したのである、尤もこれは埃及の方に於て見出した者で、ヒツタイト人ではない、ヒツタイトの第一に発見せられたる記念物は、鎔化石板に一種奇妙な象形記號を刻んだものである、これは初めブルクハルト(Burkhardt)なる旅行者がオロントスのハマー(Hammah)に於て千八百二十二年に発見したのであつた、併し此の象形文字を解釋するとが出来ないで、其儘千八百七十年迄放棄されてあつたが、再び発見せられた時には、他にも同様な文字を記した遺物が見出された、が併し、今日に到る迄此象形文字解釋の關鍵となるものが見出されないので、一字一句も讀むとが出来ない、學者は今や只管兩語で記した記念物、即ちロゼッタ石が、埃及の象形



文字を解釋する鍵となり、ペヒスタンの岩が、楔形文字解讀の緒となりし様に、何か二個以上の語を以て記された碑銘を得んことを望んで居る、吾等は二十世紀の今日になつても、尙未だこの強大なる

第七十六圖 マハに於けるツイタの彫刻



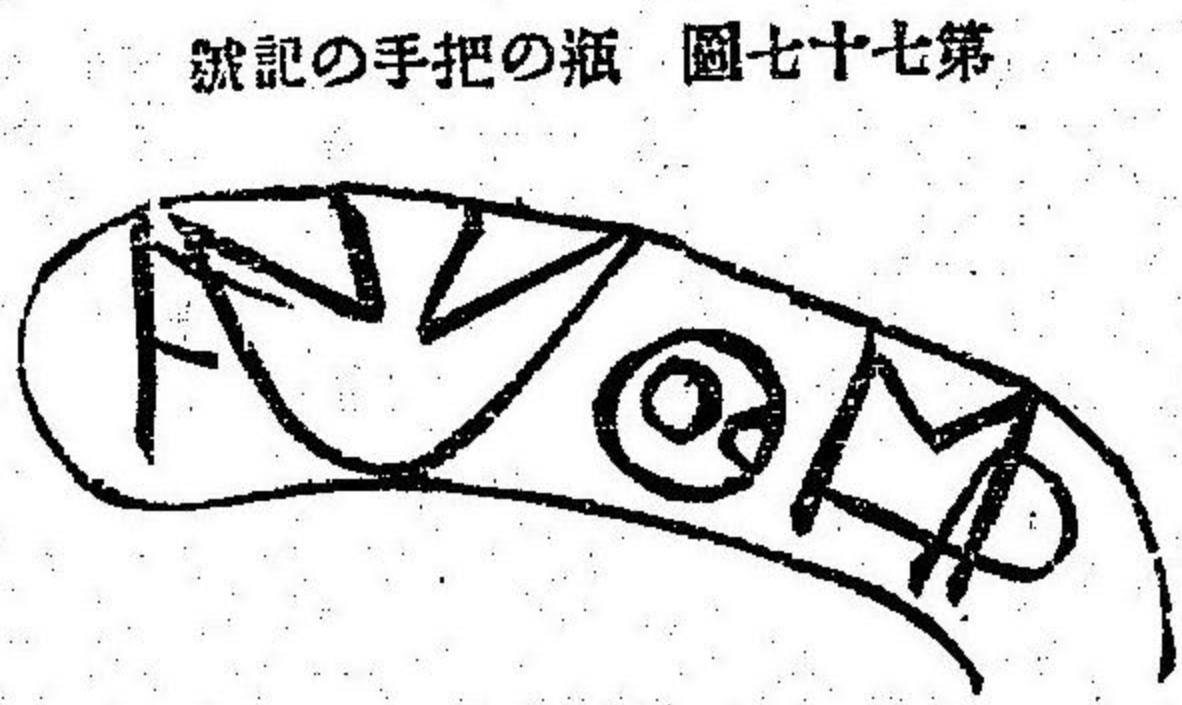
國民に就ては、何等の確知する所がなく、たゞナイル流域の彫刻物に由つて、無鬚の好漢が、帯に短劔を挟み手に兩頭の斧を提げ、千軍萬馬の裡に奔走するのを追想し得るに止まるのである、斯くの如くヒツタイト人に關する現時の智識は淺薄のものであるが、併し彼等の遺物の諸所に撒布して居るのをみるに、彼等は美術工藝の或る種類に於ては、佳なりに發達して居つたことを確め得る、彼等は銀を鎔解して青銅に着せるとを知つて居た、彼等は巧妙な寶玉の彫刻師であつた、また彼等は象牙細工にも頗る能く熟達して居つた、而して彼等は繪畫に於ても獨特の書法を有し、他の亞細亞人の字音の起原をも開いたのである、その文字が一種特別の形狀を有するとは、第七十六圖に掲げたハマーの碑銘を見て、直に知ることが出来る。

談話は再びクリートのとに戻つて、マイセニヤ文明とクリートとの關係を、研究して見やう、マイセニヤ文明といふのは、ホーマー以前の希臘及び多島海、即ち古代のトロイ(They)をも含める地方の文明といふのである、この文明の野には、近來に及んで、研究の鋤を入れ

たものが、ないではないが、餘り成功しない、否却て、誤謬の害を加へて居る、グロート氏(Grote)は只一度マイセニヤの市府に付て書き、無意味に傳説王朝の一市として話して居る、サーヂョーヂコックス(Sir George Cox)は、その著「アリヤン民族の神祇誌」に於てマックスミューラー教授の説を贊同して居る、即ちトロイ城の包圍は、「西方に於て毎夕彼等の澤山の寶物を奪はんとするのであるが、畢竟是れ太陽の力によつて、東方の日々の包圍を反射したるものである」といふ、而して之に附加して、此説は「恐らくは、今日以後は滑稽と思はれない證據を、澤山有して居る」といつて居る、一方から見ると、誠に噴飯に堪えないことである、シリエマン氏及びその後輩は、是等の事實の遺蹟記念物等を發見しやうとして、發掘等に大に務むる所があつて、自らは、アガムノンの遺物を發見し得たなど言つて居るが、頗る疑はしいものである、唯多少文化の遺物を明白になし得たといふにすぎない。

餘談をさせてマイセニヤ市に存せる碑銘を研究して見ると、その最も古いと思ふものは、單に一記號を記せる一個の石がある、而して其記號は、サインラスの記號に似て居る、が併し、單に一個の記號では、アルファベットを爲さない、是に於てか、近來發見した石瓶の把手がある、之には四個か五個の記號が刻んである、またマイセニヤの下部に於ける有室の塔から發見した陶土の兩耳瓶の耳には、三個の記號が刻んである、而して又、ノーブリアに近きプルーシヤ(Prussia)に於ける一塔

の皿は、三個の耳を有して居つて、各一個の記號がついて居る、その形は希臘語のH(エター)に似て居る、是等の例のみには、未だ、フェニシヤと交通する以前に、希臘に文字の存せることを證するに足らないが、クリットに於ける碑銘の、澤山發見せられた者を合せ考へて見たならば、如何なる事實が確め得らるゝであらうか。(第七十七、七十八圖)



圖七十七 瓶の把手の記號



圖七十八 兩耳瓶の把手の記號

クリット島に於ける當初の文字には二種ある、その一は象形即ち繪畫的記號で、他の一は直接記號即ちアルファベットに近い文字である、繪畫記號は勿論、いふ迄もなく、他の一よりは古い方で、西紀前、三千年は經過して居るであらう、而してそれは最初島中の非希臘人により繪畫から傳來せるものである、こゝに非希臘人といふはドリヤン人の侵入した時エテオクリット人(Eteoetans)即ち純粹のクリット人と稱した人種である、而して此處にドリヤン人の侵入したのは、希臘年代記の傳説によれば、西紀前十二世紀の頃であるといふ、是等のエテオクリット人も明確には分らないが、原初の住民ではないやうである、近來發見せる碑銘によると、クリットの原字即ち象形文字は、漸次後を絶つて、希臘のアルファベ

ットとは何等の直接の關係を有たない、即ちマイセニヤの文化に影況を及ぼして居らないことがわかる。

更に第二の直線記號に至りては、是實にアルファベットの記號であつて、象形文字の發達變化したものであるとは、前來屢述べたが如くである、尤もこれは、ツァンタス博士が「假令これを以て象形文字の變化せるものなりとするも、それがエテオクリット人のなせるものとするとは出來な」といつて居る、博士の見る所を以てするに、此の發達省略は東方に於て成りしもので、希臘附近に於ては無い、それが漸く希臘の近邊に來つて、ペロポネサスに入りしや否やは疑はしいが、兎に角少くとも、クリット島に入りしものである、これは碑銘の記號を有せるものが、クリットにはあれど、割合にペロポネサスに少いのを見ても明かである、といふのだが、信を置くに足らない、翻つて他の方面を見れば、フリンダースベトリー教授が、此事に關し千八百九十九年九月頃發表した議論がある、其は「一の大記號(象形にあらすして幾何學的形狀を有する記號)があつて、地中海のすべての地方に於て、西紀前五千年の頃使用せられて居つた、埃及に於て見出さるゝものも亦それである、が兎に角、この大記號は東西に分れ、埃及に於て一は象形的文字となり、他の一はヒツタイト人の中に入つた、斯の如くにして此の直線記號は種々の異つた發達をしたが、根原が同じであるだけに、また各地方に於て共通のものがあつた、而してこれを始めて系統的にしたものは、

フェニシヤの貿易商で、彼等はこれを希臘に傳へ、希臘は之をアルファベットに形成したのである。此の記號はまたカリヤ (Karia) に於ては三十六個の字形を有し、イベリヤ (Iberia) 地方にては更に七個を増して四十三個を有する、而してカリヤの記號とイベリヤの記號とは非常に似て居り、埃及のもの亦これに非常に似て居る、埃及で見出されたる記號を、他の地方のと比較するに、東部地方よりは、寧ろ西部地方のに多く類似して居る、即古代の亞刺比亞文字と共通なものが十三、フェニシヤ文字と共通なものが十五、カリヤ及びイベリヤのケルト族の文字と共通なものは三十三に上つて居る、これを以て見ても、埃及第十二王朝及び第十八王朝の記號文字が、他の地中海地方の文字と關係を有することを知り得る」といふ、また同教授は同年英國協會で重大なる研究を朗讀したが、その中に「吾人は今やアルファベットの起原に關して、全く新地位の研究に進んだ、而してそは吾人が從來想像して居つたよりも、三倍程古いことを知ることが出来る、惟ふに記號が最初からアルファベットの如くに、聲音を表示して、通信に使用せられたといふが如きは、毫も信すべからざることで、これをもつて、多少通信の用に供するに至つたのは、比較的近代のことで、フェニシヤ人の商用に供した如きは、これである」と言つて居る。

以上小亞細亞、埃及、クリート、ローデス、テラ、メロス其他地中海の東部地方に於ける發見の結果と、ペロポネサス地方の遺蹟とを結び付けて考ふるに、フェニシヤ以前の時代に、マイセニ

ヤを中心とした文化の發達の存在したことは、眞實なるが如く見えるのである。

此人類發達の有史以前に於ける文明は、時を數ふるに、少なくとも西紀前三千年の昔にあるであらう、マイセニヤの瓶類が埃及に於て發見せられ、埃及のスカラップがマイセニヤに於て發見せられる、實にこれらは兩者間に西紀前二千五百年の頃、親密な交通が有つたことを證明して居る、パピロンの圓筒、その彫刻せる度量衡器の模形、又アスタルト (Astarte) の文字を準へる如き、實に是ホーマーの詩篇に現はる、以前、約千五百年の昔に於て、アッシリヤと希臘と相交通して居りしとを示して居る、唯それ東洋の技藝に至つては、多少外邦から來た者として排斥せられ、マイセニヤ獨特の模型は變化をうけずに止まつて居つた、即ち是等の多くの證據からして、吾等は歐羅巴の文明はフェニシヤに起原するといふ説を破ることが出来る、従つて歐羅巴のアルファベットが、埃及のハイラチック文字から、フェニシヤ人の手を経て傳來したといふ説を、當然誤れる者となさざるを得ない、而してこの主なる證據は、前にも少しく述べた通りに、第一にマイセニヤの文明は既にフェニシヤよりも古く存在すること、第二にその文明は性質上固有なりといふ點に存する、今之から、この二つの證據に付て、少しく詳述を試やうと思ふ。

(一) 抑も多島海及び希臘本島に於ける文明は、西紀前三千年の昔に於て存在して居つたとは、前述せる如くであつて、その頂點に達したのは、同じく西紀前十六世紀から十二世紀迄の間であつた、

而してフェニシヤに至つては吾等の知る所は又聞きであつて、直接に其遺蹟から調べたのではない、是、彼等の間には、假りに文學又は歴史等が有つたとしても、今に於て何等の材料が存在して居らぬためである、之を以て不得止、他の材料によつて、又研究をせねばならない、古代の傳説及び埃及ヘブリー等の記録によつて見るに、初めフェニシヤ人は西紀前千六百年の頃から數世紀間、埃及に領屬して居つた、西紀前千二百五十年には、メムフィスに於てタイル街が成立し、同じく千〇二十八年にはヒラム人の配下となり、此の頃からして商業は漸次盛大をなすに至り、西紀前第八世紀に至り、後來隆盛の都市となれるカルセージ (Carthage) の基を開いた、然るに恰も西紀前十二世紀の頃、ドリアン人の侵略があり、マイセニヤの文明は之が爲め大に衰頽を來し、之と同時にフェニシヤ人は好機會を得た、即ちフェニシヤ人は多島海の覇を握り、地中海の權力を自己の掌中に收め、その後希臘が再興して、フェニシヤ人を其近海より追ふに至る迄引續き、西紀前三百三十二年歴山大王がタイルを陥るゝに及び、一敗地に塗るゝに至つた、然れども、此の盛衰興亡の間に際し、フェニシヤ人の強大なる通商上の勢力は、滔々として希臘に影響を及ぼし、希臘文明の再興に會し、また幾何かの餘恩を與へて居る、果して然らば、そのアルファベットに對しては如何なる根原を與へたか、是れ今將に研究せんとするの問題である。

(二)既に亞細亞及び埃及の影響を研究した上は、吾等はマイセニヤの文明は、蓋しこれ等の東方

諸國に關係なく發達せるものなることを知つた、即ちマイセニヤ地方に於て見出さるゝ陶器の粧飾物は、東洋的のも又埃及的のものでもない、すべて皆希臘群島に於ける内地の製造物である、神木及び墓碑等の發見せらるゝ者あるも、それは非セミチク風のものであつて、エバン氏が言つた如く、「原始的歐羅巴地方に於て廣く行はれ、且つ其の西部に於て殊に固有なる宗教發達の一時期」の賜であるのだ、然り而して假りにアルゴロス及びシリヤ間に於て、何か踏石の存するものありとせば、そは實にマイセニヤが東西の間に立ちて連鎖となり、交通をなしたることを指すのである、然るに前にも度々述べた如く、有史以前の歐羅巴は舊石器時代と新石器時代と斷絶し、嘗て北亞弗利加から原始的祖先の通行し來れる道が絶え、之と同時に、また東方から人種移住の風潮により、來りて原住民者を西北方に追放せる、所謂東洋のミンレーシ (Mingé Orientale) も絶えた、が、一度歐羅巴に於て人民の住所が定まるや、直に獨立の發達をなすに至つた、是れ實に彼の歐羅巴に於て發見せらる記念碑等の記號により、フェニシヤ人がヘルシヤ灣地方よりシリヤの海岸に來る前に、既に地中海の兩岸に於て共通の貿易通商記號を使用せりといふ、非常な事實のある所以である、而して是に於てか、再び新説の生ずるに至つた、そは、多島海地方の文化は、もと瑞西及び伊太利の北方の間に位する廣濶なる地方に於て生じ、ダニューブの灌域及びバルカン半島を通過して、アナトリア (Anatolia) の大部に及び、遂にサイプラスに達するに到つたといふ説である、また此説によれば、青銅器時代

に於て、假令スカンデナヴィヤ附近が琥珀の産地なりとするも、北部及び中央歐羅巴に向つて、金を供給したのは、ウラル山からではなくて、愛蘭からであるといふ。

多島海の文化は何處を中心としたか、これも研究を要する、元來、多島海の名は、地中海の東部に於ける地方を總稱して居るので、これらの群島中何れの島が首島であるかは、問題である、ヘロドタスのいふ所によれば、「ヘラスは以前ペラスチックス (Pelagick) と呼ばれて居つた、」而して此のヘラス以前の希臘には、未開の民即ちペラスチャ人が住んで居つたといふ、之を以て見るに、本島にも亦附近の島嶼にも、ペラスチャ人が住んで居り、ペロポネサス全部をペラスチャといふたので、タイリン (Tyria) 市の王もペラスジャ人で、エスキラスの如きも、またアルゴスを、ペラスチャ人の市といつて居る、ポーサニアス (Pausanias) のいふ所によれば、アルカデヤ人は、「ペラスガス (Pelagus) を以て、ペラスチャと稱せられし地方に住せる第一の人なり」といつた、而して又、アゼンスの舊城壁の如きも、ペラスチャ人の造れる者である、尙またアツチカの住民もペラスチャ人であるといふ、かのレスボス (Lesbos) も亦ペラスチャと呼ばれたが、ヘロドタスは、トロード (Troad) に於ても、ペラスチャ人を知つて居ると書いて居る、斯く澤山の地方に及んで居たが、遂に其殖民地は埃及に、ローデスに、サイプラスに、ドノナ (Donna) の古神殿の在るエピラス (Epirus) に、而して最後に伊太利の諸地方に及んだ、ヘロドタスは、是等の未開の民に就いて記す所は誠に少ない、唯彼

等は野鄙なる言語を有し、一種異なる敬神をなせる事を語るにすぎない、ウオヒスマス (Wachsmuth) 氏は今より六十餘年前に出版せる著書、「希臘の古代」に於て、多くの傳説、而も確實信するに足る傳説によれば、彼等は「勇敢にして徳義あり、且つ名譽ある人民」であつて、他の人種と異つて居るとをいつて居る、ケーヌ (Keane) 教授は之を以て有史以前の希臘研究に於ける好文字なりとして讚し、多島海文化發達の功はペラスチャ人にあるとして居る、然らばそは何れの島に於てあるか、換言すれば何れの島が主島であつたかを知らねばならぬ、マイセニ市の古蹟に於て發見せる所によれば、マイセニこそ主島であつて、文化は此處より發達したものであるらしい、該市及びその姉妹市ともいふべきタイリン市の古蹟に於ては、古代の文化の種々の遺物を得ることが出来る、莊嚴なる宮殿、九天井の墓中の金鎖を着けた骸骨、及び要塞城壁等の破片零碎が少からずある、が併し、茲にまた一の傳説が在つて、是等の諸市はホーマーの詩にあるクリートの「ノーンヌス (Knossos) の大市」よりも新らしいといつて居る、即ち此の傳説によれば、アガメムノンがマイセニヤに在りて統治をなす以前に、重大なるクリート王國の存在せるものがあつたのだ。

夫れ水は文明の誕生地であるとは、人生その者が文明の誕生所であると、毫も異なる所がない、而してこれより推すときは、多島海又はマイセニヤの文明の起原地が、クリートであるといふのは、誠に適當な見解である、實に該島はヘラス以前の文化の遺蹟を以て充されて居る、希臘より小亞細

亞カルパス及びローデスに到る間の踏石となつて居る、即ち東方に於てはサイプラス、シリヤ及び埃及との交通の要路となり、西に向つてはシ、リー及び地中海の西部沿岸地との通商を維持するの關鍵である、希臘最古の傳説によれば、クリートは「神政的立法の名家なると同時に、また海上權力を握れる最初の中心」なりといつて居る、是れ誠に事實であつたであらうと思ふ、而して更に多島海の航海術の起原から推すときは、尙よく此の間の消息を知ることが出来るであらう、フェニシヤ云々の説と、クリート中心の新説との當否を明かにすることが出来るであらう、シリヤの海岸は良港に乏しく、天然の堤防がない、之に反して多島海地方の沿岸は、屈曲非常に多く良港に富み、其人民は勇敢不羈以て、葡萄牙の海上に小舟を浮べ、歳に月に其航海を擴めた、斯くて多島海群島の通商貿易は、近隣の地方に影響を及ぼし、自らは高尚なる文化を發生し、廣大なる歐羅巴に之を移植し、引いては埃及及び亞細亞の舊文明に反響を與へた、而してその文化を東方に及ぼすや、亞細亞の黄金はサイプラスの手を経て此處に渡り、クリート獨特の技術を以て、美麗に彫刻して東洋の人民を驚かした、フラゼル (Fraser) 氏はその著「マイセニヤ文明の起原」に於いて「夫れクリートの地たるや、希臘と東方帝國との中部に位し、双方の特性長所を相融合するに適する、然るに當時クリートは海上に於て絶大の權力を握り、その固有の文明を起し、之を諸方に分布し、東洋に於ては其の勇敢な性質に影響して相同化するに至つた、惟ふにアルゴリスとクリートとは何れが先きであるかの

問題は、是非早晚決定せられなければならぬが、余の見る所に於てはマイセニヤ文明はクリートに起り、其處を中心として擴がつたもので、タイリン及びマイセニ等の市が盛大になつたのは、クリートの權力が衰へてから後のことであるらしい」と記して居る、而してマイセニヤ文明が大打撃を受けたのは、前述せる如く、西紀前十二世紀のことであつて、ドリアン人はその南方から侵入して、タイリン及びマイセニの城壁に迫り、之を陥れて島有に歸せしめた、是に於てか、希臘の暗黒時代は來り、ホーマーの復興時代に引續いた、然るに、こゝにまた、此の恐るべき時代に、逃亡避難したるものがあつて、これらの人々はアイオニヤの海岸及び諸島に移住し、こゝにアイオニヤ文明の基を開き、後世の技術、文學、理學及び哲學の鼻祖となつたのである。

此のマイセニヤの没落は、フェニシヤ人に好機會を與へ、彼等をして此處に多島海の僭主たらしめ、地中海を擧げてその權力の下に置いた、が然し、惜しいかなフェニシヤ人には政治的結合なるものが欠乏し、その事あるの日には、皆雇兵を以て之を治めて居つた、之を以て遂に、勇敢なる希臘人に屈服せざるを得なかつた、此の盛衰の裡にありて、フェニシヤ人は其のアルファベットを今日の形狀に作り、希臘をして之を採用するに至らしめた、然れどもそのフェニシヤ文字は何處より來れるか、若し埃及のハイラチックから來りしものにあらざれば、そは何處より傳來したものであらうか。

此の間に對して未だ一定の答をなしたものが無い、否恐らくは將來に於ても無いであらう、フェニシヤ文字は埃及文字の變化せるものであるか、或はヒッタイト文字の變形であるか、或は又サネブラスの文字を傳へたるものなるか、さてはまたフェニシヤ固有の象形文字より發達し來れるものなるか、の問題は到底決せられざるべしとは、豈に唯にカノンローリンソンのいふ所のみならんや、實にこれは多くの學者の異口同音に唱ふる所であつて、既にクリートの象形記號及び直接記號が發見せられざる以前から、人々の能く口にする所であつた、惟ふにフェニシヤ人は種々の影況の下に感化せられたが、多分此の文字も亦周圍の地方より印象をうけて居るであらう、而して、もと此フェニシヤ人はシリヤに現はるゝ以前に、既に長き歴史を有して居るので、セミチツク人種としても、彼等は楔形文字と能く密接して居たらうと思ふのは、決して無理でない、また彼の埃及の市府メムフェイスに於けるタイル街の如き、蓋しフェニシヤ人もまた埃及文字を使用して居たらう、少くとも埃及文字と密接して居たであらうとは、當然想像し得ることである、而してまたフェニシヤ人の多島海に來るに及んでは、從來地中海岸に通用して居つた古代文字を見るところを得、その商業的頭腦は、遂に此便利なる文字を利用せざるを得ざらしたであらう、此の點に關してエバン氏も亦その蓋し然るべきをいひ、少くともフェニシヤ文字の發端は、その一部を多島海に採つて居るのであらう、而して此のことは、マイセニヤ文明の澤山の遺物が吾等に語り、カナ、イト沿岸に於ける

隣人は、技藝文化の發達せる、多島海人民であつたといふとにより、考へ得らるゝといつて居る、夫れ然り、彼等の盛大なる通商は足跡を到る所に及ぼし、利益のためには、其材料を或はナイルの流域に採り、或は亞刺比亞及び紅海の沿岸に採り、又或は地中海の沿岸に採つた、然るに之と反對にセミチツク人の要素は多島海に入つたであらうか、といふとは不確定であつて分らないが、双方の文字の間に類似の存するといふとは、容易に證明する事が出来る、されどフェニシヤのアルファベットが種々の根原から來り、その通商の便宜に従つて適宜に撰擇變化をなせる者なることは、最早想像ではなくて確實といふことを得やう、凡て通商國民の通性として、大に簡易を尊ぶの風が存在する、フェニシヤ人も亦然りで、これらの諸方から得たる文字を略記し、餘計の文字を除去し、不完全ながらアルファベットらしきものを作り出し、今日文明世界に於て用ひられて居る、字音の基を開き、縦令變遷訂正は免れざりしも、皆軌を之によらしむるに至つた、由此觀之、歐羅巴のアルファベット傳來の説は、未だ確定せず疑の存する者なりといふの故を以てのみでは、吾等が此古代の通商人民に負ふ所を、毫も輕むることを得ないであらうと思ふ、此フェニシヤ人のなせる功勞に就て證據となる所のは、シーザー及びオーガスタス等と同時代の人ダイオドロス (Diodoros) の記せる古代クリートの傳説に存する所にして、エバン氏もその著の再版に於て、之れを引用して居る、即ちこの傳説によれば、文字を創始せるものにあらずして、單に之を變形せるにすぎない、換言

すれば彼等は實に現存せるものを、改良するより以上のことをなさなかつたのである、尙またダイオドロスの記録によれば、クリート人はフェニシヤの文字を引用する以前に、既に自己の文字を有して居たといふことが書いてある、今日クリートに於ける遺跡の發見と相對照して、吾人は此の古昔の記者が、録せる所を読み、大に興味を感ずるのである。

## 第八章 希臘のパピリ及び各種の字形

前章に於て述べたる如く、希臘人はフェニシヤ人を多島海より追つて、自ら代つて海上の主權を握るに至つた、是れ實に西紀前第八世紀頃からのことで、これより以後、希臘人は巧妙なる造船師となりまた航海者となつた、彼等の製造場及び殖民地は東西到る處に設立せられ、西紀前六百年の頃に至つては、實に東方オデッサより、西方マルセーユに達した、埃及第二十六王朝最初の王プサマチカス (Psammetichus) の援をアイオニヤ人等に借るや、(西紀前六百六十六年)その報酬として、埃及に於て永久殖民地を建設するの許可を得た、而してその子ネコ (Neco) 第二世の治に至りては、セース (Sais) 及びノークラチス (Nothis) 等の諸市府は常に希臘の殖民を以て充され、是等の人民の勢力は優にその通商及び智文の行爲を以て、埃及の盛衰を左右すると出来る程であつた、而して此殖民の立脚地こそ、後世歴山大王の埃及を侵すに當り、其名を冠してアレキサンドリヤと呼ばるゝに至つた市府を指すのである、これらの事實を吾等は能く心中に記憶せねばならぬ、何となれば文明の今日あるは、其のもと希臘に負ふ所頗る多く、單に智識上のみならず、社會上にもまた産業上にも、其負ふ所少くないからである、而してこれらの事實を知るに於ては、勢い希臘のアルファベット分布の模様を容易に知ることが出来るので、西方に於て拉丁語を通じて歐洲のアルファベッ



トとなりしとがわかるのである、實に希臘といへば單に一小モレア半島を書けるものにすぎないが、當時の大希臘といへる語は今日の大不利顛といへるに同じであつて、不利顛の本島が世界の各地に殖民地を有するが如く、希臘も亦當時の文明世界の沿岸到る處に殖民地を建設したのである、斯くて英語及びそのアルファベットが文明世界の過半に通用せらるゝに至りしが如く、またヘレンの文明及びその文字は地中海地方にはびこり、西紀以前に在りて既にイベリヤ、ゴール、エトラスカン、拉丁及びルーニツク等のアルファベットを生み、其後はまたゴス人、アルパニヤ人及び其他にも傳播するに至つた。

古言語學、即ち碑銘及び其他の記録等の解釋が、アルファベットの歴史研究に必要欠くべからざる關鍵なるとは、こゝにいふ迄もないが、其材料たるや、成るべく浩瀚なるを要する、而してその上アルファベットの發達分布に、直接に關係あるものが宜いのであるが、併しかの「プリス蘆紙書」及び「死者の書」の如きは、貴重なる記録の附録としては深き興味を興ふる者で、近來の語を借りていへば、人類の證書とも稱すべきものであらう、これらは埃及にて發見せられたる用紙中、最古の標本なる蘆紙、即ち希臘のバビリに記したものであつて、西紀前三百年の頃から西紀七百年の頃迄、約一千年の間希臘に於て使用せられて居つた、之に付てケニヨン (Kenyon) 氏は「吾等はアリストートル及びメナデルの時代に於いて、人が書冊に用ひた所のものを知つて居るが、更に古代のピ

ンダル及エスキラスの時代、即ちホーマーの頃に至つては、何を用ひたか、知るを得ないといつて居る、元來此の蘆紙は、埃及に於ては極めて古い時代から、書用に供せられて居たが、希臘に至りては西紀前五世紀の初期以前に、使用せられし哉否や、確然とは居らぬ、此頃、澤山發見せられたる文書の、蘆紙に記されたるものは、皆非文學的のものゝみで、事務を取扱つたものである、例へば收税吏の請取書であるとか、離婚後に嫁粧を廻送せる承認書であるとか、財産分配遺言書であるとか、醫者の検屍狀であるとか、其の他家賃支拂書、擔保證書、家督相續登記書、及び會食の招待狀等である、尙外に數多の家族間の手紙等もある、今、當時の人情の一端を伺はんが爲に、父が子に送りし手紙を示さう、曰く「汝の好む所は何なりとも告げよ、余の與ふ所ものは、汝の望を叶ふべし、然らば我子よ」、而して之に對する答書で、子が父に送りし手紙を示さば、文章が頗る滑稽である、曰く「テオン (Theon) は恭しく吾が父テオンに呈す、父上が余を伴はずしてアレキサンドリヤに赴くは、父上の爲には頗る結構なるべし、余は父上に手紙をも書かず、語らず、袂別の辭をも呈せざるべし、而して若し父上アレキサンドリヤに行かば、余は父上の手を握らず、また再び父上を敬せざるべし、此の如きは、是れ父上が余を伴はずして赴くの時、出來する事柄なり、……余に琴を送らんとを希ふ、若し送らざれば、余は食はず飲まざるべし、然らば」。

希臘のバビリ(蘆紙書)の始めて發見せられたのは、ヘルクラチアム(Herculaneum)に於ていあつ

て、千七百五十二年のとである、これは千八百以上の焦げたる巻物であつて、木の箱に入れて有るが、それは疑もなく一のルシウス、ピソ、セーゾニアス(Lucius Piso Cesonius)圖書館の一部分であつて、該村落の古蹟に於て見出されたものである、此のバビロンの発見せられたときは、巻物の破れたる所があつて、解釋に困難であつた、今も、尙全体を解釋するには至らないので有る、其字は小さく黒く記されて有るが、其内容は單に古語の研究の援助となるのみにて、これより以上は何等の價值を有して居らない、フィロデマス以下エビキユラス學派の第三流位の哲學者のものせる物理、音樂、脩辭及び其他の問題を含んで居る、其後二十有五年を経て、他の蘆紙の巻物が、埃及に於て、復発見せられた、其處は多分フェヤム(Fayum)の古蹟であつたと思ふ、其中の一卷には、勞働に使用せられたる農夫の表を、書いたものなともある、而して千八百二十年に至りメムフィスのセラペアム(Serapeum)の邊りに於て、數卷の書を発見したが、是れこそ實に重大なるものであつて、西紀前第二世紀頃の希臘文字を解釋する鍵を、提供したる者である、是より後は、時の進むに従つて、續々重大なる発見があつた、其中で、最古の例として知られて居るのは、千八百八十九年グロブ(Grobb)に於ける木乃伊の一棺より、フリンダースベトリー教授の発見せる者であつて、西紀前第三世紀のものである、斯くの如く澤山のバビロンが発見せられたが、多くは皆非文學的のものであつて、遺言又は請願等の類は殊に多い、尤もその中に、唯二個の貴重なる遺物が在つた、それはプラトリーのフェド

ー(Phaedo)及びユーリピデスのアンチオープ(Antiope)である、其他尙、アリストールの△*Byzantium*, *Hokrsia*、ハイパリダスの談話の一部をなせる、ヘロダスの滑稽談等より、ホーマー、デモステネス及イソクラテス等の論文も発見せられた、其中、ヘロダスの滑稽談は、二千年後の今日に於ても尙頗る面白い、ウイブレー氏はこれに付て記していふに、「彼等は實に二十餘世紀を人目に觸れずして隠れて居つた、而してヘロダスの物せる所は、希臘にあらすして人類にある、故に毫も古物研究の必要を充さない、即世界と共に推移して、人類の存する限りは朽ちずに存するであらう、古物學者は、希臘風俗の概要を捕へんとして、幾年月を費して居る、而して其の結果する所は何ぞと問はば、一地方の特色を乾燥無味に集めたものと、いふ他はないであらう、……ヘロダスは唯に概要を畫かず、心中に印象を興へたのである、而してその一滑稽は、能く數千年を経るも、尙惶々として人生に訴ふる所あらんとするのである」といふて居るが、誠に恰當の批評といふべきである。

尙他に澤山の発見があつたが、その中には、メナデルの劇の斷片をも含んで居た、更に澤山に見出されたのは、グレンヘル及びハントの二氏で、中部埃及の首府なるオキシリнкаスの古蹟に於て希臘のバビロンを數千個に上る程得た、之は千七百九十六年から、其翌年にかけてのものであつた、此遺物の全体は未だ公にせられて居らないが、これを解釋し終るには、なほ多年を要することであらう、而してその文學書類中には今に有名なるものを含んで居る、かの基督がロジヤ(Lugia)の講

話集の如きも、この中に含まれて居るのだ。

斯の如く種々の発見があれば、凡ての疑惑は解けたであらう、かといふに決して然らずで、なほ他に希臘アルファベットの歴史に疑惑を興ふる材料がある、彼ナイル河の第二瀑布に近き、アブシムヘル (Abu Simbel) の巨像の碑銘の如きは、其一例であるが、これらのとは、あまり重大のことでないから省略して置かう、之を要するに、前來抜萃し略述し來れる所によつてみるに、是等の貴重なる遺物は、吾人の過去に對する智識を増すの功があるのみでない、若し是等の記録なかりせば、人類の思考感情は進歩する所少かつたであらう、實に、吾等はこれによりて、人類の地球上に生存するや、代々の後には、人性に偉大なる變化を來すものであることを知るのである。

今より少しく、フェニシヤのアルファベットの歴史に就いて、要を摘んで話をして見やうと思ふ、而して、便宜の爲に、次の表を掲げて、讀者の指南としやう、此表はカノンテロールが、その著「アルファベットの歴史」中に書いたのを、抜萃したのである。

フェニシヤ語に關係する所のものを三大別して左の如くする。

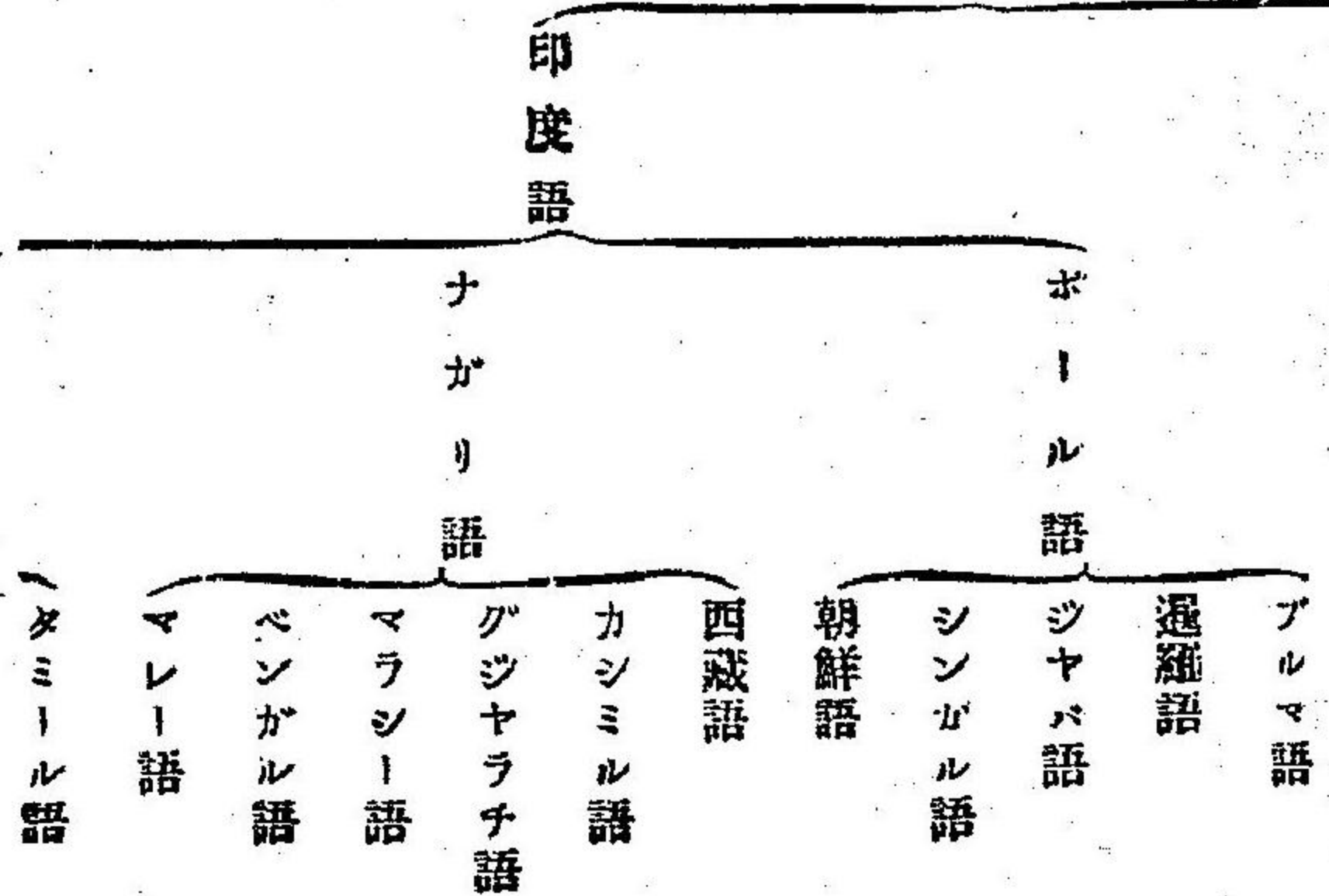
ヘブリー語  
ギリヤ語  
エチオピア語

第一、アラメヤ語 (Aramean)

亞刺比亞語  
ペルシヤ語 (Pehlevi)  
アルメニヤ語  
サヨールサヤ語

エチオピア語——アムハラ語 (Amharic)

第二、サマア語



ドラギテヤ語  
テルク語  
カナレース語

希臘語

拉丁語

露西亞語

コブチツク語

第三、ヘラス語……………

之より右の三大語に付いて、略説して見やうと思ふ、先づ、

第一、アラメヤ語、この語はメリボタミヤの高原地方アラムより出でたるを以て、アラメヤ語と稱せらるゝのである、西紀前七世紀の頃より、亞細亞のアラム地方の商用語となり、専ら埃及バビロン間の貿易に用ひられ、其後はバビロン朝廷の官用語ともなつたが、遂に宗教上の種々の原因から相分れて、數種の國別語を生ずるに至つた、その第一に地方的に區別せられざる場合には、バルシ、ヘブリー、シリヤ、モンゴル及び亞刺比亞の數語になつた、また此のアラメニヤ語は偶然にも亞細亞の五大宗教ゾロアストル教、猶太教、基督教、佛教及び回々教の用語ともなつた、今前の表によりみるに、第一はヘブリー語で、これは今は碑銘等に刻まれてあるのみである、第二はシリヤ語であつて、一時は基督教文學の主要なる言語であつたが、今は使用するものが頗る稀である、第

三はモンゴル語であるが、これには奇妙な歴史があつて、カノンテールは、その著に於て詳しく記して居る、初シリヤ語に起原せるもので、ネストリア派の傳導師が、亞細亞に傳へたものだ、即西紀四百三十一年のエフェサスの會議に於いて、基督に神人兩性あるとを是認せざるものは外道なりとして對せられ、數多のネストリヤ派の人々は、波斯に逃れ、それより東方に旅行し、神の福音を説いた、ところが大に成功して、その用ひたるアルファベット迄大に用ひられて、回々教の擴張時代迄引續いた、第四は亞刺比亞語で、アラメヤ語中シリヤ語に最も類似せるものである、回々教の用語となり、美麗なる風を以て書かれた、而して其後、其仲間なるセミチツク語を逐ひ、又小亞細亞スレース、シリヤ及び埃及より希臘語を逐ひ、更に又、亞弗利加の北部に於て拉丁語を排斥し、今日に於ては一億以上の人類の用語となつて居る、かの回々教の經典も此語で記されて有るので、或る人が「貿易は旗に従ふが、言語は宗教に従つて居る」と言つたが、尤もの言である。

今日の所謂亞刺比亞數字は、もと印度から起つた者であつて、東方から亞刺比亞の商人が持つて來たので、此名があるのであらう、中世になつてから、西班牙に渡り、それから歐羅巴全体に擴がつたもので、英國に渡つたのは、多分第七世紀の頃であつたが、併し此の數字は果して印度人の發明したものであるか、或は又一部の學者のいふ如く、印度へは西方の商人より傳來し、それを再び西方に傳へたるものであるか、未だ確かにはなつて居らない、元來物を數へるに五指を以てするの

は、何れの國に於ても同じく、最初の方法であつて、漸く高位の計算をなすに至つて、始めて記號を以て、これを示す様になる、即ちアルファベットの記號を用ふるに至るのである、第七十九、八十圖に掲げたのは埃及及びアッシリヤに於いて用ひた數字記號を示したもので、こゝには一十百等の數のみを擧げたのである。

圖九十七第 埃及の數字  
I=1 IIIII=5 n=10 IIIII=15 nn=20  
C=100 X=1000 T=10000  
XXXXCCnnnn=4434

圖十八第 ギリシヤの數字  
I=1 X=10 Y=100 C=(10x100)=1000  
IIIIIC=4434

亞刺比亞數字の使用は、歐羅巴に於て初めは反對に遇ひ、十五世紀の頃迄は、一般に通用するといふに至らずして、唯書籍の枚數の計算、及び數學用として用ひられたるのみであつた、併し彼の羅馬數字に比して其便利なるとはいふ迄もないので、遂に大勢は便利を主として、亞刺比亞數字を一般に採用するに至つた、而して此の數字も亦場所と時との推移により、多少の變化は免れない、今その變化をカノンテール氏が表に製したるを掲げて見やう、但し印度以降のものゝみで、その創製に至りてはわからないから記さぬ。

第五のペルヰ、第六のアルメニヤ、及び第七のデョールヂヤ語はアラメア語から出たものであるが、それは大概波斯語又はイラニヤ語を通じて來て居るのだ、ペルヰ語は普ゼンド教、即バルシ宗教の經典に書かれた文字であるが、アルメニヤ語及びデョールヂヤ語

に至りては三四の希臘文字をも加へて居つて、古代の波斯文字の生存して残れるものである、因にいふ、左に掲げた表に、印度バクトリヤ語は、イラニヤ語の後裔として、之に關係があるから、記したのであつて、かの王族にして始めて佛教に改宗せる阿輸迦王の、有名なる布告の文字も亦これである、而してそれは今でも、ペシワルに近き岩石に刻銘が残つて居る。

アラビヤ數字					印度數字		アラビヤ數字	
歐洲		ゴパ	印度		アラビヤ		アラビヤ	
十四世紀	十二世紀	アラビヤ	十世紀	五世紀	一世紀	十世紀	五世紀	一世紀
1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9	9
0	0	0	0	0	0	0	0	0

る、アビシニヤ最初のアルファベットは、之をエチオピア語又はアムハル語といふが、もとはサベヤ語から出て居る、サベヤ語から傳來せるもので、最も主要なるものは印度語であつて、これから分れて出來た言語は、今日世界に通用して居る者の過半を占めて居る、故にこれを一々略説するとし

ても、なか／＼大部になるから、茲には全く之を略するとした、前に掲げた分類表で充分澤山であると思ふが、尙詳しく知りたいと思ふものは、カノンテールルの著書を見るが宜しい。

第三、ヘラス語、フェニシヤのアルファベットが西方に擴がるに當つて、第一に其餘澤をうけたものは希臘人である、而して亞細亞及び馬來群島等に傳來せるアルファベットは、依然舊形を保存し、主として子音を有し、母音を別に區別しなかつた、然るに同じフェニシヤのアルファベットの流を汲む所の希臘語に至つては、前者と異り、母音を別文字にて現はし、これが如何なる音にも記號を與ふるに至つた、また他に喉音及び齒頭音を加へて新用に供し、他の文字を簡單にした、而して遂に、セミチック文字の通例として、右より左に讀むべきを改正して、左より右に讀むやうにした、是等の希臘語及びそれから傳來した諸國語の變化は皆徐々に行はれ、殆ど知覺し能はざる程遅々として變化して行つた、即ダーウィンの語を借りていへば、恰も生物に於けるが如く、世界の文字もまた漸次「變化を以て下り」來れるもので、一般に有機体に於けると同様なる歴史を經過して來て居る、これを以て日月の進歩と共に益々完全の域に赴かんとしつゝあつて、人の力によりてなすも皆自然に従つてなされつゝあるのだ、今次にヘラス語より推移傳來せる四個の語に付て、少しく述べて見やう。

(一)希臘語、古代希臘にてヘラスと呼べるは、決して一定の地域を限りて稱せるにあらずして、

ヘレン人の住居地を指したのである、之を以てスミルナ(Smyrna)シラキウス、アゼンス其他如何なる地方でも、ヘレン人の在る所を指してヘラスといふたのである、而して當時のヘラスの地は、希臘本島に於ては山嶽極めて多く、地形自然に區々に分たれ、従つて數多の小國家を作りしが、これ等は皆今世の郡市程の大さあるにすぎない、是れ實にアリストートルが「國家の領土は辯士の聲の達する限りより大ならざるべし」といへる所以である、而して此の區劃は常に政治上の不調和を致し、四十個の地方語をして容易に同一ならしめなかつたのである、然るに波斯軍侵入の事あるや、マラトン、サラミス等に戦勝を得、こゝに漸く「共同祖先の土」なる感念を全島の人民に與へ、アゼンスの盛大なるに及んで、その文化の勝優なる、遂にアルファベットの一定を遂げた、當時は既にアルファベットに二大脈があつて、一はアイオニヤ風で、他の一はカルシヂヤ風であつたが、前者は後者よりも一層フェニシヤ文字に遠ざかつて居て、西紀前四百八十三年を以て、アゼンスの採用する所となつた、是れ今日希臘古典語と稱する者であつて、スラヴ語及びゴプト語の起原をなしたものである、而して彼のカルシヂヤ語に至つては、西部歐羅巴のアルファベットを生んだのである。

(二)露西亞語、今は昔、希臘語が露西亞に輸入せられたといふが、それはどんな風になされたのであるか、最も信頼すべき傳説によつて、これを略説して見やうと思ふ、ブルガリヤのジョンエキザルク(John Exarch)なる人が、第九世紀に記せる所によるに、「以前は露西亞人には書物といふもの

がなかつたが、繪畫により又は木細工により讀了するの風はあつた、然るに彼等が洗禮をうくるや、是非なく希臘文字及び拉丁文字によつて、スラヴ語を記すに至つた、其後多年間はこの儘にすぎたが、神の慈悲はまたスラヴ人にも同様に及んで、シリル (Cyril) と呼べる哲學者を露西亞に下し給はつた、此の人は正義なる且つ忠實なる學者であつて、三十八文字のアルファベットを發明したが、是れは根本を希臘語に採り、これにスラヴ語を附加したものである、その後、音の異同よりして、シリルのアルファベットに尙十個を加へたことがあつたが、再び減じてもとの如くになり、今も當時の繁雜なる形狀を存して居る。

(三) ヨプト語、これは嚴密にいへば、羅馬人の治下にある埃及人のヨプト語といふべきである、當時埃及の羅馬に屬するや、シーザー、オーガスタス等の名士、この地に知事となつたが、希臘語の勢は滔々として侵入し、遂には土着の耶蘇教信者も、聖書を記すに希臘文字を用ひ、たゞ希臘文字で表はすを得ざる音のみ、六個の埃及古代のデモチック語にて記すとした、尙また回々教國にも流用するに至つたが、遂には亞刺比亞文字に驅逐せられ、單に禮儀上のみ使用せられ、僧侶ならでは解釋するを得ざる程になつたのである。

(四) 拉丁語、この語は人の能く知る如く、すべてのアルファベットの中で最も重要なるものである、前にも述べた如く、此の語はもとヘラス語中カルシヂヤ (Chalcidian) 型より傳來したものであ

る、カルシヂヤ型の語とは、多島海の一島、エウペアのカルシス (Chalcis) に於て使用せられたるが爲に、此の名を有するので、こゝから南部伊太利に於ける希臘人殖民地の一に移つたのである、而してこれは伊太利最古の文字であつて、全く希臘の舊式文字に習ひ、右から左に讀んだので、その伊太利に入つたのは、西紀前八世紀の頃であるといふことがわかる、伊太利に移殖せられた初めに於ては、半島内に、アムブリア語、オスカン語、エトラスカン語及びその他種々のアルファベットが存在したが、これらは遂に廢れて、拉丁語のみ唯り優勝の地位を占め、羅馬帝國のアルファベットとなり、次で基督教國のアルファベットとなり、永劫に盛榮を極むるに至つた、實に西部歐羅巴に希臘羅馬の文化を移植したのも、此の文字であり、また世界を通じて文明の炬火を照しつゝあるのも、此の文字である、何と盛大なる事ではあるまいか、而しても此の文字は希臘文字に出でたに相違ないが、スラヴ人の文字とは異なり、頗る簡易で一種の特色を有して居る、最古の印度歐羅巴語、即ちアリヤン語に於ては、十二の子音と三個の母首、I、A、Uを有して居たが、拉丁語は遂に之にEとOを加へて、母音を完成した、また初め拉丁語は希臘文字中のXを用ひずして、Cを以てK及びGの發音をも兼ねしめて居たが、後にCの字の下部に一横線を加へてGを作つた、同様にまたPの字の下部に曲線を附してRの字を作つた、而してまた新らしき希臘語にては、Qの字を除いたが、拉丁に於ては保存して居る、が併し、此形の變化を必要ならしめた原因に至つては、

説明が困難であつて容易でない、故にこゝには新舊拉丁及び希臘語の、形の間に存する變化の數個の例を與へて、充分にしたのである。

古希臘	古希臘	古希臘	古希臘
Γ Δ Α Π Ρ Ξ	Α Β Γ Δ Ε Ζ Η Θ Κ Λ Μ Ν Ξ Ο Π Ρ Σ Τ Υ Φ Χ Ψ Ω	Α Β Γ Δ Ε Ζ Η Θ Κ Λ Μ Ν Ξ Ο Π Ρ Σ Τ Υ Φ Χ Ψ Ω	Α Β Γ Δ Ε Ζ Η Θ Κ Λ Μ Ν Ξ Ο Π Ρ Σ Τ Υ Φ Χ Ψ Ω

ンシヤル (Semi-uncial) 字型は其の最も主要なるものであつて、字型學の問題となつて居る點である、元來愛蘭に於いて、この文字の生じ得べき道理なきに、俄然第六世紀に至つて、同島は西歐羅

羅馬帝國の最初の頃使用せられたる文字の風に二種ある、一はキャピタル即ち支那の階書の如きもので、他の一はカーシヴ即ちその行書の如きものである、階書は大に角張りて裝飾は少ない、今日英國等で行はるゝ如く、多くは碑銘其の他これに類するものに使用したのである、カーシヴ即ち行書は今日の英國の小学型の根原をなすものであつて、多くは通信其他迅速を貴ぶ書類に用ひられたので、今日の英語の細字 (short hand) は先驅をこゝに有して居るのである、またかの書風といふが如きも、亦此の行書に出でたるものである、愛蘭の有名なるセミア

巴の美字の本家となり、中世紀に於いて最も偉風ある字型とせられて居た、是れ思ふに、第五世紀の頃、僧侶がゴールから輸入し來り、愛蘭僧園に於て美字となつたのであらう、之を以てチユートン人の侵入の時に、伊太利、ゴール及び西班牙は荒されたが、愛蘭のみ特に彼等の奪略を被らず、高雅なる美風を保つことを得たのである、而して僧侶は之をノーサムブリヤに傳へ、それよりシヤールマン大帝の代に、有名なるツール (Tours) の學校に傳來したのである、此の字は清麗にして面積を要せざるを以て、第十二世紀の末迄は便宜として、大に使用せられたが、黒字 (Black Letter) が活字發明の後、一時使用せらるゝ様になり、遂に全く用ひられざるに至つた、此黒字といふのは、僧侶の書いた粗雜なる文字に模倣したのであつて、十六世紀の初め迄使用せられて居たが、羅馬人が英國に入るに及んで廢れた、是より吾等は少しく拉丁のアルファベットが英國に入るに當りて、改定された變化を少し許り述べて見やう、英語の文字の順序は、フェニシヤ文字に近くて、その名は拉丁語と同主義によつて出來て居る、また吾等が目を開いて英語と拉丁語とに一瞥を與へるとき、直に知らるゝは、英語にはホチチャツクの變化があることである、即ち拉丁の I を英語にては I と J とにし、また VV 或は VU を W に變じて居る、Y 及び Z は希臘語固有の發音を有して居る文字で、その拉丁語に入つたのは、極めて新らしいことである、之を以て英語にも亦新着の文字であつて、アルファベットの最後に結びつけられた所以は茲にあるのだ、それからまた、英語の中には使用の極めて少な



いものがある、KはOの役をなして剩らしめ、Q及びXもまた拉丁に必要であつた程は、英語に用をなさない、故に今日英語で毎日の實用に適して居るものは二十三字であつて、三十二音を指し示

成生のトヲベアフルア語英

古希	エウロ	拉丁	アソヤ	ミヌ	ベチ	羅馬
A B Γ Δ E F H I Θ J K Λ M N O Π P Ϛ T Y	A B Γ Δ E F H I K L M N O P Q R S T V Y	A B C D E F Z H I K L M N X O P P Q R R S T U V Y	A Bb C γ δ ε ζ η θ ι κ λ μ ν ξ ο π ϑ ρ ς τ υ φ	a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z	a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z	a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z

獨逸語にて黒字を使用しつゝあるに拘らず、英語では十六世紀的の黒字を廢して、今日の文字を用ふるに至つたのである。

ルーン型のアルファベットは、スカンデナヴィヤ人の作れるものであるが、其起原は他から傳來し

て來れるものであるらしい、スカンデナヴィヤ半島では、毫も象形文字又は繪畫記號等の跡のないのを見ても知ることが出来る、而してその起原となつた文字は、何處より來れるやといふに、或るものは之を以てフェニシヤ文字から來れるといひ、或る人は拉丁から傳はれるものであるといふ、カノンテール氏も亦これに付て別に一説を立て、希臘語より傳來したのだといつて居る、即ち西紀前第六世紀の頃、ゴツス人はバルチック海の南部地方及びギヌチエラの東方に迄、群り來りしが、當時は黒海の北岸にある希臘の殖民地と通商をなしたるを以て、これから希臘語のアルファベットを得、またこれをスカンデナヴィヤに傳へたものだといふが、實際何れの説が眞實なるや、未だ決定せられない、今後と雖も容易には明かにならないであらうと思ふ。

思ふにルーン型の文字は、その角張りし風からみるときは、もと木、石、又はその他の堅質の物に刻んだのであらう、是れは近來發見せられた少許の例によつても分るのである、而してその本源たる最初のゴツス風のアルファベットは、いろは主義に従つて、フンルク(Futhorc)と呼ばれて居る、フンルクとは即ち、その初から六字を連續したもので、f、u、h、o、r、c、である、これらのアルファベットは總てを三大部即ち三大アエット(aetts族)に分つて居る、是れはローリング嬢(Miss Gertrude Rawlings)の著により、能く説明されて居るによつて、次に少しく綱要を摘んで見やう。

嬢のいふ所によれば、スカンヂナビヤ、アングリヤ及びマンクス(Manks)等のルーン文字は、此種の中で最も古い地方語であるのだ、而して此のルーン型の文字を以て記したる碑銘は、佳なり廣く配布されて居る、ダニユーヅの沿岸にもあれば、亞米利加にも見出され、またマン群島にも発見せら

字文ソール 圖一十八第

Q	A	D	F	R	X	P	N	T	I	S	J	B	Y	S	↑	B	H	M	T	↓	W	X	W	W	W	W	W	W
FUMOROGW							HNIYEOPAS							TBEMLEDOO														

るゝのであるが、是れ實に該人種の移住の跡を示して居るのである、その最も古きものはケント洲のサンドキッチに於て発見されたものであるが、特に興味ある例はダムフリエシヤニア(Dumfriesshire)に於て見出されたる、彼有名なるルズウエル十字石(Rathwell Cross)であらう、即ち此石には、第七世紀の牧養詩人セードモン(Cædmon)の作れる「神聖十字の夢」なる詩が刻んである、また亞米利加航海の當初に於ても発見せるもの少くない、此の舊アルファベットの廢れたのは、北部歐羅巴の人民が耶蘇教に改宗したときで、ゴッスの一僧正ウルフィラス(Ulphilas)が、拉丁語を折衷して神の福音を譯してから、茲に拉丁文字は用ひられるに至つたのである、ウルフィラスの書は、今でもウブサラ(Ubala)の大學に保存してあるが、紫の紙に金銀色を以て書いたもので、一見するの價值がある。

こゝにまた紀元第五世紀の頃よりオガム(Ogam)と呼ぶ一の奇なるアルファベットがあつたが、それはブリテン群島内に於てのみ用ひられた者である、或る學者は之を以て、ルーン文字から出で

たものであるといふが、其の實羅馬文字から轉化せるものであるといふ方が眞實らしい、此の問題に付てライヌ(Rhys)教授のいふ所によれば、オガムとは「言語の巧なる使用」といふ意味であるといふ、此の文字は縦横の線により四群に分れて書かれる、一群各五字宛で、第一はB、L、F、S、Nで、地上線の下に書かれ、第二はH、T、D、C、QNで線の上に書かれ、第三はM、G、Ng、F(?)、Rで縦に書かれ、第四は母音A、O、U、E、Iで右方に書かれたのである、カノンテール氏は「オガムはもとルーン文字に由来せる者で、彫刻師が彫刻の必要に際し、オガム型に變化せるものなりといひ、其の證據としては、オガム文字の名とルーン文字の名とは一致して居るではないか、加之、オガム文字の見出さるゝ所は、皆スカンヂナビヤ人の殖民地が樹立せられた地である」といつて居るが、ライヌ教授の言ふ所によれば、「蓋し羅馬字から傳來せるものなることは、文法上より見ても確である、併し只それを採用するに當り、字形を餘り多く變化し過ぎたのである」といふ、兎に角、其何れが是なるやは、大体の判断にすぎないのである、而して此文字の存する地方は、愛蘭に最も多く、他に蘇格蘭にもウエールスにも、また英蘭の西南部にもある。

以上を以て、こゝにアルファベットの談話を終るが、縦令簡單にして平凡を極めて居るも、今日の英語の二十六文字の起原及歴史を、一通りは話し得た積りである、即ちアルファベットの傳來に關し、完全無缺の系統を立つることは出来ない、否な將來に於ても出来ないであらうといふことを知

つた、而して之と同時にまた人智の及ぶ範圍内に於いて、今迄は幾多の説の中、ド、ルーゼ氏の主張する所が、最も恰當に近い様であつたが、多島海群島に於て發見せられたる記號の材料によれば、氏の説も採るに足らなくなつたのである。

要之、有史以前よりこのかた、二百五十餘のアルファベットが出来たが、残つたのは僅に五十餘にすぎない、而して世界中最も盛に行はれて居る文字は、羅馬字亞刺比亞文字及支那字を以て主なるものとするが、その中でも、羅馬字は最も有力であつて、將來に於ても益々擴張され、優勝の地位を得るであらうといふことは、吾等の疑を容れざる所である。

### 文字のはなし終

明治三十六年十一月一日印刷  
明治三十六年十一月十五日發行

文字のはなし奥付  
定價 金參拾錢

編輯者 青木武助

發行者兼 吉川半七

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

印刷所 成章堂

東京市神田區雉子町三十二番地

發行所 弘文館

發賣所 弘文館關東代理店

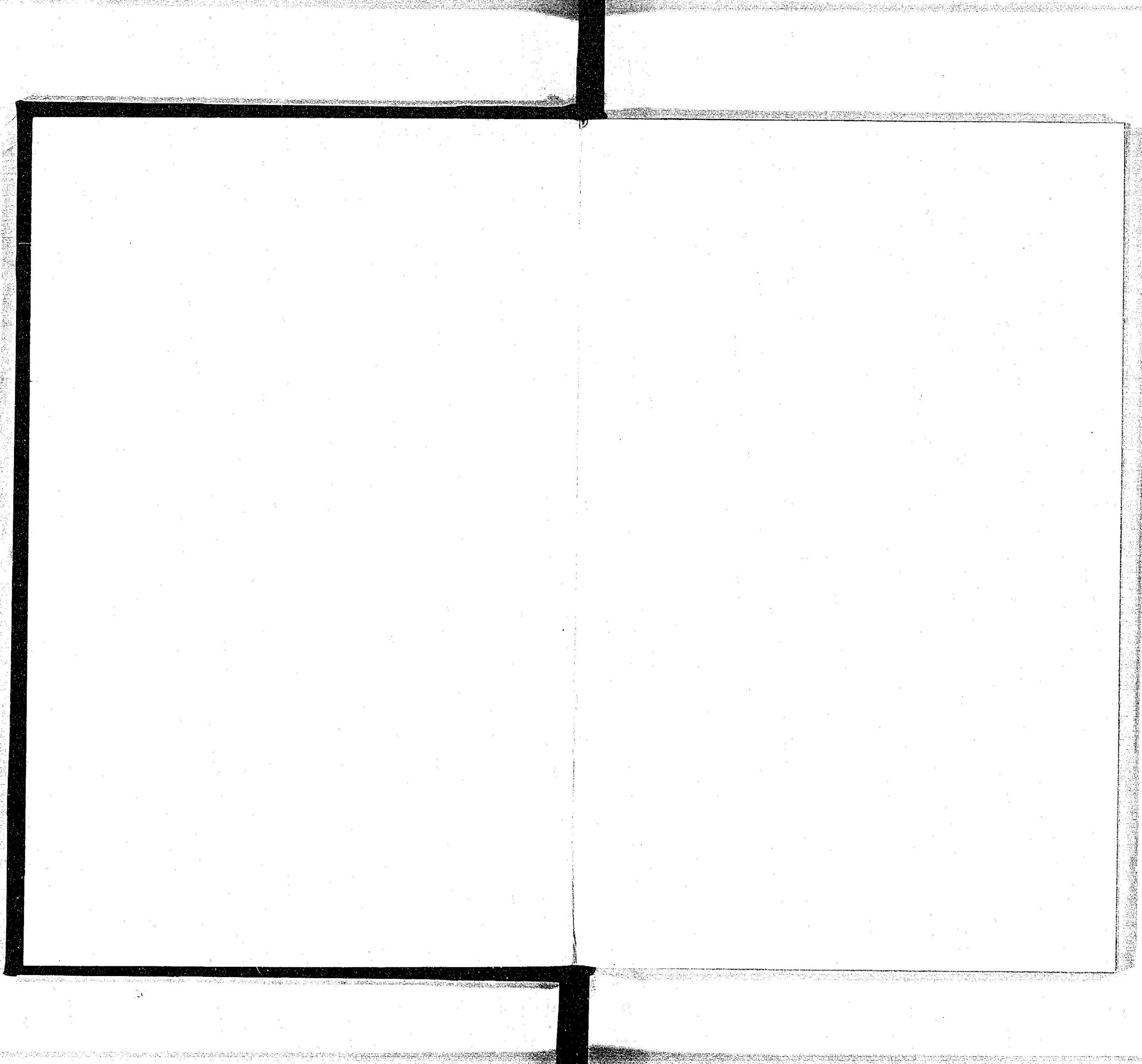
同發賣所 弘文館關西代理店

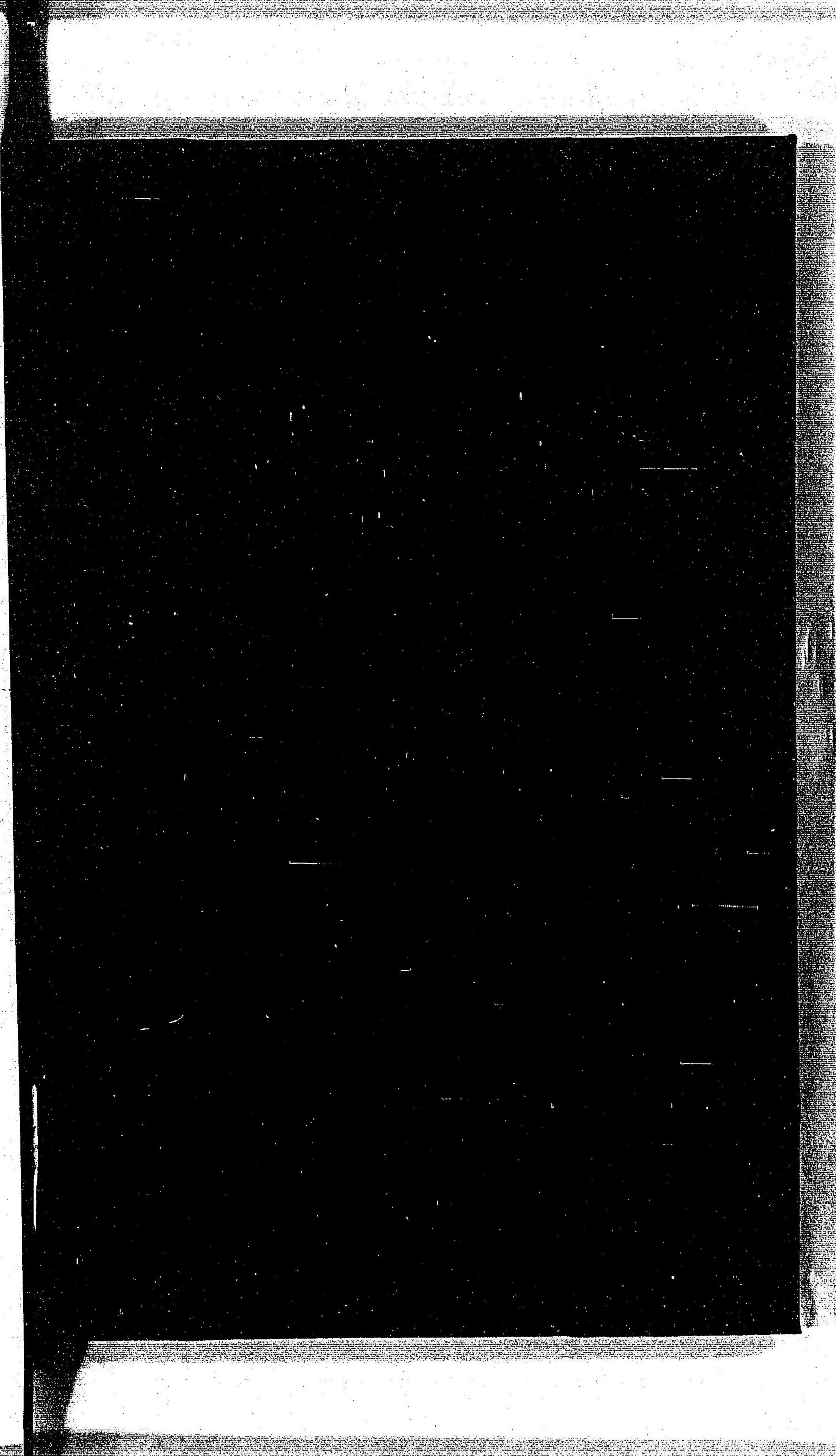
東京市京橋區南傳馬町一丁目

東京市日本橋區通り三丁目

大阪市東區南本町四丁目







801.1  
A587m

076647-000-9

801.1-A587m

文字のはなし

青木 武助/編

M36.11

DAA-0064



